

茨城県教育財団文化財調査報告第368集

上境旭台貝塚3

中根・金田台特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

平成 25 年 3 月

独立行政法人都市再生機構
首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第368集

かみざかいあさひだい
上境旭台貝塚3

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

平成 25 年 3 月

独立行政法人都市再生機構
首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部
公益財団法人茨城県教育財団



調査区全景（南東上空から）



第2号貝層出土ミミズク土偶

序

茨城県では、つくば市を日本における科学技術の研究開発の中核として、さらに国際交流の拠点としてふさわしい街にすべく整備を進めております。

この新しい街づくりの一環として、つくば市と独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部は、市と首都圏を直結する「つくばエクスプレス」の沿線開発を一体的に進める土地画整理事業を計画的に推進しています。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である上境旭台貝塚が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が住宅・都市整備公団つくば開発局（現 独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部）から開発区域内における埋蔵文化財発掘調査事業の委託を受け、平成19年4月から平成23年12月の期間に計6次にわたりこれを実施しました。平成20年1月までに実施したA・B・C・D区の一部の調査は『茨城県教育財団文化財調査報告』第325集として、平成21年10月から12月に実施したB・D区の一部及びF区の調査は『茨城県教育財団文化財調査報告』第364集として、それぞれ刊行しているところです。

本書は、平成23年度に調査を実施したB・D・E区のうち、これまで未調査部分の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社（現 独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部）の委託により、財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が平成23年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市栄字毘沙門439番地の1ほかに所在する上埴^{ウツノ}魁台貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成23年10月1日～12月31日
整理 平成24年7月1日～平成25年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長櫻村宣行のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 皆川 修
首席調査員 荒蒔克一郎
調査員 前島直人
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、首席調査員荒蒔克一郎が担当した。
- 5 貝塚から出土した動物遺体については、調査時に大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館研究部教授西本豊弘氏を講師として招聘し、取り上げ方法などについて御指導いただいた。同定・分析についても同氏に依頼し、結果は本文中に観察表として掲載するとともに、考察は付章1として巻末に掲載した。第19B・19C号住居跡で検出した白色物質及び灰褐色物質の自然科学分析は、株式会社バリノサーヴェイに委託し、考察は付章2として巻末に掲載した。第19C号住居跡から出土した網代状炭化物及び炭化材の取り上げについては、筑波大学準教授松井敏也氏に御指導、御協力いただいた。同網代状炭化物及び炭化材の保存処理及び種同定は、株式会社吉田生物研究所に委託し、考察は付章3として巻末に掲載した。また、栃木県立博物館学芸部長上野修一氏にはミミズク土偶について、明治大学教授阿部芳郎氏には貝塚の調査方法などについて、それぞれ御指導いただいた。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅺ系座標に準拠し、 $X = + 12,160 \text{ m}$ 、 $Y = + 26,280 \text{ m}$ の交点を基準点 (A1a) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 HG - 遺物包含層 P - ビット PG - ビット群 SI - 堅穴住居跡 SK - 土坑 SM - 貝層

遺物 B - 骨角歯牙製品 DP - 土製品 P - 土器 Q - 石器・石製品 S - 貝製品 TP - 拓本記録土器土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・赤彩

 炉・炉床面

 灰範囲

●土器

○土製品

□石器・石製品

■骨角歯牙製品

▲貝製品

× 獣骨類

上記以外の表示については、それぞれの頁に凡例を示した。

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 現存値は () を、推定値は [] を付して示した。計測値の単位はm、cm、gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 堅穴住居跡の「主軸」は、炉を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 $N - 10^\circ - E$ ）。それが不明の場合は、最大幅をとる軸線を長軸とし、主軸方向に準じて表示した。

- 7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したものと及び欠番にした遺構名は以下のとおりである。

変更 SX 1下層・中層・上層 → SI19A・19B・19C SK234 → 第1号火葬施設 SK247B → SK294

SK272B → SK274 SK292 → SI19-P13 SK293 → SI19-P11 PG 6 → PG 5 PG 7 → PG 3

欠番 SX 1 SK234 SK247B SK272B SK292 SK293 PG 6 PG 7

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
上境旭台貝塚の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 縄文時代の遺構と遺物	13
(1) 竪穴住居跡	13
(2) 土坑	44
(3) ビット群	70
(4) 斜面貝層	75
(5) 遺物包含層	127
(6) 遺構外出土遺物	129
2 中世の遺構	130
火葬施設	130
第4節 まとめ	131
付章	141
1 上境旭台貝塚の動物遺体	141
2 上境旭台貝塚採取の白色物質・灰褐色物質の自然科学分析	149
3 上境旭台貝塚出土木製品の樹種調査結果	158
写真図版	PL 1～PL26
抄 録	
付 図	

上境旭台貝塚の概要

遺跡の位置と調査の目的

上境旭台貝塚は、つくば市の東部、桜川右岸の標高24～27mの台地斜面部に立地しています。中根・金田台特定土地区画整理事業にともない、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成23年度に1,038㎡について発掘調査を行いました。



調査の内容

今回の調査で、縄文時代後期後葉から晩期前葉（約3,000年前）の竪穴住居跡7軒、土坑70基、ピット群2か所のほか、斜面貝層2か所、遺物包含層1か所などを確認しました。主な出土遺物は、多量の縄文土器や土製品（土偶・耳飾りなど）、石器（鎌・石皿・磨石・石錘など）、石製品（小玉・勾玉・石棒・石剣など）、骨角歯牙製品（牙鏃・釣り針・刺突具・弧形骨角製品・垂飾りなど）、貝製品（貝刃・貝輪・有孔装身具など）のほか、多量の貝殻や獣骨・鳥骨・魚骨などの動物遺体、網代状炭化物などがあります。



ミミズク土偶の出土状況



第2号貝層の堆積状況



調査中の第2号貝層



第2号貝層の獣骨出土状況



出土した骨角歯製品

調査の結果

上境旭台貝塚は、縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけて、台地上から縁辺部に集落が営まれ、斜面部に不要になった土器や石器、食料とした貝や獣骨などを廃棄した貝塚が形成された遺跡であることが分かりました。生活や生産に関わる道具やアクセサリ、「第二の道具」と呼ばれるまつりごとに使われたものなどの様々な遺物が出土しています。中でも第2号貝層から出土したほぼ完形のミミズク土偶は、例の少ない優品です。また、南洋に生息しているオオツタノハ製の貝輪が3点出土していることも注目されます。

当時内海であった古霞ヶ浦沿岸では、多数の貝塚が確認されています。その中には、当遺跡から5kmほど東に位置している上高津^{かみたかつ}貝塚など、製塩に関わる遺跡も多く見られます。当遺跡からは製塩炉こそ見つかっていませんが、多量の製塩土器片が出土しています。また、イノシシなどの豊富な山の幸や交易品であるオオツタノハ製の貝輪などの存在からも、当遺跡が内陸部と沿岸部を結ぶ交易の要地であったことがうかがえる貴重な事例となりました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

つくば市では、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい街づくりが進められている。その一環として取り組んでいるのが、2005年の「つくばエクスプレス」開業に伴う沿線の開発である。中根・金田台地区については、住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に、平成23年7月から独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部茨城地域事業本部に名称を変更）を事業主体として、土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月18日、住宅・都市整備公団つくば開発局長は、茨城県教育委員会教育長に対して、中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成7年度に現地踏査を、平成12年1月18・19日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年2月15日、茨城県教育委員会教育長は、都市基盤整備公団茨城地域支社長あてに、事業地内に上境旭台貝塚が所在すること及びその取り扱いについて、別途協議が必要であることを回答した。

平成19年1月11日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成19年1月31日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成21年2月19日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長は、茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成21年3月11日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長に対して、上境旭台貝塚について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として財団法人茨城県教育財団（平成24年4月から公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、A・B・C・D区の2878㎡について、平成19年4月から平成20年1月までに、断続的に3回の発掘調査を実施し、平成21年に報告書を刊行した。また、B・D区の未調査部及びF区の2898㎡について、平成21年10月1日から同年12月31日まで発掘調査を実施し、平成24年に報告書を刊行した。さらに、B・D・E区の未調査部1,038㎡について、平成23年10月1日から12月31日まで発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

本調査は、平成23年10月1日から12月31日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 月	10月			11月			12月		
調査準備 表土撤去 遺構確認	■								
遺構調査		■	■	■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 写真整理		■	■	■	■	■	■	■	■
補足調査 撤収									■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上境旭台貝塚は、茨城県つくば市栄字毘沙門 439 番地の 1 ほかの所に所在している。

つくば市は、茨城県の南西部に位置し、東方には霞ヶ浦、北端には筑波山塊がある。当市の地勢は、筑波山の南西麓をほぼ南流する桜川によって形成された沖積低地と、西側を小貝川によって限られた標高 25 m ほどの筑波・稲敷台地と呼ばれる標高 25 m ほどの平坦な台地からなっている。また、桜川・小貝川とはほぼ並行して流れる花室川・運沼川・東谷田川・西谷田川などの小河川は、樹枝状に開析谷を形成しながら牛久沼に流入している。特に、当遺跡が所在する桜川右岸域は、開析度合が高く、樹枝状の小谷津が入り込み、谷密度が高い。

筑波・稲敷台地は、千葉県北部から茨城県南部域に広がる常総台地の一部であり、地質的には新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積している。下層は成田層及び竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし、その上層に常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、さらに上位には関東ローム層、腐食土層が連続して堆積している¹⁾。

当遺跡は、つくば市の東部に位置し、桜川右岸の標高 24 ~ 27 m の舌状台地上及び台地縁辺部に立地しており、桜川低地との比高は 17 ~ 20 m である。調査区の東側に入り込む小谷津は、桜川低地からはほぼ南に向かって開析されており、谷津頭は近年建設された道路により塞き止められ、池になっている。なお、現霞ヶ浦汀線からの直線距離は約 9 km である。

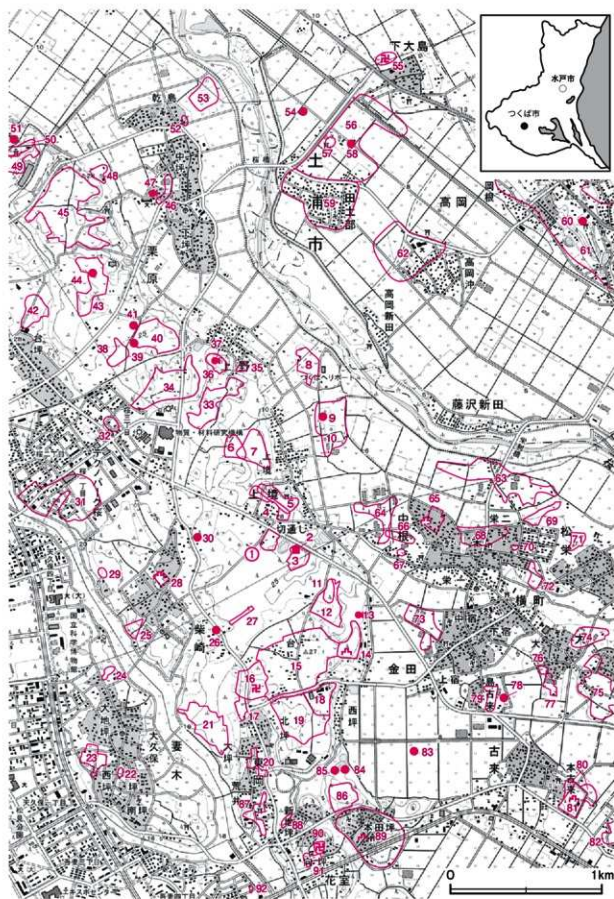
当遺跡とその周辺の土地利用の現況は、主として畑地、宅地であり、台地縁辺部の一部は雑木林や杉林である。また、桜川によって形成された沖積低地は、主に水田として利用されている。当遺跡の調査前現況は、雑種地及び道路であった。

第2節 歴史的環境

桜川と花室川に挟まれた平坦な台地上には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が密集している²⁾。本節では、縄文時代の遺跡を中心に周辺遺跡を概観する。

当台地上で人々の生活痕跡が認められるのは後期旧石器時代に遡り、東関東原遺跡(21)では、荒屋型石器を含む細石刃石器群が確認されている³⁾。

今から約 1 万 2 千年前に始まる縄文時代から、地球規模の温暖化に伴い、内陸部に海水が浸入するいわゆる縄文海進により、縄文時代早期末から前期始めころには、霞ヶ浦周辺に広大な内海が形成された。この内海の発達に伴って、台地縁辺部を中心に貝塚が形成されるようになる。桜川下流域及び霞ヶ浦土浦入沿岸では、土浦市沖積貝塚群の早期末に遡る事例を最古として、前期の貝塚が多く確認されている。桜川水系の前期の貝塚では、当遺跡の桜川を挟んで対岸約 3 km に上坂田寺浦貝塚、下坂田鹿島前貝塚が、下流 4 km に穴塚貝塚が所在しており、いずれも内湾の浅海にある砂泥底に生息するハイガイを主体とする貝塚であり、当時の水辺環境が推測される。



第1図 上境旭台貝塚周辺遺跡分布図 (国土地理院 25,000分の1「上郷」〔常陸藤沢〕)

表1 上境旭台貝塚周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
①	上境旭台貝塚		○		○			47	栗原古塚古墳				○			
2	中根中谷津古墳				○			48	栗原登戸遺跡				○	○		
3	中根中谷津遺跡	○	○			○		49	玉取遺跡	○	○	○	○		○	
4	上境滝ノ臺遺跡		○	○				50	玉取古墳群				○			
5	上境滝の台古墳群				○			51	玉取弁天塚						○	○
6	上境作ノ内遺跡	○	○	○				52	栗原遺跡					○	○	○
7	上境作ノ内古墳群				○			53	栗原沼向遺跡				○	○	○	
8	上境北ノ内遺跡				○	○	○	54	稲荷塚古墳				○			
9	上境どんどん塚古墳				○			55	下大島遺跡							
10	上境古屋敷遺跡				○	○	○	56	広畑遺跡				○	○	○	○
11	横町古墳群				○			57	田土部明神古墳群				○			
12	横町庚申塚遺跡	○	○	○	○	○	○	58	供養塚							○
13	金田古墳				○			59	田土部館跡							○
14	金田城跡						○	60	大日塚古墳(龍島神社)				○			
15	金田西遺跡	○			○	○	○	61	岡の宮遺跡				○	○		
16	九重東岡庵寺				○	○	○	62	五斗内遺跡				○	○		
17	東岡中畑遺跡				○			63	中根遺跡				○	○	○	
18	金田西坪A遺跡				○			64	中根不業拔遺跡				○	○	○	○
19	金田西坪B遺跡	○	○	○	○			65	中根屋敷附館跡				○	○	○	○
20	東岡南遺跡				○	○	○	66	中根とりおい塚古墳群				○			
21	東岡中原遺跡	○	○		○	○	○	67	中根宮ノ前遺跡				○	○	○	○
22	妻木宮前遺跡				○	○	○	68	栄土器屋遺跡				○	○	○	○
23	妻木坪内遺跡				○	○	○	69	松塚鷲打遺跡				○	○	○	○
24	妻木湧ノ渠遺跡				○	○		70	栄屋敷付遺跡				○	○	○	○
25	柴崎南遺跡	○	○		○	○	○	71	松塚高畑遺跡				○	○	○	○
26	柴崎稲荷前古墳				○			72	栄尼塚遺跡							○
27	柴崎大堰遺跡						○	73	金田竜宮橋遺跡				○	○	○	○
28	柴崎片岡上館					○	○	74	大白畑遺跡				○	○	○	○
29	柴崎ボツケ遺跡				○			75	大寺前遺跡				○	○	○	○
30	柴崎大日古墳				○			76	阿弥陀寺跡							○
31	柴崎遺跡				○	○	○	77	大南遺跡				○	○	○	○
32	上野中塚遺跡	○	○	○	○			78	古来島ノ前塚							○
33	上野古屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○	79	古来北ノ崎遺跡					○	○	○
34	上野陣場遺跡	○	○	○	○			80	古来遺跡					○	○	
35	上野定使古墳群				○			81	古来館跡				○	○	○	○
36	上野天神遺跡	○						82	吉瀬黄金遺跡				○	○	○	○
37	上野天神塚古墳				○			83	金田本田遺跡				○	○		
38	栗原大山西遺跡					○	○	84	花室大日塚古墳							
39	栗原十日塚古墳				○			85	花室後田塚							○
40	栗原大山遺跡				○	○		86	花室遺跡	○			○			
41	栗原愛宕塚古墳				○			87	東岡天神前遺跡							○
42	栗原才十郎遺跡	○						88	花室溝向遺跡							○
43	栗原五竜遺跡	○	○	○	○	○		89	花室城跡	○	○	○	○	○	○	○
44	栗原五龍塚古墳				○			90	花室寺畑庵寺							○
45	栗原中台遺跡	○	○	○	○	○	○	91	花室寺山前遺跡				○	○	○	○
46	栗原古塚遺跡				○	○	○	92	花室大根遺跡				○			

中期になると遺跡数が激増し、これらの遺跡の多くは後期あるいは晩期まで継続しているのが特徴である。当遺跡周辺においても、上境滝ノ臺遺跡〈4〉、中根不業拔遺跡〈64〉、金田西遺跡〈15〉、柴崎南遺跡〈25〉では中期の、金田西坪A遺跡〈18〉、金田西坪B遺跡〈19〉、花室遺跡〈86〉では中期から後期にかけての遺構や遺物が確認されている。中期の貝塚は、阿見町竹來貝塚や見目貝塚など、霞ヶ浦に直面する台地上に立地し、サルボウガイ、アカガイ、ハマグリなどが主体の主鹹貝塚の様相を呈しており、海退を含めた前期から中期にかけての水辺の環境変化が指摘されている⁴⁾。

花室川右岸約6km下流の下広岡遺跡では、中期中葉阿玉台式期から中期後葉加曾利E式期の竪穴住居跡86軒と、袋状土坑を含む土坑600基以上が確認されている。また、袋状土坑からは多量の縄文土器のほか、パン状炭化物や炭化種子などが出土しており注目される⁵⁾。その他、当遺跡近隣の遺跡としては、上野陣場遺跡〈34〉があげられ、前期前葉花積下層式期から中期後葉加曾利E式期までの竪穴住居跡8軒と土坑8基が調査されている⁶⁾。また、上野古屋敷遺跡〈33〉でも前期前葉の竪穴住居跡18軒と中期加曾利E式期の竪穴住居跡1軒、陥し穴3基、土坑55基が調査されている⁷⁾。上野陣場・上野古屋敷遺跡では中期の集落は主体となりえず、当遺跡及び上境旭台貝塚でも中期の遺物がほとんど確認できなかったことを勘案すると、中期後葉の当遺跡近隣が食糧獲得を中心とした生活に適した環境ではなかったことが推察される。

当遺跡の存続時期を同じくする後期から晩期に最盛期を迎える遺跡には、当遺跡と桜川低地を挟んだ対岸に位置している下坂田貝塚、桜川右岸約5km下流の上高津貝塚があげられる。下坂田貝塚は中期から晩期の遺跡であるが、貝層の主体は後期中葉加曾利B式期で、出土貝類の98%以上がヤマトシジミである⁸⁾。出土した貝種の傾向は当遺跡と同様であり、近隣の古環境をうかがい知ることができる。国指定史跡である上高津貝塚は後期から晩期にかけて形成された大規模な馬蹄形貝塚で、4地点からなる貝層はヤマトシジミが主体である。捕獲魚類として汽水域を主たる生息域とするクロダイやスズキなどの魚骨が多量に確認され、当水域が汽水化していく傾向がうかがえる。また、加曾利B式期の貝層中から外洋の水深30m以深の海底に生息するマダイ成魚の骨が多量に出土しており、該期縄文人の漁労活動を推測するうえで興味深い資料を提示している⁹⁾。桜川下流域の晩期の遺跡数は激減し、かつ中・後期から継続して存在しているという特徴がある。当地域の貝塚の多くが、後期中葉に最盛期を迎え、晩期に至って終焉を迎えるという傾向は、霞ヶ浦沿岸の貝塚群にみられる通常の傾向のようである。

当遺跡と谷津を挟んで東側の対岸に所在する中根中谷津遺跡〈3〉は、平成8・9年度及び平成22年度に行われた発掘調査で、後期後葉（堀之内1・2式期）の竪穴住居跡10軒と晩期前葉（安行3b式期）の竪穴住居跡1軒、後期の地点貝塚4か所、土坑115基、地点貝塚4か所、焼土遺構6基、遺物包含層5か所などを確認している。堀之内1式期の住居跡は9軒確認し、これらは台地際に環状の配置をとっている。後期前葉の集落を面的にとらえることが可能な貴重な調査例である。また、当遺跡に先行する集落であり、集落の移動や展開を考察する上での好資料となる¹⁰⁾。

縄文時代以降も桜川と花室川に挟まれた「中根・金田台」地区は、継続して集落が営まれ続けている。上野陣場遺跡では10世紀後半まで、隣接する上野古屋敷遺跡でも16世紀代まで、断続的ながら集落が確認されている。当該地は、奈良時代・平安時代には、河内郡菅田郷に属し、北は筑波郡に接している。当遺跡の南約1kmに位置している国指定史跡である金田西遺跡、金田西坪A遺跡、金田西坪B遺跡、九重東岡庵寺〈16〉は河内郡衙跡と関連遺跡群と推定されている¹⁴⁾。また、東岡中原遺跡、柴崎遺跡¹⁵⁾〈31〉、上野陣場遺跡などは河内郡衙を支えた集落と位置付けられており、当該地が河内郡の中心地であったことが想定される。鎌倉時代から戦国時代には小田氏及び佐竹氏の支配下となり、台地上には金田城跡〈14〉をはじめとする中小

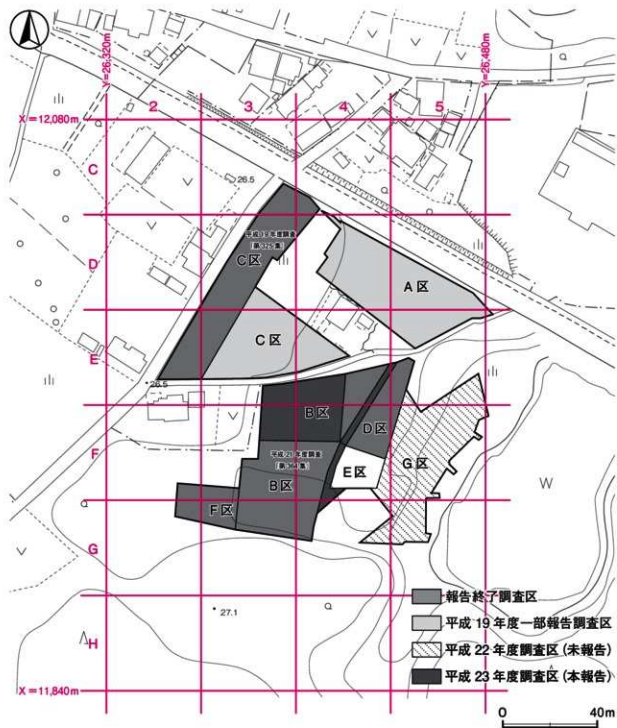
城館及びその関連施設が築かれ、領主層の抗争の舞台となった。しかし、小田氏の衰退に伴い土豪層の多くが帰農したことに伴って、集落の廃絶と移動があったと考えられる。江戸時代になると、上野・栗原地区は堀氏玉取藩の知行地であったが、旧桜村の多くは土浦藩に属することになり、明治4（1874）年の廃藩置県に至っている。

※本章は、『茨城県教育財団文化財調査報告』第364集及び第367集をもとに、若干の加筆をしたものである。

なお、文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の該当番号と同じである。

註

- 1) 大山年次監修『茨城県 地質のガイド』コロナ社 1977年8月
- 2) a 茨城県教育庁文化課『茨城県道跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
b 茨城県つくば市教育委員会『つくば市道跡分布調査報告書-谷田部地区・桜地区』2001年3月
- 3) a 成島一也「中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 中原道跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集 2000年3月
b 成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 中原道跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集 2000年3月
c 高野節夫・白田正子・仲村裕一郎・島田和宏「中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原道跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 2001年3月
d 駒澤悦郎「東岡中原道跡4 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第251集 2005年3月
- 4) 真良理香「道跡の位置と環境」『国指定史跡上高津貝塚A地点』慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報9 1994年3月
- 5) 高根信和・加藤雅美・小河邦男「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告X』1981年3月
- 6) a 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場道跡 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第182集 2002年3月
b 川井正一・齋藤和浩「上野陣場道跡2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第323集 2009年3月
- 7) a 三谷正一・大塚雅昭・委村裕「上野古屋敷道跡1 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第285集 2007年3月
b 川井正一「上野古屋敷道跡2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書X」『茨城県教育財団文化財調査報告』第307集 2008年3月
c 齋藤和浩・川井正一「上野古屋敷道跡3 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第324集 2009年3月
d 櫻井介介・江原美奈子「上野古屋敷道跡4 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第334集 2010年3月
- 8) 前田雅編「古蹟々浦湾」沿岸貝塚の研究」『筑波大学先史学・考古学研究調査報告』Ⅵ 1991年3月
- 9) a 佐藤孝雄・大内千年編『国指定史跡上高津貝塚A地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-Ⅰ』土浦市教育委員会 1994年3月
b 堀谷修編『国指定史跡上高津貝塚E地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-Ⅱ』土浦市教育委員会 2000年3月
c 石川功・福田礼子編『国指定史跡上高津貝塚C地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告-Ⅲ』土浦市教育委員会 2006年3月
- 10) a 川村満博「(仮称)中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 中谷津道跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第139集 1998年9月
b 荒崎文一郎「中根中谷津道跡2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第367集 2013年3月
- 11) 桜村史編さん委員会『桜村史 上巻』桜村教育委員会 1982年3月
- 12) 註8) 同記
- 13) a 柴山正広・須賀川正一・小野政美・小川貴行・越川和伸「上境旭台貝塚 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第325集 2009年3月
b 江原美奈子「上境旭台貝塚2 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第364集 2012年3月
- 14) a 白田正子「九重東岡庵寺確認調査報告書1」財団法人茨城県教育財団 2001年3月
b 白田正子「金田西道跡 金田西坪B道跡 九重東岡庵寺 中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集 2003年3月
- 15) a 土生朗治「研究学園都市計画桜崎台地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 桜崎道跡Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第72集 1992年3月
b 萩野谷悟「研究学園都市計画桜崎台地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 桜崎道跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第93集 1994年9月



第2図 上境旭台貝塚調査区設定図（「つくば市都市計画基本図」1/2,500 から作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

上境旭台貝塚は、桜川右岸の低地から入り込む谷津の北岸に位置し、標高24～27mほどの台地上及び台地縁辺部に立地している。遺跡の範囲は南北150m、東西200mほどであり、調査前の現況は、畑地、山林、宅地、道路で、地表面の観察により調査区内の台地縁辺に沿って貝の散布が認められていた。今回の調査は、平成19年度から5次にわたって断続的に調査されたものに続く第6次調査で、調査区全体の中では中央部から南部にあたる。道路や調査順により便宜上分けられたA～G区のうち、これまで未調査であったB区北部、D区の道路部分及びE区の一部で、調査面積は1,038㎡である。

今回の調査では、縄文時代の竈穴住居跡7軒、土坑70基、ピット群2か所、斜面貝層2か所、遺物包含層1か所、中世の火葬施設1基を確認し、縄文時代の斜面貝層を内包する集落跡であることが分かった。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に147箱出土している。主な出土遺物は、縄文時代のものに限られており、縄文土器(深鉢、鉢、浅鉢、台付鉢、台付土器、注口土器、ミニチュア土器、手捏土器、手燭形土器、製塩土器)、土製品(耳飾り、耳栓、土偶、有孔装身具、土器片錘、土器片円盤)、石器(鎌、磨製石斧、打製石斧、石皿、磨石、敲石、凹石、石錘、砥石、軽石製品)、石製品(小玉、勾玉、石棒、石剣)、石核、剥片、骨角歯牙製品(牙鏃、垂飾り、髪飾り、刺突具、釣り針、弓形骨角製品、有孔装身具)、貝製品(貝輪、貝刃、ヘラ状貝製品、有孔装身具)のほか、網代状炭化物、動物遺体(貝殻、獣骨、鳥骨、魚骨)などが出土している。

第2節 基本層序

平成21年度の調査でB区西部F3f6区にテストピット3を設定し、基本層序の観察を行った。また、平成19年度の調査において、台地上のC区西部D3j8区にテストピット1が、谷津に向かう斜面部のB区東部F4g5区にテストピット2が設定されている。台地上と谷部との比高及び地積の組成を確認するために、3地点の土層について再録し、参照することとした。

テストピット1では、第1層の耕作土下は第3層のローム漸移層、第4層から第8層が褐色基調のローム層で、第5層が第2黒色帯にあたる。第9層から第13層は、粘性が強く、粘土化したローム層及び粘土漸移層であり、第14層は常総粘土層にあたる。遺構は主に第3層上面及び第4層上面で確認できた。

テストピット2では、第4層から第12層が認められず、耕作土下は第14層の常総粘土層であった。第16層以下は浅黄色の砂層である。

テストピット3は、表土下2.3mまで掘り下げ基本層序の観察を行った。色調・構成粒子・含有物・粘性などから6層に細分できる。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土である。ローム粒子・炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は普通で締まりは弱い。層厚は60cmである。

第2層は、暗褐色を呈するローム漸移層である。土器を少量含み、粘性・締まりともに普通である。層厚は10～15cmである。

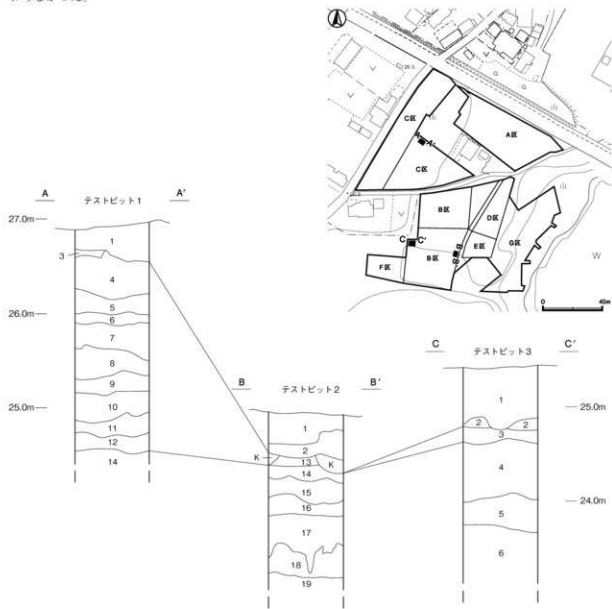
第3層は、暗褐色を呈するローム層である。白色粘土粒子を少量含み、粘性は普通、締まりは強い。層厚は10～20cmである。

第4層は灰オリーブ色の粘土層で、常総粘土層に相当する。粘性・締まりともに非常に強い。層厚は60cmである。

第5層は、灰白色の粘土層である。砂粒を少量含み、粘性・締まりともに非常に強い。層厚は20～40cmである。

第6層は、にぶい黄色の粘土層である。砂粒を中量、赤色の鉄分を少量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は下層が未掘のため不明である。

遺構は主に第2層上面で確認できる。テストピット1・2の対応関係は、テストピット1の第4層とテストピット3の第3層がローム漸移層、テストピット1・2の第14層とテストピット3の第4層が常総粘土層で対応する。台地上と台地縁辺部の比高は、ローム漸移層上で2.4mほどで、B区の東西においてはほとんど変わらなかった。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認した当時代の遺構は、竪穴住居跡7軒、土坑70基、ピット群2か所、斜面貝層2か所、遺物包含層1か所である。以下、それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第16号住居跡（第4～6図）

位置 調査B区のE38区、標高26mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第242号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 削平により壁が遺存していなかったため、本来の規模は不明であるが、主柱穴の配置や南東部で確認した壁柱穴と考えられるP20～P23の配置から、長軸7.0m、短軸5.0mほどの長方形プランが想定でき、長軸方向はN-36°-Eと推定される。

床 ほほ平坦で、硬化面は認められなかった。

炉 中央部北西寄りに位置している。長径60cm、短径54cmの楕円形を呈する地床炉である。確認面が炉床面であり、被熱により細かな凹凸をもって赤変硬化している。炉床面下には灰を多量に含む層が認められ、作り替えが想定される。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、灰微量 |
| 2 灰白色 灰多量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微量 |

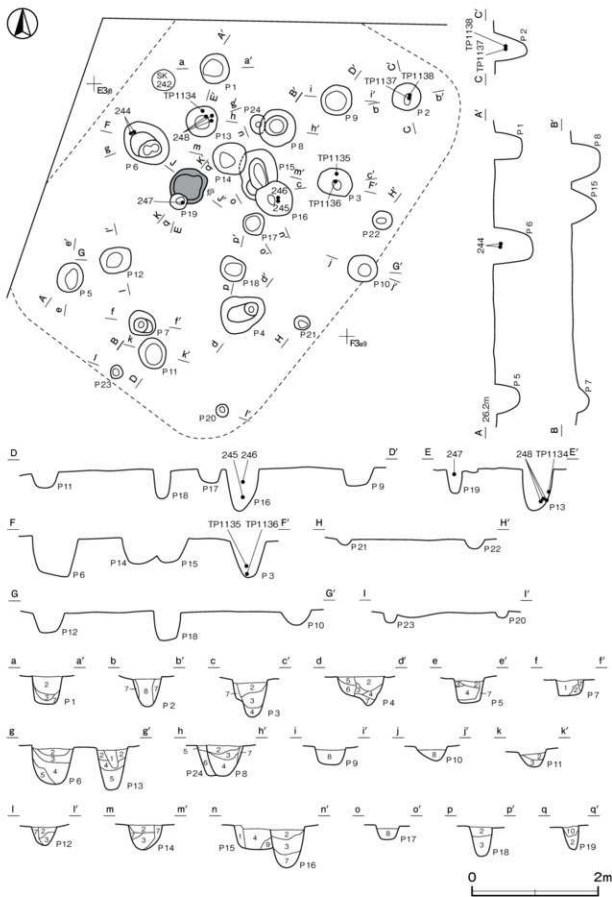
ピット 24か所。P1～P6は規模や配置から主柱穴と考えられる。P10～P12は、いずれも深さ30cm前後で、推定プラン内を弧状に巡っていることから補助的な柱穴の可能性が高い。P20～P23は深さ10～14cmの小規模なピットで、推定プランの外縁部に配置されていることから壁柱穴が想定される。その他のピットは、覆土の様相や配置・形状から本跡に伴う柱穴と判断されるが、その具体的な性格は明確でない。

ピット土層解説

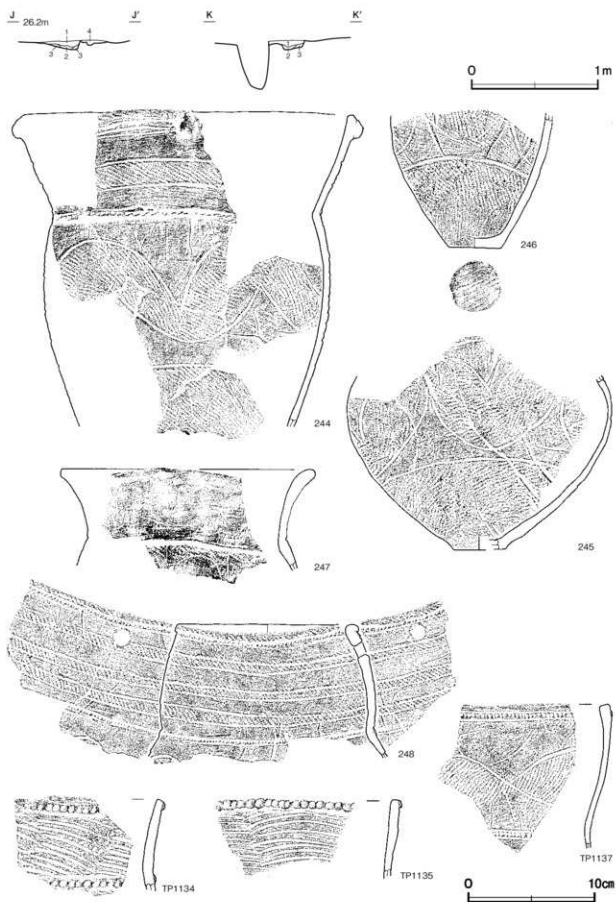
- | | |
|---------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・貝微量 | 6 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 8 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 4 暗褐色 ロームアブロック少量、炭化粒子微量 | 9 褐色 ローム粒子中量、黒色粒子微量 |
| 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 10 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片389点、石器1点（磨製石斧）のほか少量の獣骨片が、いずれもピット覆土中から出土している。244はP6の覆土上層、248、TP1134はP13の覆土下層、245はP16の覆土下層、246はP16の覆土中層、247はP19の覆土上層、TP1137・TP1138はP2の覆土中層、TP1135・TP1136はP3の覆土下層、TP1133はP11の覆土中、Q102はP12の覆土中からそれぞれ出土しており、時期判断の指標となる遺物である。

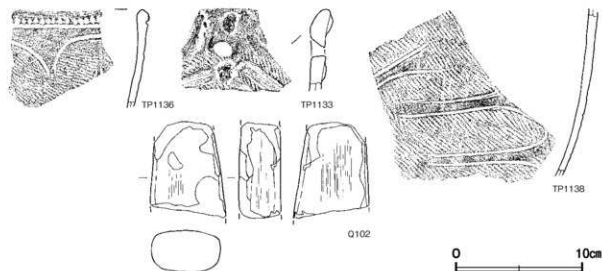
所見 削平により、覆土は確認できなかった。P8とP24との間に新旧関係があることやP19が炉を掘り込んでいること、炉に作り替えの痕跡があることなどから、建て替えの可能性はある。出土土器には後期中葉の細片も含まれているが、主体となる土器は曾谷式から安行1式期のものであることから、時期は後期後葉と考えられる。



第4图 第16号住居跡実測図



第5図 第16号住居跡・出土遺物実測図(1)



第6図 第16号住居跡出土遺物実測図(2)

表2 第16号住居跡ピット計測表

番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)
P 1	43	P 4	46	P 7	18	P 10	24	P 13	66	P 16	66	P 19	38
P 2	50	P 5	37	P 8	45	P 11	26	P 14	40	P 17	24	P 20	10
P 3	60	P 6	63	P 9	27	P 12	30	P 15	37	P 18	46	P 21	10
												P 23	14
												P 24	48

第16号住居跡出土遺物観察表(第5・6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
244	縄文土器	深鉢	[263]	(25.0)	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	普通	胎土→沈殿文→RLの単節縄文・無文部磨き →無文部磨き 内面磨き	P 6 覆土上層	10% PL17
245	縄文土器	深鉢	-	(13.8)	(4.0)	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	胎土→RLの単節縄文・無文部・胴部下磨き →無文部・胴部下磨き 内面磨き	P16 覆土下層	10%
246	縄文土器	深鉢	-	(10.7)	4.0	長石・石英	黒褐色	普通	胎土→RLの単節縄文・無文部・胴部下磨き →無文部・胴部下磨き 内面・底部磨き	P16 覆土中層	20%
247	縄文土器	深鉢	[198]	(8.1)	-	長石・石英	灰褐色	普通	胎土の沈殿文→風状沈殿文→RLの単節縄文・無文部・胴部下磨き →無文部・胴部下磨き 内面磨き	P19 覆土上層	5%
248	縄文土器	甕形土器	140	(10.6)	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	普通	胎土→RLの単節縄文・沈殿文間詰め →無文部磨き 口縁部穿孔 内面磨き	P13 覆土下層	20% PL14

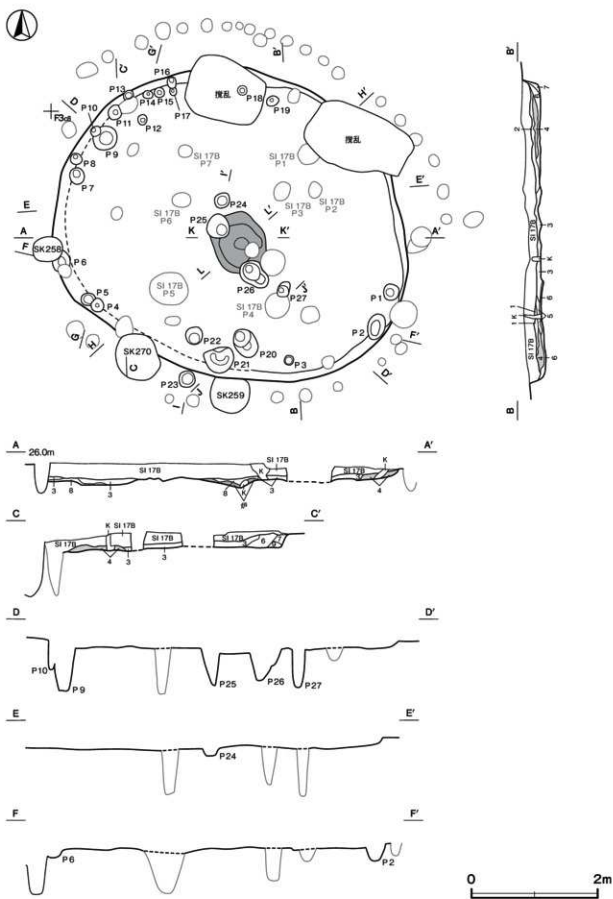
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1133	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐色	胎土→RLの単節縄文→無文部磨き 穿孔 内面ナデ	P11 覆土中	PL18
TP1134	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	地縄文→糸縄文→紐縄文 内面磨き	P13 覆土下層	PL18
TP1135	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐色	地縄文→糸縄文→紐縄文 内面ナデ	P 3 覆土下層	
TP1136	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐色	RLの単節縄文→沈殿文→口唇部削み 内面ナデ	P 3 覆土下層	
TP1137	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	沈殿文→RLの単節縄文→沈殿文間詰め・無文部ナデ 内面ナデ	P 2 覆土中層	PL18
TP1138	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	沈殿文→RLの単節縄文→無文部磨き 内面ナデ	P 2 覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q102	磨製石斧	(7.7)	6.0	3.3	(270.9)	緑色凝灰岩	定角式 基部及び刃部欠損 器面磨痕状に変わる	P12 覆土中	

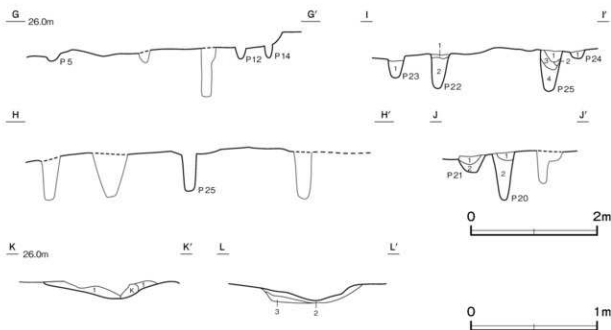
第17 A号住居跡(第7~10図)

位置 調査B区のF 3 c8区。標高26mほどの台地縁辺部に位置している。

確認状況 平成19年度に掘ったトレンチを再調査し、土層を観察したところ、上下に重複する2軒の住居跡を確認した。2軒の住居跡の壁の立ち上がりがほぼ同位置で確認でき、少なくともトレンチで確認できた南北



第7图 第17A号住居跡実測图(1)



第8図 第17A号住居跡実測図(2)

軸においては、ほぼ同規模の住居跡であることが分かった。下位の住居跡の覆土が上位の住居の埋め土となっていることから、建て替えと判断し、下位を第17A号住居跡、上位を第17B号住居跡とした。

重複関係 第2号貝層及び第17B号住居跡の下位に存在している。第258・270号土坑に掘り込まれている。また、第259号土坑と重複しており、出土土器から本跡が新しい。

規模と形状 長径5.65m、短径4.80mの楕円形で、主軸方向はN-48°-Wである。残存している壁高は14～25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、ローム土を床面としている。全体的に硬化しているが顕著な硬化面は認められなかった。

炉 ほぼ中央部に位置している。長径90cm、短径82cmの円形で、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は被熱により赤変硬化している。第2・3層に相当する炉床面下にも灰が含まれているが、同層の下位には焼けた痕跡が希薄だったことから、掘方に意図的に灰を入れた可能性がある。

炉土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------|
| 1 濃い黄褐色 灰多量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、灰少量 | |

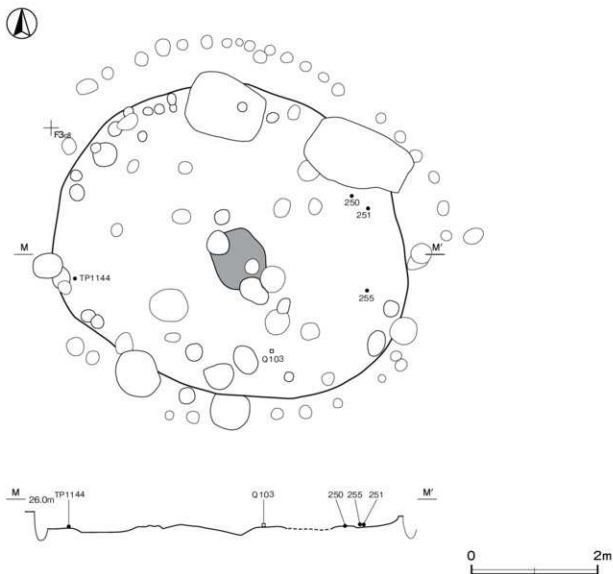
ピット 第17B号住居跡の床面を除去したのちに確認できたピットを本跡に伴うものと判断し、27か所を検出した。P1～P19は、径15～40cm、深さ7～64cmの小ピットで、その規模や壁際を巡っていることから壁柱穴と考えられる。P20～P23は南部にまとまって検出されており、配置から出入口に伴うピットと考えられる。P24～P27は性格不明であるが、炉の長径方向に沿って並んでいることから、炉に付随する可能性がある。また、主柱穴は建て替えた第17B号住居の柱穴として再利用した可能性があり、同住居のP1～P7がそれに相当する。

P20土層解説

- | |
|----------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子・貝微量 |
| 2 灰黄褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

P21土層解説

- | |
|------------------------------|
| 1 灰黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 |



第9図 第17A号住居跡実測図(3)

P 22 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量
- 2 濃い黄褐色 ロームブロック中量、貝微量

P 23 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

P 24 土層解説

- 1 灰黄褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

P 25 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、貝微量
- 2 灰黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・貝微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・貝微量

覆土 9層に分層できる、床面上に自然堆積層が認められないことから、廃絶後に埋戻して上位にある第17B号住居を構築したと考えられる。そこには、同一居住者による建て替えが想定されるため、第17B号住居の貼床である第6層以下を本跡の覆土として、本項で解説する。第4層は壁際を環状に巡る焼土層で、ロームの焼土よりもやや淡い色調であり、第17B号住居の床の構築材を意図して入れられたものと考えられる。また、第4層の下位は炭化粒子が3mmほどのごく薄い層をなしている。第2・4・5層は混泥土層で、特に第4層の混泥土層率が高い。混泥土層を水洗選別したところ、11,281点の貝を確認できた。その組成は、第一優占種の

ヤマトシジミが10.444点(10.920g)で全体の約92.6%を占め、次いでハマグリが3.5%であり、第2号貝層全体の組成とはほぼ一致している。また、第4層に含まれているヤマトシジミは、被熱により灰色化しているものが多い。他の層は、ロームブロックを多く含んだ締まりのある土層である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物・貝微量	5 混貝土層	暗褐色土主体、混貝率10%以下(ヤマトシジミ主体・成鈴率高い)、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
2 混貝土層	暗褐色土主体、混貝率10%(ヤマトシジミ主体・成鈴率中程度)、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量	6 暗褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・貝微量
3 暗褐色	炭化物・焼土粒子少量、ロームブロック・貝微量	7 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 混貝土層	赤褐色の焼土主体、混貝率30%(ヤマトシジミ主体・成鈴率・被熱率高い)、焼土ブロック多量、炭化物少量、炭微量	8 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子少量
		9 褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 本跡への帰属が明確な遺物は、床面及びピットから出土した縄文土器片58点、土製品1点(土器片鏝)、石器1点(打製石斧)、骨角歯牙製品1点(垂飾り)である。図示した遺物はいずれも床面から出土しているもので、250・251・255は東部、Q103は南部、TP1144は西部からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期後葉(曾谷式~安行1式期)と考えられ、第17B号住居との時期差は認められない。本住居の廃絶後、間をおかず第17B号住居へ建て替えたと考えられる。

表3 第17A号住居跡ピット計測表

番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)
P 1	21	P 5	23	P 9	64	P 13	19	P 17	7	P 21	32	P 25	58
P 2	18	P 6	20	P 10	30	P 14	18	P 18	15	P 22	60	P 26	48
P 3	37	P 7	25	P 11	17	P 15	10	P 19	13	P 23	32	P 27	68
P 4	37	P 8	24	P 12	12	P 16	21	P 20	75	P 24	13		

第17A号住居跡出土遺物観察表(第10図)

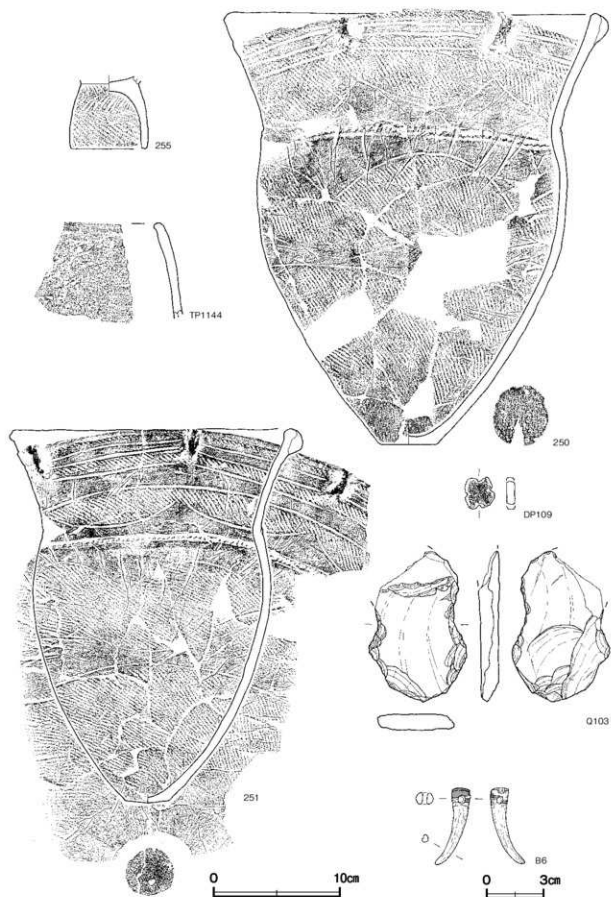
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
250	縄文土器	深鉢	[294]	34.4	4.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胎層→沈殿文→LRの半筋縄文→無文部・腹部下縁巻き	床面	10% PL14
251	縄文土器	深鉢	[220]	29.5	3.5	長石・石英	黒褐色	普通	胎層→沈殿文→LRの半筋縄文・沈殿文埋込み→無文部・腹部下縁巻き・内面・底面巻き	床面	10% PL14
255	縄文土器	台付鉢	-	(5.7)	(6.2)	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	LRの半筋縄文→灰引肌状素縄文縁部内面巻き	床面	20% PL16

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1144	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	LRの半筋縄文 内面巻き	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP109	土器片鏝	26	2.3	0.7	4.7	黒長石・石英	頸縁部に挟り4小所	床面	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q103	打製石斧(123)	(7.7)	(7.7)	1.7	(169.2)	粘板岩	分層彫 扁平な鏝を素材とし、両面調整	床面	PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
B 6	垂飾り	4.1	1.0	0.6	1.86	イノシシ犬歯	基部に溝状の挟り入り・赤彩残存 両方向からの穿孔孔径0.5cm	床面	PL25



第10图 第17A号住居跡出土遺物実測図

第17B号住居跡（第11～15図）

位置 調査B区のF3c8区、標高26mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層の下位、第17A号住居跡の上位に存在している。第258・270号土坑に掘り込まれている。また、第259号土坑と重複しており、出土土器から本跡が新しい。

規模と形状 長径5.65m、短径4.75mの楕円形で、主軸方向はN-48°-Wである。残存している壁高は10～16cmで外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦なロームブロック主体の貼床であり、中央部が硬化している。おおむね東半部の壁際に幅20～90cmの幅で、焼土が環状に巡っている。

炉 中央部やや南西寄りに位置しており、先行する第17A号住居跡の炉よりも南西壁際に寄っている。長径96cm、短径72cmの楕円形で、ほぼ床面を炉床とした地床炉である。炉床面は第4層上面で、被熱により赤変硬化している。第1・2層は、灰を多く含む層で炉床よりも広い範囲で認められ、12cmほどの高まりをもっていることから、炉囲いの存在を想定し精査したが、その痕跡は認められなかった。また、第4層は固く締まった掘方への埋土である。

炉土層解説

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 灰黄褐色 灰中量、焼土ブロック・炭化物・貝微量 | 3 赤褐色 焼土ブロック多量、灰少量、炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 灰多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |

ピット 53か所。P1～P7は、深さが52～78cmと深く、規模と配置から主柱穴と考えられ、6本主柱の上屋構造が想定できる。P8・P11～P13は、主柱穴の周りを環状に巡っていることから補助的な柱穴で、壁際で確認したP14～P18は壁柱穴と考えられる。また、P19～P49は壁外を密に巡る小ピットで、特にP23・P24・P38は斜めに掘り込まれていることから、壁外柱穴と考えられる。P51～P53は、壁外柱穴が途切れる箇所に配置されていることから、出入口施設に伴うピットが想定できる。

P4土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・貝微量
- 2 灰黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

P5土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量、貝微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量（締まりあり）
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 7 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、魚骨少量、炭化物微量

P16土層解説

- ① 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- ② 暗褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- ③ 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

P51土層解説

- ④ 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・灰・貝微量
- ⑤ にぶい黄褐色 灰少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・貝微量
- ⑥ 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
- ⑦ にぶい黄褐色 ロームブロック少量

P52土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量・貝微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量

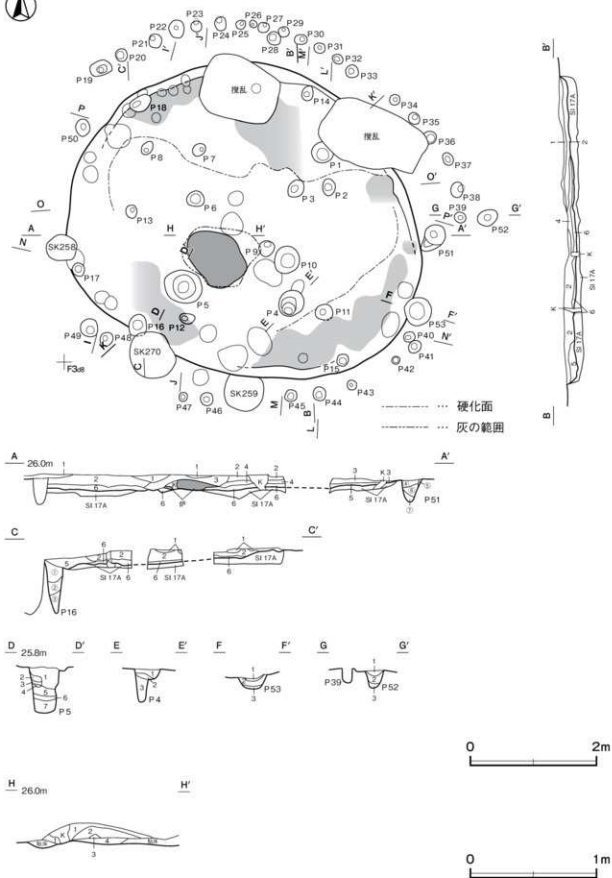
P53土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・貝少量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 貝少量、炭化物・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量

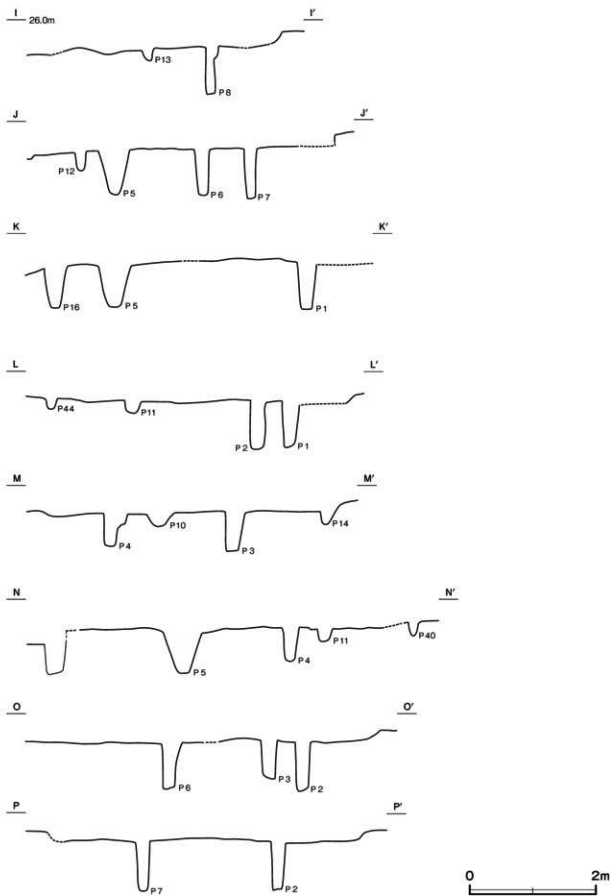
覆土 6層に分層できる。第1～4層は混貝土層及び混土土層で、第2号貝層で解説する第37～40層と同一層であり、本住居の廃絶後、貝の廃棄行為とともに埋め戻されている。第6層は、ローム土主体の非常に硬く締まった貼床の層である。第①～③層はP16、第④～⑦層はP51の覆土であり、土層解説はピットの項に記載した。なお、第1～4層の貝組成については第2号貝層の項で詳述する。

土層・貝層解説

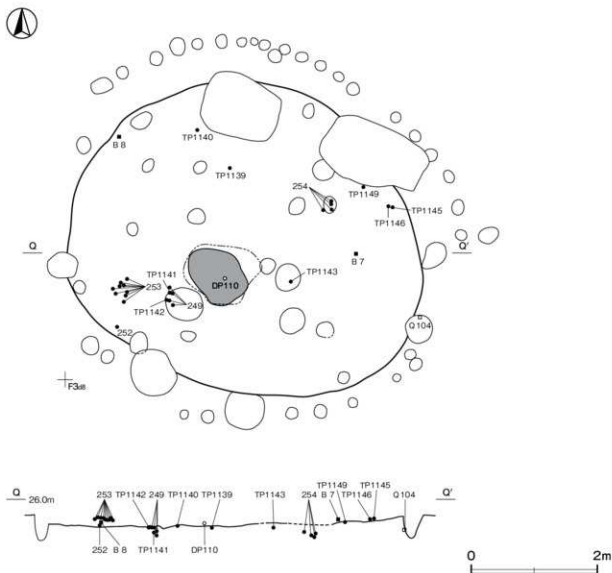
- | | |
|---|---|
| 1 混土土層 黒褐色土微量、混貝率90%（ヤマトシジミ主体・破砕率低い）、ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 混土土層 黒褐色土微量、混貝率80%（ヤマトシジミ主体・破砕率低い）、ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 混貝土層 黒褐色土主体、混貝率30%（ヤマトシジミ主体・破砕率高い）、ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物・貝微量 |
| 3 混土土層 黒褐色土微量、混貝率80%（ヤマトシジミ主体・破砕率低い）、炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 6 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量 |



第11図 第17B号住居跡実測図(1)



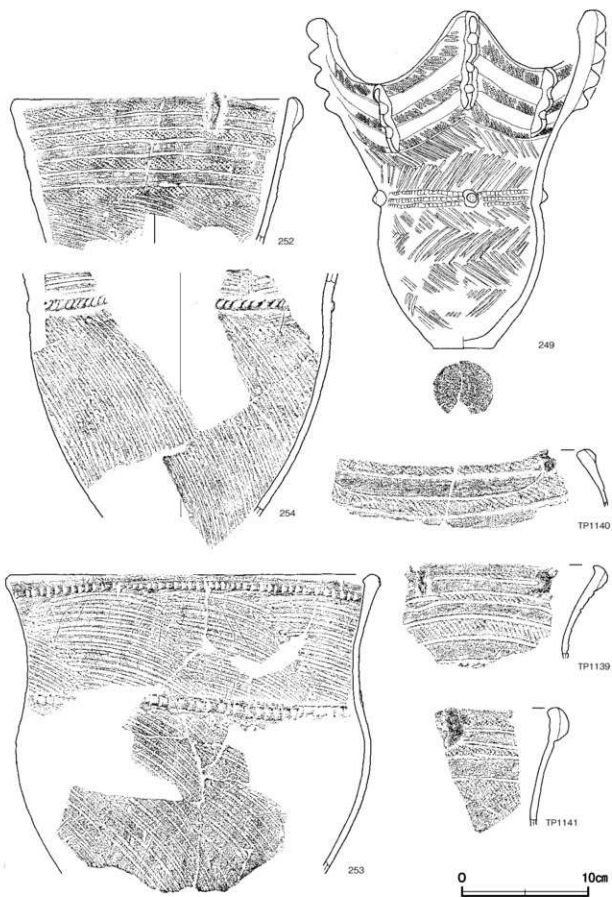
第 12 图 第 17 B 号住居迹实测图 (2)



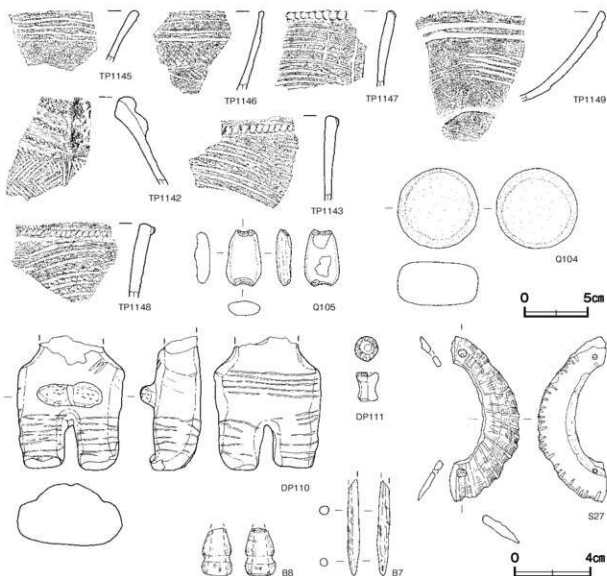
第13図 第17B号住居跡実測図(3)

遺物出土状況 縄文土器片1456点、土製品2点(土偶、耳栓)、石器2点(磨石、石錘)、骨角歯製品2点(刺突具、弧形骨角製品)、貝製品1点(貝輪)及び獣骨片が出土している。遺物は覆土下層から床面にかけて散在する状態で出土しており、大形の土器片はピット覆土中から出土している傾向が認められる。249、TP1141・TP1142はP5の覆土上層～中層、254はP2の覆土中層、TP1143はP10の覆土下層、Q104はP53の覆土下層からそれぞれ出土している。また、253は南西部の覆土下層からまとめて出土した破片が接合したものである。DP110の土偶は、炉の灰層南部に埋もれた状態で出土しており、特異な出土状況である。

所見 第17A号住居跡の廃絶後の埋戻しが、即本跡への建て替え行為であったと考えられる。第17A号住居跡と規模こそ変わらないが、主柱穴・その外側を巡る補助的な柱穴・壁柱穴・壁外柱穴という構造をもち、出入口を東側に設けるなどの点で、構造上の変化が認められる。時期は出土土器から後期後葉(曾谷式～安行1式期)と考えられる。



第14图 第17B号住居跡出土遺物実測図(1)



第15図 第17B号住居跡出土遺物実測図(2)

表4 第17B号住居跡ピット計測表

番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)
P 1	73	P 8	74	P 15	22	P 22	26	P 29	14	P 36	22	P 43	18
P 2	78	P 9	23	P 16	84	P 23	28	P 30	11	P 37	16	P 44	17
P 3	64	P 10	20	P 17	27	P 24	26	P 31	12	P 38	21	P 45	17
P 4	52	P 11	18	P 18	24	P 25	17	P 32	58	P 39	22	P 46	27
P 5	73	P 12	29	P 19	36	P 26	9	P 33	19	P 40	22	P 47	20
P 6	72	P 13	30	P 20	16	P 27	16	P 34	24	P 41	26	P 48	34
P 7	78	P 14	20	P 21	27	P 28	11	P 35	17	P 42	14	P 49	31

第17B号住居跡出土遺物観察表(第15・16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
249	縄文土器	深鉢	220	26.9	4.8	長石・石英	黒褐色	普通	条線文・胎線→口縁部沈線文・肩部刻文→ RLの単筋縄文→無文部磨き	P 5 覆土 上-半層	70% PL14
252	縄文土器	深鉢	[220]	(11.6)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	胎線→横位の沈線文→RLの単筋縄文→ 条線文→無文部磨き	床面	5% PL17
253	縄文土器	深鉢	[28.8]	(23.8)	-	長石・石英・ 赤色砂子	にぶい赤黒	普通	条線文→口唇部刻み・肩部線縄文→内面磨き	覆土下層	20% PL17
254	縄文土器	深鉢	-	(19.3)	-	長石・石英・ 赤色砂子	黒褐色	普通	塊縄文→条線文→縦位の平行沈線文→胎線文 内面磨き	P 2 覆土中層	20%

番号	器種	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1139	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	胎摺→沈線文→RLの単筋縄文→無文部ナデ 内面磨き	床 面	PL18
TP1140	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄灰	沈線文→RLの単筋縄文→無文部ナデ 内面ナデ	床 面	
TP1141	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗赤褐色	沈線文→胎摺→RLの単筋縄文→無文部ナデ 内面磨き	P5覆土層	PL18
TP1142	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	胎摺→沈線文・条線文→RLの単筋縄文→無文部ナデ 内面磨き	P5覆土層	
TP1143	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明褐色	地縄文→条線文→紐文 内面ナデ	P5黄土層	
TP1145	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	沈線文→磨き 内面磨き	床 面	
TP1146	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	沈線文→RLの単筋縄文→無文部ナデ 内面磨き	床 面	
TP1147	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	地縄文→条線文→縦位の沈線文→紐文 内面磨き	覆土下層	
TP1148	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	地縄文→条線文→紐文 内面磨き	覆土下層	
TP1149	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい褐色	沈線文→RLの単筋縄文→磨き 内面磨き	床 面	PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特 徴	出土位置	備考
DP110	土偶	(7.1)	(5.7)	(3.2)	(124.0)		山形土偶の腹部一隅部 背面及び臀部に横位の条線刻文を施した粘土を貼り付け腹部を表現	伊吹層中	PL22
DP111	耳栓	径1.3	-	1.5	2.3	にぶい黄褐色 長石・石英	解みによる加飾 側面ナデ	覆土中層	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備考
Q104	磨石	6.5	6.4	3.5	222.8	安山岩	全無磨研磨	P5黄土層	PL23
Q105	石鏃	4.5	2.8	1.2	20.8	安山岩	扁平な鏃を素材とし、両端中央部を打ち欠く	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備考
B7	研削具	(5.1)	0.6	0.5	(1.79)	シカ中手骨	先端部欠損 基部尖頭状に研磨 研磨整形	床 面	PL24
B8	須形骨角製品	(2.5)	1.6	1.6	(3.24)	鹿角	研磨整形 孔径 0.5～1.1cm	覆土下層	PL24

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備考
S27	貝輪	8.8	3.7	1.5	(15.70)	オキツタノハ	両端部一方向からの穿孔 切断面研磨	覆土下層	PL26

第18号住居跡 (第16～18区)

位置 調査E区のG4a5区、標高22～23mほどの南西方向に向かう谷津際の斜面部に位置している。

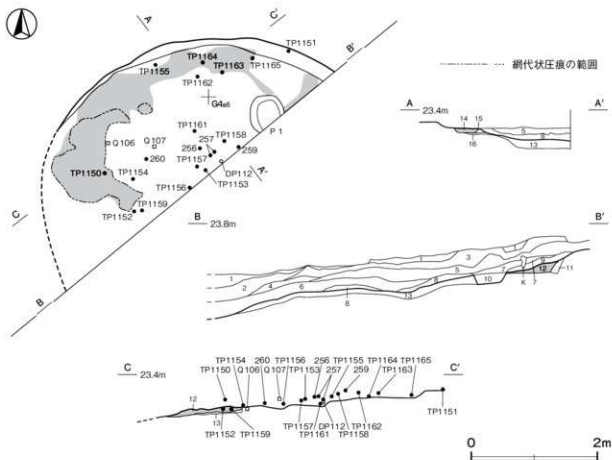
重複関係 推定される南西部の上位に南部包含層が堆積している。

規模と形状 南東半部が調査区域外に及んでおり、また南西部の壁も流出していたため、北東-南西径は5.50m、北西-南東径は2.25mしか確認できなかったが、平面形は円形もしくは楕円形と推定される。北側で残存している壁高は20cmほどで、緩やかな傾斜で立ち上がっている。

床 南西方向に緩やかに傾斜している。砂粒を含んだ地山を床面としているため、全体が非常によく締まっている。壁際に沿って環状に焼土が認められ、南西部の焼土上面では網代状の圧痕を確認した。

ピット 1か所。北東部に位置し、径55cm、深さ15cmほどの浅いピットである。深さから柱穴の可能性は低く、性格は不明である。覆土は、土層解説の第10層にあたり、砂粒を少量含んだ締まりの強い単一層である。

覆土 10層に分層できる。第1～9層は含有物の少ない黒褐色を基調とした土層である。このうち第2層は、遺物を多く含んだ南部包含層の一部である。南西部の立ち上がりを確認できず、本跡上の土層が連続して谷津に向かって流れている状況から、谷津の傾斜に沿って流入した自然堆積と考えられる。第11～16層は掘方への埋め土で、このうち第12・14層は若干締まりのある焼土層である。また、第10層はP1の覆土である。



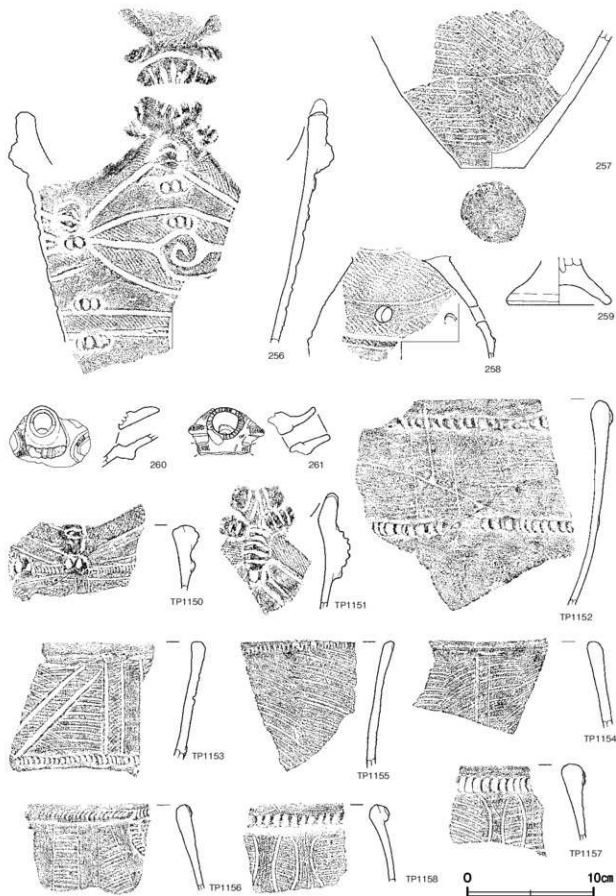
第 16 図 第 18 号住居跡実測図

土層解説

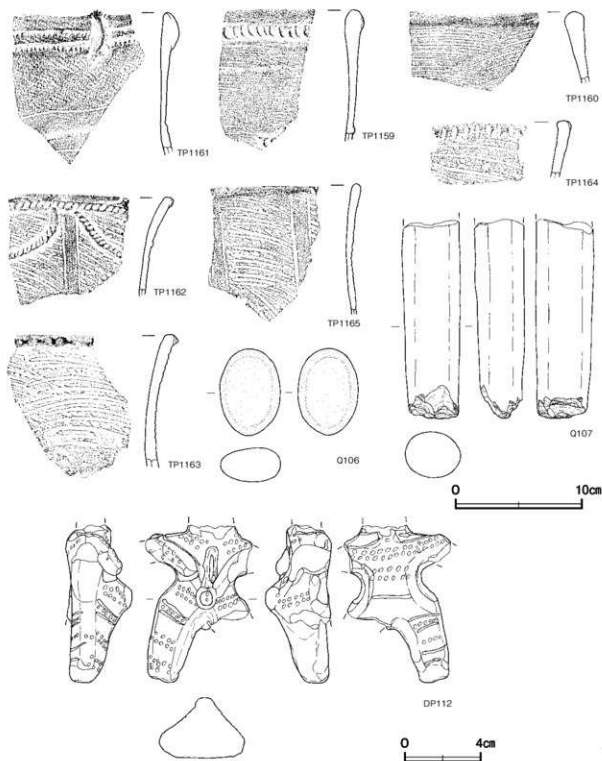
- | | | | |
|-------|-------------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | 焼土粒子・砂粒少量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 10 灰黄褐色 | 砂粒少量、ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 灰黄褐色 | 砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 12 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂粒微量 | 13 灰黄褐色 | 砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物微量 | 14 赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 7 黒褐色 | 砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 黒褐色 | 焼土ブロック中量、砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 8 黒褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物・砂粒微量 | 16 灰褐色 | 焼土粒子・砂粒中量 |

遺物出土状況 縄文土器片 3,526 点、土製品 1 点（土偶）、石器 8 点（石皿 2、磨石 6）、石製品 1 点（石棒）、剥片 1 点（チャート）のほか、少量の獣骨片が出土している。ほとんどの土器が細片の状態でも出土している。これらの遺物の出土層位は第 5・6 層が中心で、住居跡のほぼ中央部に集中していることから、本住居廃絶後、第 7～9 層が埋没した後、廃棄されたものと考えられる。DP112 は、中央部の覆土下層から多量の土器片とともに横位で出土しており、土器片とともに廃棄されたものと考えられる。

所見 土器は、後期中葉の加曾利 B 式から晩期前葉の安行 3a 式まで確認でき、破断面が磨滅しているものも多く見られることから、北部の台地上から流れ込んだものも一定量含まれていると考えられる。主体となる土器は後期後葉の安行 2 式土器であるため、時期は安行 2 式期以前の後期後葉と考えられる。また、網代状の圧痕が残る焼土層は、層厚が厚いことや焼成による顕著な硬化面が認められないことなどから、湿気防止などの目的で意図的に床に入れたものと考えられる。



第17图 第18号住居跡出土遺物実測図(1)



第18図 第18号住居跡出土遺物実測図(2)

第18号住居跡出土遺物観察表(第17・18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
256	縄文土器	深鉢	[23.7]	(19.3)	-	長石・石英・赤色粒土	にぶい黄褐色	普通	沈線文→RLの単線縄文→貼留→無文部ナデ内面ナデ	覆土中層	10% PL17
257	縄文土器	深鉢	-	(11.0)	5.0	長石・石英	にぶい橙	普通	条線文 内面ナデ 底部胡り	覆土下層	10%
258	縄文土器	台付鉢	-	(8.1)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	穿孔→袋帯文→沈線文→RLの単線縄文→無文部ナデ 内面ナデ	覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
259	縄文土器	台付土器	-	(3.8)	8.0	長石・石英	明赤褐色	普通	内・外面ナデ	覆土中層	30% PL16
260	縄文土器	注口土器	-	(4.8)	-	長石・石英	赤褐色	普通	胎面→沈線文→削み→無文部磨き 内面ナデ	床 面	5%
261	縄文土器	注口土器	-	(3.8)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	底の無筋縄文→隆帯文→削み・沈線文	覆土中	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1130	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	胎面→沈線文→削み・RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土下層	PL18
TP1131	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	胎面→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	覆土中層	PL18
TP1132	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	条線文→縦位の平行沈線文→絛線文 器面磨滅	床 面	PL18
TP1133	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	条線文→絛線文→平行沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	覆土下層	
TP1134	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	条線文→縦位の平行沈線文 内面ナデ	床 面	
TP1135	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	条線文→口唇部削み 内面磨き	覆土下層	
TP1136	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	条線文→縦位の沈線文→無文部磨き→絛線文 内面ナデ	床 面	PL18
TP1137	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	条線文→弧状沈線文→無文部磨き→絛線文 内面ナデ	覆土下層	
TP1138	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	条線文→弧状沈線文→無文部磨き→絛線文 内面磨き	覆土中層	PL18
TP1139	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	条線文→絛線文 内面ナデ	床 面	
TP1140	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	条線文 内面磨き	覆土中	
TP1161	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	胎面→沈線文・削み→RLの単筋縄文 内面磨き	床 面	PL18
TP1162	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	地縄文→条線文→絛線文→縦位の平行沈線文→無文部磨き 内面磨き	覆土中層	
TP1163	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	地縄文→条線文→絛線文 内面磨き	覆土下層	
TP1164	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	条線文→口唇部削み 内面ナデ	床 面	
TP1165	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	地縄文→条線文→縦位の沈線文→無文部ナデ 内面ナデ	床 面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP112	土偶	(8.4)	(5.7)	3.5	(99.2)	橙 長石・石英・赤色粒子	ミミズク土偶の胴部→胸部 隆帯文・沈線文・刺突文 胸部突出	覆土下層	PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q106	磨石	6.9	4.8	2.7	1546	安山岩	全面研磨	床 面	
Q107	石棒	(15.9)	4.6	3.9	(440.8)	粘板岩	両端部欠損 敲石転用 焼熱	覆土下層	PL23

第19A・19B・19C号住居跡 (第19～26図)

位置 調査B区のF3e7区、標高25mほどの斜面部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。同貝層を掘り込んでいる第280号土坑よりも古く、床下から第275号土坑を確認した。第19A号住居跡、第19B号住居跡、第19C号住居跡の順で構築されている。

確認状況 中央を南北に通した土層・貝層観察用ベルトを残して第2号貝層を掘り下げたところ、南北4.0m、東西5.0mほどの範囲で焼土及び灰の分布を確認した。焼土は、東壁際で若干の高まりをもって尾根状に2条、北壁際で1条、北壁と東壁に沿って分布していた。床面下にトレンチを設定し土層を観察したところ、上層から黄灰色・赤褐色・黒色の3層1組の層が薄いローム土主体の間層をはさんで2組堆積していることが分かった。また、両層の下位ではローム土の床面が確認できたことから、2回の建て替えが行われた住居跡を想定し、時系列に沿って下位から第19A号住居跡、第19B号住居跡、第19C号住居跡とした。また、当該の南側は平成21年度調査区(平成23年度整理・第364集)の第2号焼成遺構と接している。

規模と形状 西壁と南壁が確認できなかったため明確ではないが、柱穴・出入口に伴うピットや炉の配置及び焼土・灰の分布範囲などから、推定される規模は、南北軸で第19A号住居跡が6.1m、第19B号住居跡が6.6m、第19C号住居跡が7.3mで、東西軸についてはいずれも5.5m以上と考えられる。平面形は方形また

は長方形と推定され、主軸方向はいずれもN-14°-Wである。壁高は、第19A号住居跡が43cm、第19B号住居跡が35cm、第19C号住居跡が30cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 西部はいずれも削平もしくは流出しているため明確ではない。第19A号住居跡は、ローム土の地山を床面としており、全面的によく締まっているが、顕著な硬化面は認められない。第19B号住居跡は、上層から灰白色層・赤褐色層・黒色層の順で床面を構築しており、やや締まりがある。第19C号住居跡は、第19B号住居跡と同様の構築状況であるが、最上層に網代状の炭化物が床面に敷かれたような状態で出土している。

炉 3か所。層位から炉Aが第19A号住居跡、炉Bが第19B号住居跡、炉Cが第19C号住居跡に帰属する。炉Aは、ほぼ中央部に位置している。西端の一部をP24に掘り込まれているが、長径60cm、短径44cmの楕円形で、床面を6cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。掘り込みの周縁部が被熱により赤変硬化しており、中央部のくぼみには灰が堆積している。炉Bは、長軸98cm、短軸93cmの方形の範囲に焼土ブロック混じりの灰の分布が確認でき、その中央には径60cmほどの内側から黒褐色土・灰・黒褐色土・灰の順で同心円状のプランが確認できた。炉体は中央部の円形の部分で、床面から23cmほど鍋底状に掘りくぼめた地床炉であり、炉床面は第5層上面で、被熱により赤変硬化している。炉体の周縁にある方形区画部は、層厚が最大で5cmほどの焼土ブロック混じりの灰層で、土層からは存在が確認できなかったが、方形の炉囲いが存在していた可能性が高い。炉Cは、立ち上がりは確認できなかったが、長径115cm、短径80cmほどの範囲で焼土と灰が確認できた。地床炉と考えられ、炉床面は第2層下面で、被熱により赤変硬化している。これら3か所の炉は、北東から南西に向かって、層位を変えながら、炉A、炉B、炉Cの順で連続して構築されたと考えられ、住居本体の移動・建て替えを直接反映したものと判断される。

炉A土層解説

- 1 灰白色 灰多量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・灰少量、炭化粒子微量

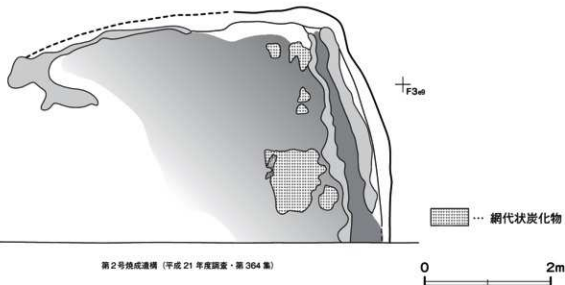
炉C土層解説

- 1 灰白色 灰多量、焼土ブロック少量
- 2 赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・灰少量、炭化粒子・磁砂目（被熱）微量

炉B土層解説

- 1 黒色 焼土粒子・炭化粒子・灰少量
- 2 灰白色 灰多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 灰多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 濃い赤褐色 灰多量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック中量、灰微量
- 6 灰白色 灰多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 第19A・19B・19C号住居跡を合わせて90か所を確認したが、それぞれのピットの帰属を明らかにすることは難しい。上位にある第19B・19C号住居跡の壁際を巡っている焼土下や第19A号住居跡の壁際から、ほぼ等間隔に並んだP40～P64は深さ12～46cm（平均31.8cm）の小ピット列で、第19A号住居跡に帰属する壁柱穴と考えられる。径が40～90cmの比較的大きめで、深さが40cm以上のP1～P13は、規模や配置などからいずれかが主柱穴と考えられる。また、P67～P78は東壁外にはほぼ一定の距離で並んでいることから、壁外柱穴を含めて本跡に伴う柱穴と考えられるが、第19A・19B・19C号住居跡のいずれに帰属するのは明確でない。P79～P90は配置から出入口に伴うピットと考えられる。P80・P84及びP88・P89間の溝状の凹みは、それぞれ第19A・19B・19C号住居跡の南端部に対応することが想定され、P79～P81が第19A号住居跡、P82～P84が第19B号住居跡、P85～P90が第19C号住居跡に伴うと考えられる。その他のピットの性格は不明であるが、その多くが主柱穴と想定される柱穴の周囲に位置していることから、上層保持のための補助的な柱穴と考えられる。覆土は、暗褐色を基調としたローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含んでいるものが多く、いずれも埋め戻されている。



第2号焼成遺構 (平成21年度調査・第364集)

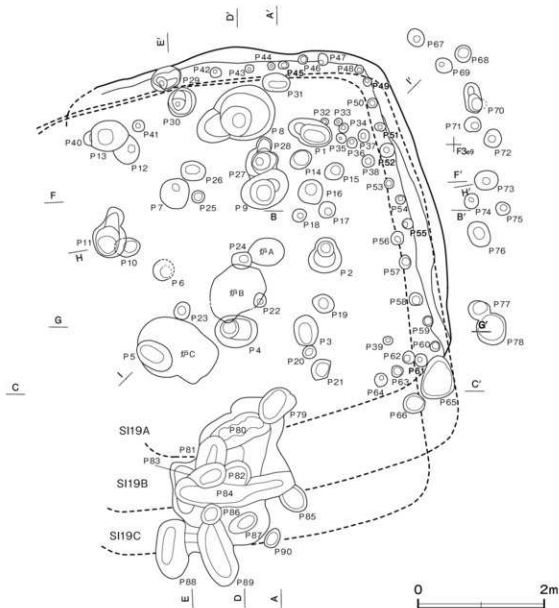
第19図 第19A・19B・19C号住居跡実測図(1)

覆土及び床構築土 第19A・19B・19C号住居跡を合わせて14層に分層できる。本住居跡は、上位を第2号貝層に覆われており、これらの層の詳細は第2号貝層の項で述べる。第1～3層は、第19C号住居跡の床構築土で、上位から黄灰色をした灰層、赤褐色の焼土層に漸次変化している。第1層の上面からは、東部の一部で網状の炭化物を確認している。第4層はロームブロックを多量に含んだ締まりのある第19B号住居跡と第19C号住居跡の間層で、建て替えの際に整地を目的に埋め戻されたものと考えられる。第5～8層は第19B号住居跡の床構築土で、第6層は第3層とほぼ同じ様相を呈している。第7・8層は炭化粒子を多く含んだ層で床下に湿気防止などの目的で充填されたものと考えられる。なお、第19B号住居跡の床面からは網状の炭化物は確認されなかった。第9～11層は、第19A号住居跡の覆土で、ロームブロック混じりのやや締まりのある層であり、第9・10層が自然堆積した後に第11層が埋め戻されたと考えられる。また、第12層はP 31、第13層はP 18、第14層はP 17の覆土である。これらの土層中には、貝が一定量含まれているが、殻頂部が残存しているものは178点(うちヤマトシジミ164点)だけで、ほとんどが破砕貝で、被熱により灰色化した貝の割合が高いことも指摘できる。また、第15～19層は出入口に伴う施設の覆土であり、粘土ブロックを含んだローム土主体の層で、いずれも埋め戻されている。

土層解説

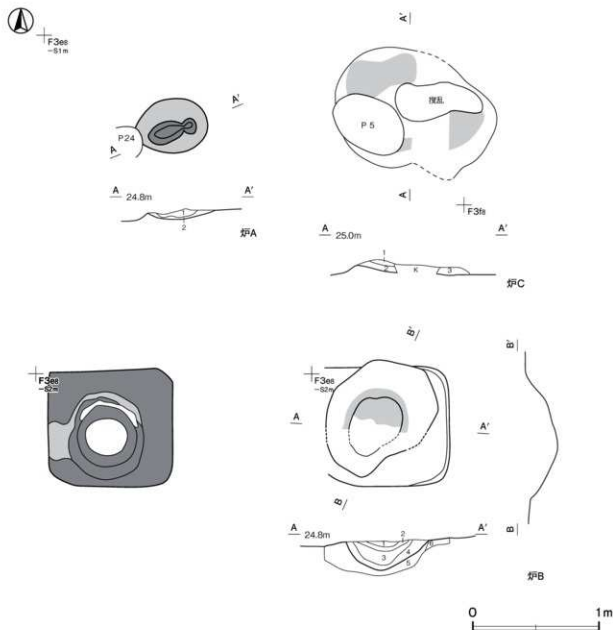
1 黄 灰 色	灰多量、焼土ブロック・炭化物少量	11 褐 色	ロームブロック多量、焼土粒子微量
2 赤 褐 色	焼土ブロック多量、灰中量、破砕貝(被熱)微量	12 褐 色	ロームブロック多量、焼土ブロック微量
3 黄 灰 色	灰多量、焼土ブロック・炭化物中量	13 暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗 褐 色	ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子少量、炭微量	14 灰 黄 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
5 暗 赤 褐 色	焼土ブロック・灰中量、炭化物少量、ロームブロック・破砕貝(被熱)覆量	15 暗 赤 褐 色	焼土ブロック中量、炭化粒子・灰少量
6 黄 灰 色	灰多量、焼土ブロック・炭化粒子中量	16 黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量、破砕貝微量
7 黒 色	炭化粒子多量、ローム粒子・炭微量	17 黒 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
8 黒 色	炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・灰少量、破砕貝微量	18 灰 黄 褐 色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量
9 暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	19 黒 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
10 黒 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量		

遺物出土状況 最上位の第19C号住居跡の床面から最下位の第19A号住居跡の床面までの層位から出土した遺物を本跡の層別とした。第19A・19B・19C号住居跡合わせて、縄文土器片1433点、土製品2点(耳飾り)、石器16点(石鎌2、磨製石斧2、石皿2、磨石4、敲石2、砥石4)、剥片1点(チャート)、骨



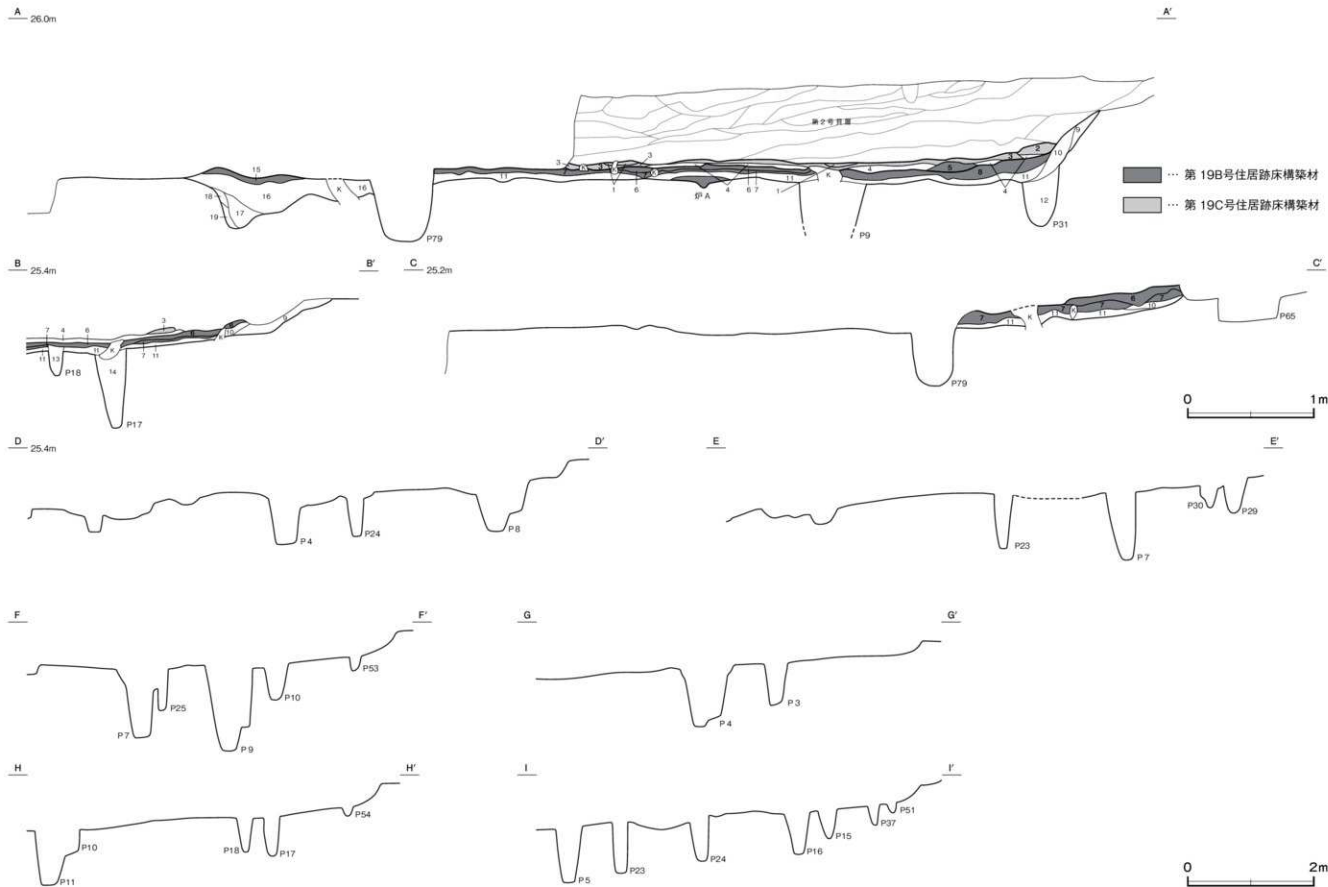
第20図 第19A・19B・19C号住居跡実測図(2)

角歯牙製品2点(刺突具, 弓形骨角製品), 貝製品3点(ヘラ状貝製品2, 貝輪1)のほか, 網代状炭化物, 板状の炭化材が出土している。土器の多くは, 第19C号住居跡の床面から出土しているもので, 細片の状態で散在している。床面の焼土中から出土している土器も少数認められ, 被熱率が高い。加曾利B3式から安行1式までの土器片が見られるが, 平面位置・層位ともにまともには認められない。264, TP1172, Q109・Q111は第19A号住居跡の床面から, TP1174, DP114, Q114, B10は第19B号住居跡の床面から, TP1166~TP1170・TP1173・TP1175, Q117, B9, S28は第19C号住居跡の床面からそれぞれ出土している。Q112・Q116は第19C号住居跡の焼土中からの出土である。また, 263はP9の覆土下層, 265はP30の覆土中, TP1171はP7の覆土中層, DP113はP25の覆土中, Q108はP88の覆土上層, Q110・Q113はP11の覆土上層, Q115はP3の覆土上層, Q118はP23の覆土上層からそれぞれ出土している。網代状炭化物は第19C号住居跡床面の北東部を中心に出土しており, 床面に敷かれたものと判断される。また, 板状の炭化材は網代状炭化物の上面に載った状態で出土している。



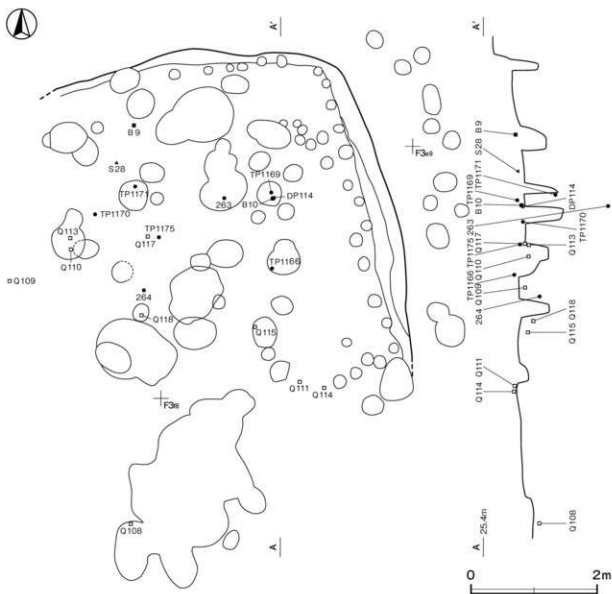
第21図 第19A・19B・19C号住居跡実測図(3)

所見 北壁をほぼ共有し、南西方向に拡張しながら建て替えられた住居跡である。ほぼ同位置で上位に床を構築しながら建て替えられている点で、第17A・17B号住居跡や平成21年度調査の第3・4号住居跡と共通しており、関東地方における縄文時代後・晩期の住居跡には類例も多い。第19B・19C号住居跡の床面の様相は共通しており、ともに下位に赤褐色の焼土層、上位に黄灰色をした灰層を貼っている特徴的なものである。科学分析によると、黄灰色層は貝類や獣骨類を加熱・粉砕したことを示す成分が含まれていることが分かった。また、赤褐色層は黄灰色層と類似した組成であるが、黄灰色物質を焼成する際に形成された焼土を混和したと考えられている。これらの物質は、床の構築材として生成された可能性が高いことも指摘されている。また、第19C号住居跡床面で確認した網代状炭化物はイネ科タケ亜科の植物を1cmほどの単位で縦横に編み込んだものであり、第18号住居跡の床面で確認した網代状の圧痕とはほぼ一致している。一方、網代状炭化物に載った状態で出土している板状の炭化材の樹種は、ブナ科クリ属クリであり、建築部材の一部と考えられる。出土している土器は、後期中葉加曾利B式から後期後葉安行1式土器で、層位ごとの傾向を把握することは困



第 22 图 第 19 A · 19 B · 19 C 号住居跡实测图 (4)

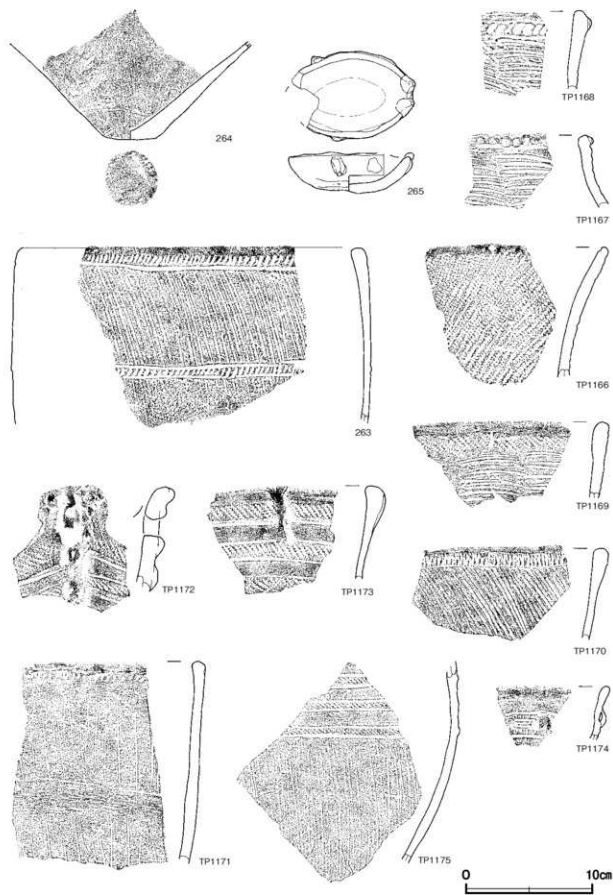
甕であるが、主体となるのは安行1式土器であることや第2号貝層との新旧関係から、時期は後期後葉と考えられる。出土土器に大きな時期差が認められないことや土層の様相から、第19A・19B・19C号住居跡は、連続して建て替えられたものと判断される。



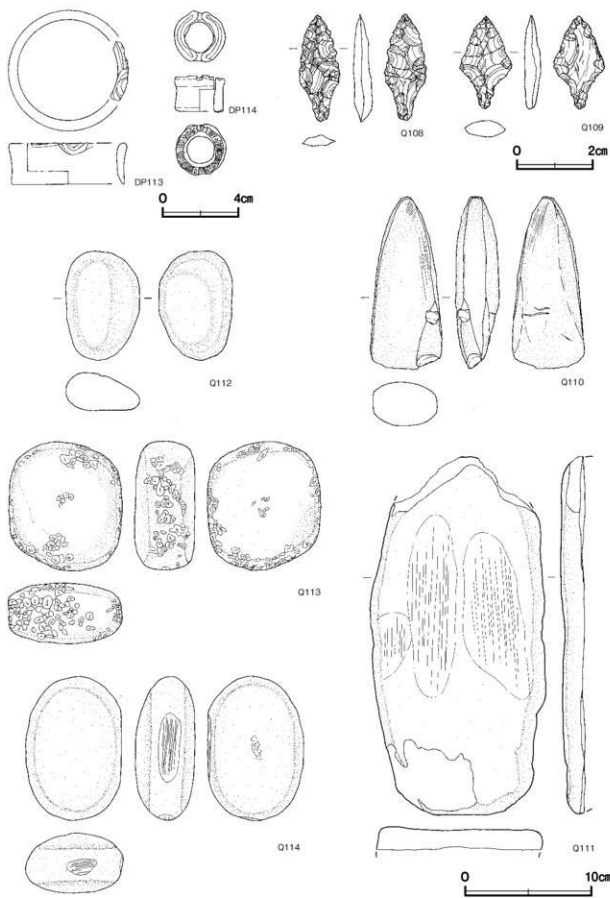
第23図 第19A・19B・19C号住居跡実測図(5)

表5 第19A・19B・19C号住居跡ピット計測表

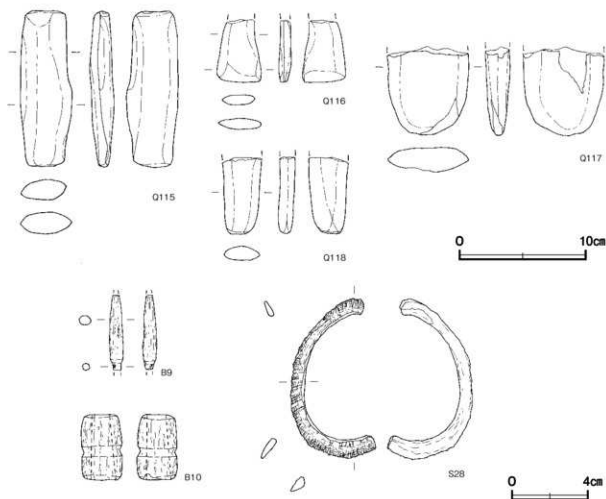
番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)	番号	深さ (cm)
P 1	45	P 13	58	P 25	85	P 37	37	P 49	12	P 61	26	P 73	8
P 2	42	P 14	52	P 26	74	P 38	36	P 50	21	P 62	32	P 74	23
P 3	82	P 15	54	P 27	44	P 39	15	P 51	16	P 63	18	P 75	10
P 4	96	P 16	66	P 28	26	P 40	-	P 52	46	P 64	39	P 76	42
P 5	115	P 17	61	P 29	52	P 41	36	P 53	25	P 65	22	P 77	28
P 6	118	P 18	52	P 30	43	P 42	19	P 54	16	P 66	22	P 78	28
P 7	113	P 19	48	P 31	58	P 43	14	P 55	23	P 67	40	P 79	42
P 8	72	P 20	39	P 32	9	P 44	12	P 56	22	P 68	21	P 80	18
P 9	143	P 21	24	P 33	43	P 45	15	P 57	36	P 69	38	P 81	31
P 10	48	P 22	72	P 34	35	P 46	24	P 58	29	P 70	46	P 82	20
P 11	97	P 23	88	P 35	35	P 47	28	P 59	23	P 71	25	P 83	40
P 12	220	P 24	81	P 36	37	P 48	23	P 60	23	P 72	36	P 84	31



第24图 第19A·19B·19C号住居跡出土遺物実測図(1)



第25图 第19A·19B·19C号住居跡出土遺物実測図(2)



第26図 第19A・19B・19C号住居跡出土遺物実測図(3)

第19A・19B・19C号住居跡出土遺物観察表(第24～26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
263	縄文土器	深鉢	[27.0]	(13.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐色	普通	条線文→沈線文→沈線文間詰め 内面磨き	P9 覆土下層	10%
264	縄文土器	深鉢	-	(7.6)	4.2	長石・石英・雲母	褐色	普通	胴部下縁磨き 内面ナデ 底部網代痕・ナデ	SI19A床面	5%
265	縄文土器	シナヤ ¹ 土器	[9.2]	3.3	-	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	普通	貼輪・把手→土位ナデ・下位削り 内面ナデ	P30 覆土中	90% PL16

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1166	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐色	LRの半筋縄文 口唇部内面沈線 内面磨き	SI19C床面	
TP1167	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	条線文→経線文 内面磨き	SI19C床面	
TP1168	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	地縄文→条線文→経線文 内面ナデ	SI19C床面	
TP1169	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	条線文→RLの半筋縄文 内面ナデ	SI19C床面	
TP1170	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐色	地縄文→条線文→沈線文→口唇部削み 内面ナデ	SI19C床面	
TP1171	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	口唇部上段及び下位横位の磨き→縦位の条線文→口唇部削み 内面磨き	P7 覆土中層	PL18
TP1172	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐色	貼輪→沈線文→RLの半筋縄文→無文部磨き 内面磨き	SI19A床面	PL18
TP1173	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	暗褐色	貼輪→沈線文→RLの半筋縄文→無文部磨き 内面磨き	SI19C床面	PL18
TP1174	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐色	把手→沈線文→沈線文間磨き→無文部磨き 内面磨き	SI19B床面	PL18
TP1175	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐色	条線文→沈線文→RLの半筋縄文 内面ナデ	SI19C床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP113	耳飾り	径 (6.3)	孔径 (6.0)	2.2	(3.44)	明赤褐色に白点・長石・石英	沈線と刻みで加飾 側面・内面磨き	P25 覆土中	
DP114	耳飾り	径 (6.7)	孔径 (6.2)	2.0	10.11	明赤褐色に白点・長石・石英	沈線と刻みで加飾 側面ナデ	SI19B床面	PL21
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q108	石鏡	29	1.1	0.5	1.18	黒曜石	有蒸眼 両面押圧剥離	P88 覆土上層	PL24
Q109	石鏡	2.5	1.4	0.4	1.19	チャート	有蒸眼 両面押圧剥離	SI19A床面	PL24
Q110	磨製石斧	13.7	5.7	3.6	366.7	凝灰岩	定角式 基部調整	P11 覆土上層	PL23
Q111	石鏡 (28.4)	14.0	(2.0)	(0.57)		雲母片岩	3か所に研痕 表面潤滑	SI19A床面	
Q112	磨石	8.8	5.9	3.0	203.2	安山岩	全面研磨 被熱により一部赤変	SI9C 瓮土中	
Q113	磨石	10.3	9.0	5.8	744.7	安山岩	表裏面研磨 中央部に原痕状の最打痕 全縁縁最打痕	P11 覆土上層	
Q114	磨石	11.5	7.7	4.8	609.3	安山岩	全面研磨 二側縁研磨面著 一面に原痕状の最打痕	SI19B床面	PL23
Q115	砥石	12.4	4.0	1.9	102.6	砂岩	両側縁研磨により刃状 両端部研磨	P 3 覆土上層	PL23
Q116	砥石 (5.0)	3.5	1.0	(13.6)		砂岩	両側縁研磨により刃状 一端部研磨	SI9C 瓮土中	
Q117	砥石 (7.1)	(6.5)	(2.0)	(98.1)		砂岩	表裏面研磨 両側縁研磨により刃状	SI19C床面	
Q118	砥石 (6.0)	3.1	1.2	(30.6)		砂岩	両側縁研磨により刃状 一端部調整	P23 覆土上層	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
B9	刺突具	(0.4)	0.7	(0.5)	(1.85)	シカ中手(足)骨	先端部・基部欠損 基部蒸気状 被熱により黒化	SI19C床面	PL24
B10	突刺骨角製品	3.5	2.2	2.1	109.4	鹿角	地肌を残す粗い研磨調整 孔径 1.0～1.4cm	SI19B床面	PL24
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
S28	貝輪	8.5	(4.6)	0.8	(7.57)	オオツタノハ	右半部欠損 切断面研磨調整	SI19C床面	PL26

表6 縄文時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模(m) 長軸×短軸 (※)×(※)	壁高 (cm)	床面	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期	備考 重施関係(古→新)			
							柱穴	壁柱	出入口(ピット)							
16	E 3 J8	[長方形]	N-36°-E	[7.0×5.0]	-	ローム	6	4	-	14	1	人	縄文土器、石器	後期後葉	SK242	
17A	E 3 c8	楕円形	N-48°-W	5.65×4.80	14-25	ローム	7	19	4	4	1	1	人	縄文土器、土製品、石器、骨角歯牙製品	後期後葉	SK259→本跡→SI17H、SK258、270、SM2
17B	F 3 c8	楕円形	N-48°-W	5.65×4.75	10-16	粘床	36	3	7	1	1	人	縄文土器、土製品、石器、骨角歯牙製品、貝製品	後期後葉	SI17A、SK259→本跡→SK258、270、SM2	
18	G 4 a5	[四角・楕円形]	-	(5.50×2.25)	20	ローム	-	-	-	1	-	1	人	自然	後期後葉	本跡→南部 HG
19A	F 3 e7	[正方形・長方形]	N-14°-W	[6.1×5.5~]	43	ローム	4	-	3	1	1	人	縄文土器、石器	後期後葉	SK275→本跡→SI19B、19C、SK280、SM2	
19B	F 3 e7	[長方形]	N-14°-W	[6.6×5.5~]	35	粘床	13	37	3	28	1	1	人	縄文土器、土製品、石器、骨角歯牙製品	後期後葉	SK275、SI19A→本跡→SI19C、SK280、SM2
19C	F 3 e7	[長方形]	N-14°-W	[7.3×5.5~]	30	粘床	-	-	6	1	1	人	縄文土器、石器、骨角歯牙製品、貝製品、磨石・砥石	後期後葉	SK275、SI19A、19B→本跡→SK280、SM2	

(2) 土坑

今回調査で、縄文時代の土坑70基を確認した。そのうち、覆土の堆積状況や遺物出土状況などが特徴的な23基については実測図と出土遺物観察表を示し、文章で説明する。出土遺物や遺存状況などの制約から時期判断が困難な47基については、出土遺物、形状、重複関係、覆土の様相などの総合的な所見から当時代に帰属するものと判断し、規模、形状などについて実測図と土層解説、一覧表で掲載する。

第221号土坑（第27図）

位置 調査B区のF3b7区、標高26mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第240号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東壁の一部を第240号土坑に掘り込まれているが、径は0.55mほどの円形と推測される。深さは57cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ直立している。

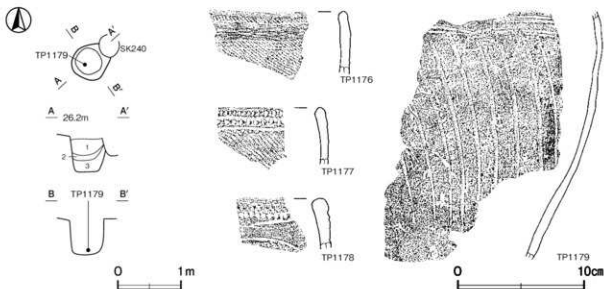
覆土 3層に分層できる。第1・2層は混貝土層で、第3層には微小な魚骨類が多量に含まれていることから埋め戻されている。覆土中から出土した貝は2,707点で、うちヤマトシジミが2,559点(2,120g)で全体の94.5%を占めている。

土層解説

- | | | | |
|--------|--|-------|-----------------------------|
| 1 混貝土層 | 黒褐色土主体、混貝率40%（ヤマトシジミ主体・炭砕率低い）、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | 微小魚骨多量、ロームブロック少量、炭化粒子・破砕貝微量 |
| 2 混貝土層 | 黒褐色土主体、混貝率20%（ヤマトシジミ主体・炭砕率中程度）、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・貝微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片101点のほか覆土下層から微小魚骨が出土している。TP1179は中央部のほぼ底面から出土しており、時期判断の指標となる遺物である。

所見 円筒状の比較的深い土坑で、下層から多量の魚骨がまとまって出土していることや中層から上層に混貝土層が形成されていることなどから、最終的には廃棄土坑として機能していた可能性が高い。時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第27図 第221号土坑・出土遺物実測図

第221号土坑出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1176	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	沈澱文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土中	
TP1177	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	沈澱文→RLの単筋縄文・口縁部割み・刺突文 内面磨き	覆土中	
TP1178	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	沈澱文→刺突文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土中	
TP1179	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	横位の条線文→縦位の条線文 内面ナデ	底面	

第223号土坑（第28図）

位置 調査B区のF3a8区、標高26mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第239号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.52m、短径0.46mの楕円形で、長径方向はN-36°-Wである。深さは124cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

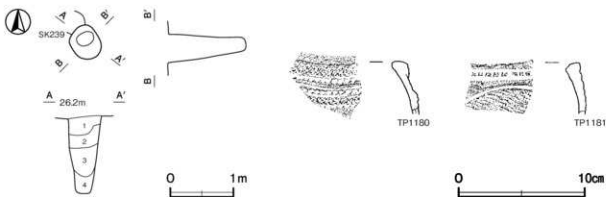
覆土 4層に分層できる。全層にロームブロックが、第1・2層には破砕貝が含まれていることなどから埋め戻されている。第1・2層中からは211点の貝が出土しており、うちヤマトシジミが199点（180g）で94.3%を占めている。また、破砕貝の割合が高い。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・貝微量 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・貝微量 4 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片58点が出土している。いずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。

所見 ビット状の深い土坑で、形状から柱穴とみられ、廃絶後に廃棄土坑として再利用された可能性がある。時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第28図 第223号土坑・出土遺物実測図

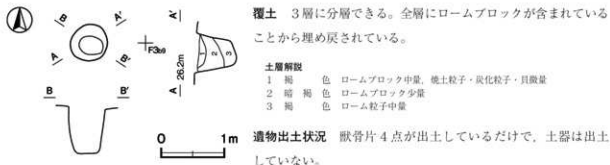
第223号土坑出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1180	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	沈澱文→刺突文・RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土中	
TP1181	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗灰黄	沈澱文→口縁部割み→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土中	

第224号土坑（第29図）

位置 調査B区のF3b8区、標高26mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 径0.6mほどの円形である。深さは71cmで、底面は北東から南西方向に向かってやや傾斜している。壁は外傾して立ち上がっている。



第29図 第224号土坑実測図

所見 円筒状の比較的深い土坑で、5mほど西に位置している第221号土坑と規模・形状などが類似しており、同様の性格を有していると想定できる。時期は、第221号土坑と同じ後期後葉と考えられる。

第238号土坑（第30図）

位置 調査B区のF4d1区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径0.41m、短径0.34mの楕円形で、長径方向はN-64°-Wである。深さは22cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

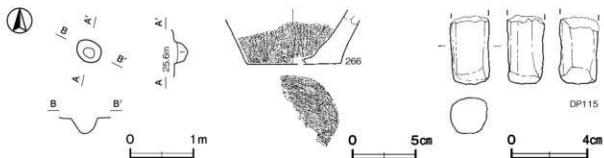
覆土 薄い単一層であるため、堆積状況の詳細は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・貝微量

遺物出土状況 縄文土器片20点、土製品1点（土偶）が出土している。266、DP115は、ともに覆土下層から出土している。

所見 遺構が集中する第2号貝層付近からやや離れた場所に位置していることから、詳細は不明ながら、遺構が集中する場所の土坑とは性格を異にする可能性がある。時期は、出土遺物から後期中葉から後葉と考えられる。



第30図 第238号土坑・出土遺物実測図

第 238 号土坑出土遺物観察表 (第 30 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
266	縄文土器	深鉢	-	(43)	[7.4]	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	胴部下端磨き 底面磨き 内面ナデ	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP115	土偶	(36)	(21)	(19)	(1951)	にえい赤褐色 長石・石英・黄緑	山形土偶の脚部 ナデ調整	覆土下層	

第 239 号土坑 (第 31 図)

位置 調査B区のF 3a8区、標高 26 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 223 号土坑に掘り込まれている。

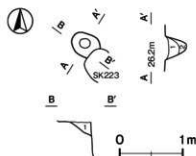
規模と形状 南東部を第 223 号土坑に掘り込まれているが、長径は 0.42 m、短径 0.37 mの楕円形で、長径方向は N-46°-W である。深さは 36 cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックや破砕貝を含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 層 褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・貝微量
- 2 層 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・貝微量

所見 ビット状の土坑で、規模と形状から柱穴の可能性がある。安行 1 式期と考えられる第 223 号土坑に掘り込まれていることから、時期は安行 1 式期以前の後期中業から後業と考えられる。



第 31 図 第 239 号土坑実測図

第 240 号土坑 (第 32 図)

位置 調査B区のF 3b7区、標高 26 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 221 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 径 0.35 mほどの円形である。深さは 31 cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

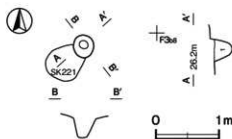
覆土 薄い単一層であるため、堆積状況の詳細は不明である。

土層解説

- 1 層 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・貝微量

遺物出土状況 縄文土器片 1点が出土している。

所見 ビット状の土坑で、規模と形状から柱穴の可能性がある。後期後業の第 221 号土坑を掘り込んでいることや覆土の様相が他の後期後業の土坑と類似していることから、時期は安行 1 式期以降の後期後業と考えられる。



第 32 図 第 240 号土坑実測図

第 244 号土坑 (第 33 図)

位置 調査B区のF 3d7区、標高 25 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 2号貝層下に存在している。第 284 号土坑を掘り込み、第 287 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東壁の一部を第287号土坑に掘り込まれているが、現存している長径は0.70m、短径0.63mの楕円形で、長径方向はN-57°-Wと推定される。深さは55cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

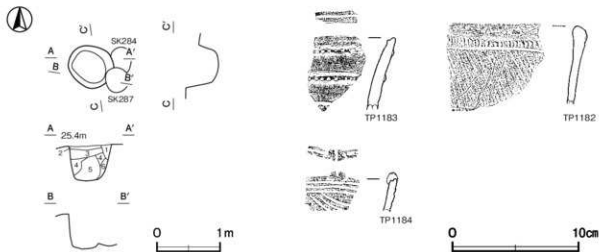
覆土 6層に分層できる。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片29点が出土している。いずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。

所見 円筒状の比較的深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性がある。土器は細片のみで時期判断が難しいが、後期中葉から後期後葉のものが含まれている。時期は、出土土器と第2号貝層を掘り込んでいることなどから、後期後葉以降としておきたい。



第33図 第244号土坑・出土遺物実測図

第244号土坑出土遺物観察表(第33図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1182	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐色	条線文→沈線文→口縁部削み 内面磨き	覆土中	
TP1183	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐色	沈線文・條線文→無文部磨き 口唇部内面沈線文 内面磨き	覆土中	
TP1184	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐色	粘着→斜行沈線文→横位の沈線文→無文部磨き 内面磨き 表面赤彩残存	覆土中	

第245号土坑(第34図)

位置 調査B区のF3d7区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。

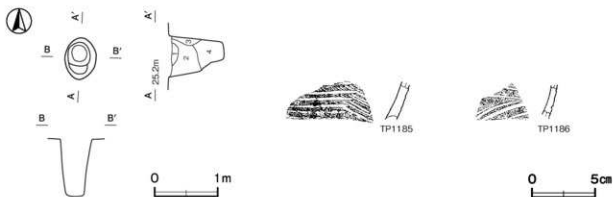
規模と形状 長径0.65m、短径0.51mの楕円形で、長径方向はN-4°-Eである。深さは91cmで、底面はほぼ平坦である。北西壁はほぼ直立し、他の壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロック・炭化粒子を含んだ不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片 12 点が出土している。いずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。
所見 円筒状の深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性はある。時期は、出土土器から後期中葉から後葉と考えられる。



第 34 図 第 245 号土坑・出土遺物実測図

第 245 号土坑出土遺物観察表 (第 34 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1185	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	条線文 内面磨き	覆土中	
TP1186	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	沈線文 内面磨き	覆土中	

第 246 号土坑 (第 35 図)

位置 調査B区のF 3 d7 区、標高 25 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 2 号貝層下に存在している。

規模と形状 径 0.4 m ほどの円形である。深さは 71 cm で、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ直立している。

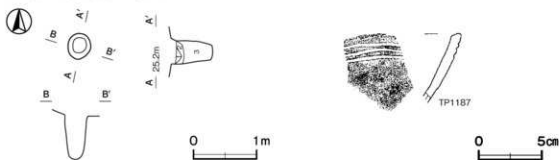
覆土 3 層に分層できる。ロームブロック・炭化粒子を含んだ不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片 13 点のほか獣骨片が出土している。いずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。

所見 ビット状の深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから柱穴や貯蔵穴の可能性はある。時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第 35 図 第 246 号土坑・出土遺物実測図

第 246 号土坑出土遺物観察表 (第 35 図)

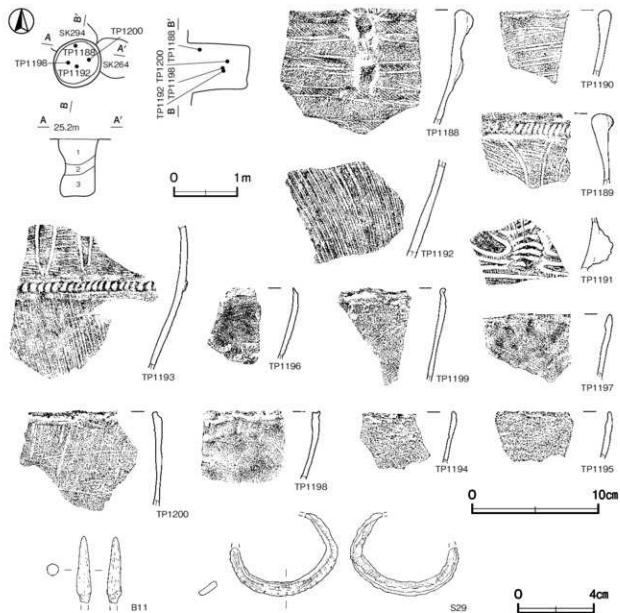
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1187	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	黒褐	無文部ナデテ・沈線文 内面磨き	覆土中	

第 247 号土坑 (第 36 図)

位置 調査B区のF3c7区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝刷下に存在している。第264・294号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.84m、短径0.72mの楕円形で、長径方向はN-43°-Eである。深さは98cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ直立している。



第 36 図 第 247 号土坑・出土遺物実測図

覆土 3層に分層できる。第1・2層は混貝土層であり、貝の廃棄行為にともなって埋め戻されている。混貝土層からは13,918点の貝が出土しており、うちヤマトシジミが13,554点(19,200g)で全体の97.4%を占めている。次いでハマグリ165点、シオフキ134点であり、第2号貝層の貝組成とほぼ一致している。

土層解説

- 1 混貝土層 暗褐色土主体、混貝率40%（ヤマトシジミ主体・破砕率中程度）、ローム粒子少量、炭化物微量
- 2 混貝土層 暗褐色土主体、混貝率40%（ヤマトシジミ主体・破砕率低い）、ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・破砕貝微量

遺物出土状況 縄文土器片424点、剥片1点（黒曜石）、骨角歯牙製品1点（刺突具）、貝製品1点（貝輪）のほか、獣骨片が出土している。土器片は上層から中層にかけて集中しており、第3層からの出土数は少ない。また、製塩土器が66点出土しており、覆土中層に集中する傾向が見られる。TP1188は北壁際の覆土上層から、TP1192・TP1198・TP1200は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 円筒状の深い土坑である。規模と形状から墓坑や貯蔵穴の可能性があるが、同様の規模や形状をもつ土坑と比して遺物の出土量が多いこと、中層から上層にかけて遺物が集中していること、貝の廃棄行為により混貝土層が形成されていることなどから最終的には廃棄土坑として機能していたと想定される。時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。

第247号土坑出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1188	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	胎座→沈線文→R.L.の半筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	覆土上層	
TP1189	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	条線文→沈線文→結線文 内面ナデ	覆土中層	
TP1190	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	条線文 内面磨き	覆土上層	
TP1191	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	胎座→沈線文→磨み・無文部磨き 内面ナデ	覆土中層	
TP1192	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐	条線文 内面ナデ	覆土中層	
TP1193	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	結線文→条線文→縦位の弧状沈線文→沈線文開磨き 内面ナデ	覆土中層	
TP1194	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	口唇部ナデ 外面磨り 内面ナデ	覆土中層	製塩土器
TP1195	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	口唇部ナデ 外面磨り 内面ナデ	覆土中層	製塩土器
TP1196	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	口唇部磨りにより尖唇化 外面磨り 内面ナデ	覆土中層	製塩土器
TP1197	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	口唇部ナデ 外面磨り 内面ナデ	覆土中層	製塩土器
TP1198	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	口唇部磨り後ナデ 外面磨り 内面ナデ	覆土中層	製塩土器
TP1199	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	口唇部磨り後ナデ 外面磨り 焼熱により一部剥離	覆土中層	製塩土器
TP1200	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	口唇部磨りにより尖唇化 外面磨り 内面ナデ	覆土中層	製塩土器

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
B11	刺突具	(3.5)	0.7	0.7	(1.31)	シカ中手骨	基部葉状 基部端部欠損 研磨整形	覆土中	PL24

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
S29	貝輪	(4.4)	5.7	1.0	(5.51)	サルボウ	内外面研磨整形	覆土中	

第252号土坑（第37図）

位置 調査B区のF3d7区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。

規模と形状 径0.35mほどの円形である。深さは91cmで、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ直立している。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含んでいることから埋め戻されている。

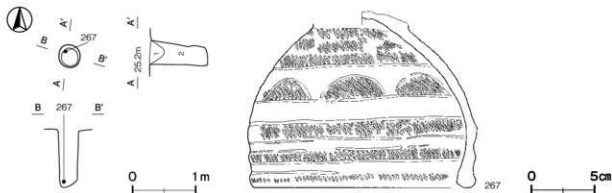
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器片6点が出土している。267は底面から横位で出土しており、時期判断の指標となる遺物である。

所見 円筒状の深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性がある。時期は、廃絶時に廃棄されたものと考えられる267から、後期後葉と考えられる。



第37図 第252号土坑・出土遺物実測図

第252号土坑出土遺物観察表(第37図)

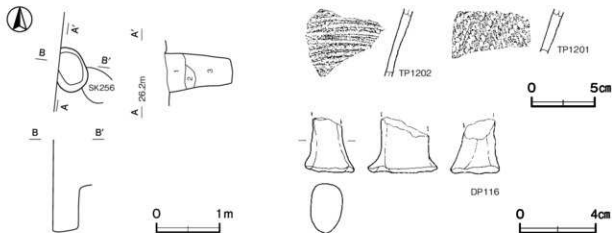
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
267	縄文土器	台付鉢	-	(14.1)	172	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐色	普通	沈澱文→RLの単節縄文→縄文部磨き内面ナデ	底面	40% PL14

第255号土坑(第38図)

位置 調査B区のF3c7区、標高26mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。第256号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 北西部の一部が調査区域外に及んでいるが、現存している長径は0.73m、短径0.50mの楕円形と推定され、長径方向はN-21°-Wである。深さは105cmで、底面はほぼ平坦である。北壁はほぼ直立し、他の壁は外傾して立ち上がっている。



第38図 第255号土坑・出土遺物実測図

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを多く含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物・貝微量
 2 褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片 37点、土製品1点（土偶）が出土している。いずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。

所見 円筒状の深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性がある。時期は、出土土器から後期中葉（加曾利B2～3式期）と考えられ、重複している第256号土坑との間に大きな時期差は認められない。

第255号土坑出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1201	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	LRの単純縄文 内面ナデ	覆土中	
TP1202	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	条線文 内面磨き	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP116	土偶	(29)	(3.7)	(2.7)	(19.3)	にがい質 長石・石英・雲母	ハート形土偶の脚部 ナデ調整 一部赤彩残存	覆土中	

第256号土坑（第39図）

位置 調査B区のF3c7区、標高26mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。第255号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北西壁の一部が第255号土坑に掘り込まれているが、長径0.65m、短径0.48mの楕円形で、長径方向はN-46°-Wと推定される。深さは66cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを多く含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量 2 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・貝微量

遺物出土状況 縄文土器片2点が覆土中層から出土している。

所見 円筒状の比較的深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性がある。時期は、出土土器から後期中葉と考えられ、重複している第255号土坑との間に大きな時期差は認められない。



第39図 第256号土坑・出土遺物実測図

第256号土坑出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1203	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	地縄文→条線文・経線文 口唇部内面沈線文 内面磨き	覆土中層	
TP1204	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	地縄文→条線文 内面磨き	覆土中層	

第259号土坑（第40図）

位置 調査B区のF3d8区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。第17A・17B号住居跡と重複しており、出土土器から当跡が古いと考えられる。

規模と形状 長径0.62m、短径0.55mの楕円形で、長径方向はN-50°-Wである。深さは52cmで、底面は南方向にやや傾斜している。壁は外傾して立ち上がっている。

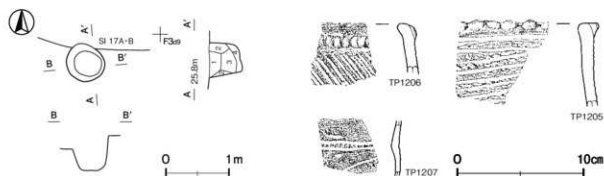
覆土 4層に分層できる。ロームブロックを多く含んだ不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 灰黄褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・貝微量 3 灰黄褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子・貝微量
2 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量 4 にぶい黄褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器片48点が出土している。いずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。

所見 円筒状の比較的深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性が有る。時期は、出土土器から後期中葉から後葉と考えられる。



第40図 第259号土坑・出土遺物実測図

第259号土坑出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1205	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	地縄文→経線文→条線文 内面ナゲ	覆土中	
TP1206	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	経線文→条線文 内面磨き	覆土中	
TP1207	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	沈線文→沈線文彫刻み・R.L.の単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土中	

第262号土坑（第41図）

位置 調査B区のF3b7区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。

規模と形状 径 0.85 m ほどの円形である。深さは 62cm で、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

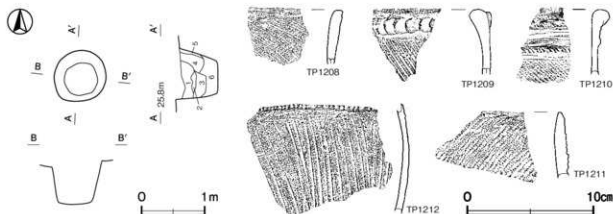
覆土 6層に分層できる。ロームブロックや破砕貝を含んだ不規則な堆積状況から埋め戻されている。覆土中に含まれている貝は 739 点で、うちヤマトシジミが 689 点 (660g) で全体の 93.2% を占めている。

土層解説

- | | | | |
|--------|---|-------|--------------------|
| 1 混貝土層 | 灰黄褐色土主体、混貝率 10% (ヤマトシジミ主体・
破砕率中程度)、ロームブロック少量、焼土粒子・
炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・貝微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子・貝微量 |
| | | 5 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| | | 6 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片 72 点のほか、獣骨片が出土している。土器はいずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。

所見 円筒状の比較的深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性がある。時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第 41 図 第 262 号土坑・出土遺物実測図

第 262 号土坑出土遺物観察表 (第 41 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1208	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	暗褐	条線文 内面磨き	覆土中	
TP1209	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	条線文・横線文 内面ナデ	覆土中	
TP1210	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	条線文・横線文→刷み→無文部磨き 内面磨き	覆土中	
TP1211	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	LRの単節縄文 内面ナデ	覆土中	
TP1212	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	条線文・刷み 内面磨き	覆土中	

第 264 号土坑 (第 42 図)

位置 調査B区のF3c7区、標高 25 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 2 号貝層下に存在している。第 247 号土坑に掘り込まれ、第 271 号土坑を掘り込んでいる。

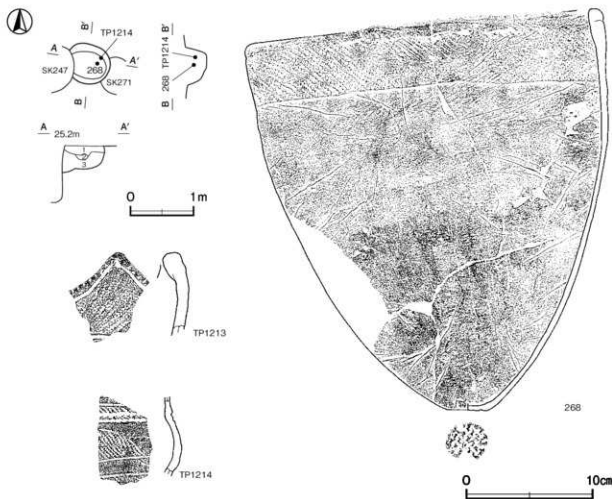
規模と形状 西壁の一部を第 247 号土坑に掘り込まれているが、現存している長径は 0.70 m、短径 0.62 m の楕円形で、長径方向は N - 76° - W と推定される。深さは 33cm で、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒 褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
 2 暗 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
 3 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片 24点が出土している。268は覆土中層から横位で出土している。TP1214を含めた土器片の多くが268とはほぼ同じ層位からまともに出土しており、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。
所見 楕円形の比較的浅い土坑で、形状や遺物出土状況から他の円筒状を呈する土坑とは性格を異にすると考えられ、廃棄土坑の可能性がある。時期は、出土土器から後期後葉と考えられ、重複している第247号土坑との間に大きな時期差は認められない。



第42図 第264号土坑・出土遺物実測図

第264号土坑出土遺物観察表 (第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
268	縄文土器	深鉢	[280]	32.0	3.2	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	普通	口縁部湾曲にRLの卑筋縄文 胴部削り内面上位ナデ・下位削り 底部網代敷	覆土中層	40% PL14
TP1213	縄文土器	深鉢				長石・石英	黒		口唇部沈線→削み→RLの卑筋縄文 内面磨き	覆土中層	
TP1214	縄文土器	深鉢				長石・石英	黒褐色		沈線文→RLの卑筋縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土中層	

第 266 号土坑 (第 43 図)

位置 調査B区のF 3d8区、標高 25 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 2号貝層下に存在している。

規模と形状 長径 0.57 m、短径 0.50 mの楕円形で、長径方向はN - 37° - Wである。深さは 58cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

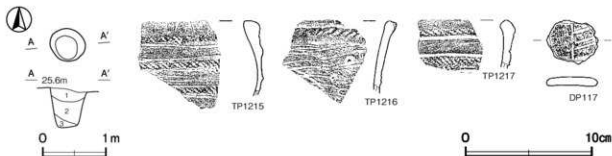
覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。層の傾斜から西方向からの埋め戻しが想定される。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 3 褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片 89 点、土製品 1 点 (土器片円盤) のほか獣骨片が出土している。縄文土器片のうち 2 点が製塩土器である。比較的大きな破片は覆土中層から下層にかけて集中している傾向が認められる。

所見 円筒状の比較的深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性がある。時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。



第 43 図 第 266 号土坑・出土遺物実測図

第 266 号土坑出土遺物観察表 (第 43 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1215	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	沈澱文→RLの単純縄文→無文部磨き 内面ナデ	覆土中～下層	
TP1216	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	条線文→縦線文 内面磨き	覆土中～下層	
TP1217	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	沈澱文→RLの単純縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土中～下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP117	土器片円盤	3.5	4.1	0.8	11.66	黒褐色 長石・石英	安行1式深鉢片利用 局縁部粗削り	覆土中～下層	

第 270 号土坑 (第 44 図)

位置 調査B区のF 3c8区、標高 25 mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 2号貝層下に存在している。第 17 A・17 B号住居跡 P 16 及び第 278 号土坑を掘り込んでいる。

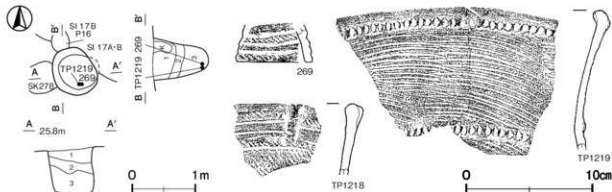
規模と形状 長径 0.80 m、短径 0.64 mの楕円形で、長径方向はN - 33° - Wである。深さは 85cmで、底面はほぼ平坦である。北東壁に括れを有し、他の壁はほぼ直立している。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。層の傾斜から南方向からの埋め戻しが想定される。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、埴土ブロック・炭化物・貝微量 3 暗褐色 ロームブロック多量、埴土粒子・炭化物・貝微量
2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物・埴土粒子・貝微量

遺物出土状況 縄文土器片61点のほか獣骨片が出土している。269及びTP1219はほぼ底面から出土しており、時期判断の指標となる遺物である。なお、TP1219は、第266号土坑から出土した破片と接合したものである。
所見 円筒状の比較的深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性はある。時期は、出土土器から後期後葉と考えられる。第17A・17B号住居跡を掘り込んでいるが、土器からは大きな時期差は認められない。



第44図 第270号土坑・出土遺物実測図

第270号土坑出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
269	縄文土器	台付鉢	-	(29)	(6.0)	長石・石英	黒褐色	普通	沈線文→RLの半周縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土下層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1218	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	貼附→沈線文→RLの半周縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土中	
TP1219	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	条線文→沈線文 内面磨き	覆土下層	

第271号土坑（第45図）

位置 調査B区のF3c7区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。第265号土坑を掘り込み、第264号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北西部を第264号土坑に掘り込まれているが、現存している長径は0.59m、短径0.51mの楕円形で、長径方向はN-6°-Wである。深さは46cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

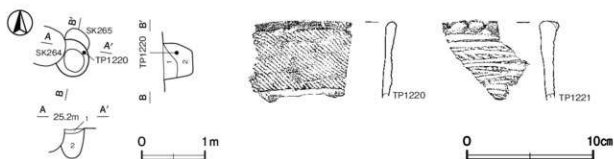
覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、貝微量 2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片16点のほか獣骨片が出土している。土器はいずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。TP1220は、覆土中層から出土しており、埋め戻しに伴って廃棄されたものと考えられる。

所見 円筒状の比較的深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性はある。時期は、出土土器から後期中葉から後葉と考えられる。



第45図 第271号土坑・出土遺物実測図

第271号土坑出土遺物観察表(第45図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1220	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	口縁部に段→丸の華筋縄文 内面磨き	覆土中層	
TP1221	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	経線文→地縄文→条線文 内面磨き	覆土中	

第276号土坑(第46図)

位置 調査B区のF3c7区。標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。第285号土坑に掘り込まれている。

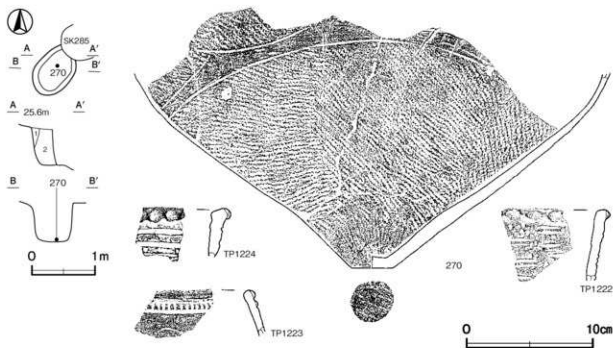
規模と形状 北東壁の一部を第285号土坑に掘り込まれているが、長径0.85m、短径0.58mの楕円形で、長径方向はN-43°-Eと推定される。深さは60cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、貝微量

2 暗褐色 ロームブロック中量



第46図 第276号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片 102 点、剥片 1 点（黒曜石）のほか獣骨片が出土している。いずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。270 は、中央部の底面から出土しており、時期判断の指標となる遺物である。

所見 円筒状の比較的深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性はある。時期は、出土土器から後期中葉から後葉と考えられる。

第 276 号土坑出土遺物観察表（第 46 図）

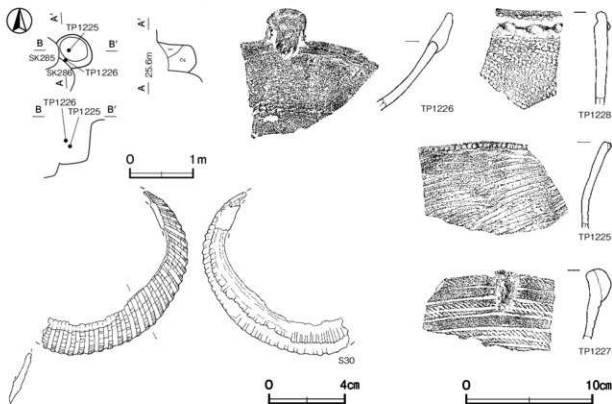
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
270	縄文土器	深鉢	-	(15.5)	3.2	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	普通	沈線文→R.L.の単線縄文→無文部及び胴部下縁磨き 内面及び底部磨き	底面	10%
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考				
TP1222	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	地縄文→絛縄文・手載竹管による沈線文 内面磨き	覆土中					
TP1223	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶ・褐	沈線文→刷み→無文部磨き 内面磨き	覆土中					
TP1224	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	地縄文→絛縄文 口唇部内面沈線文 内面磨き	覆土中					

第 277 号土坑（第 47 図）

位置 調査B区のF3c7区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。第285・286号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西壁の一部を第285・286号土坑に掘り込まれているが、長径0.62m、短径0.50mの楕円形で、長径方向はN-52°-Wである。深さは67cmで、底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。



第 47 図 第 277 号土坑・出土遺物実測図

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片 120 点、貝製品 1 点（貝輪）のほか獣骨片が出土している。いずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。TP1225 は中央部、TP1226 は壁際のそれぞれ覆土中層から出土している。

所見 円筒状の比較的深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから墓坑や貯蔵穴の可能性がある。時期は、出土土器から後期中葉から後葉と考えられる。

第 277 号土坑出土遺物観察表（第 47 図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1225	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	絞線文→捺線文 内面磨き	覆土中層	
TP1226	縄文土器	浅鉢	長石・石英	黒褐	把手貼付→内・外面磨き	覆土中層	
TP1227	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	輪瘤→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土中	
TP1228	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	RLの単筋縄文→絞線文 口唇部内面沈線文 内面磨き	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
S30	貝輪	(87)	(7.8)	(23)	(16.90)	アキガイ	内面潤滑面著 磨蝕變形	覆土中層	PL26

第 280 号土坑（第 48 図）

位置 調査B区のF3e8区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第19C号住居跡上面で確認した。第2号貝層を掘り込んでいる。

確認状況 第2号貝層を掘り込んだところ、同貝層の中央部に南北に通した貝層観察用ベルトにおいて掘り込みを確認した。

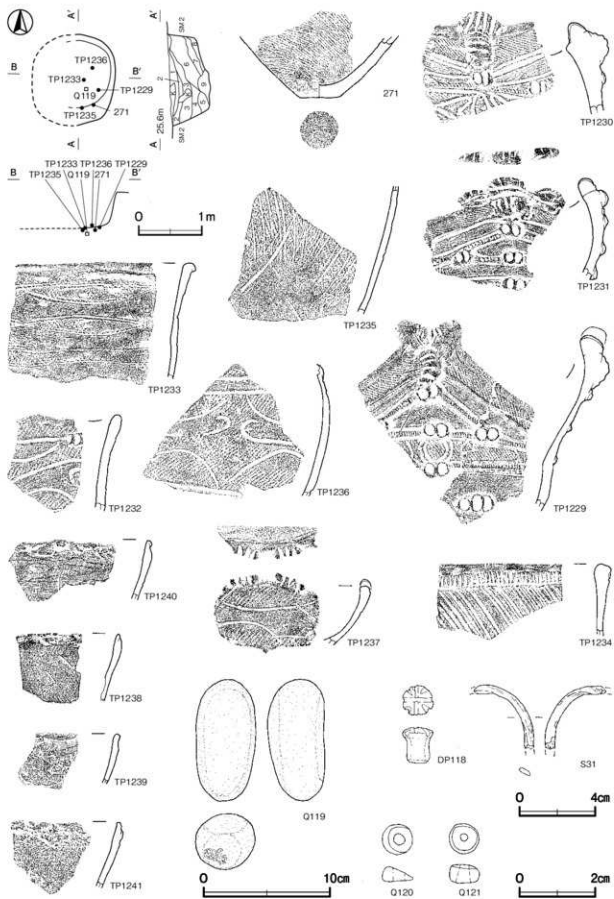
規模と形状 西半部が欠いているが、長径1.45m、短径1.30mの楕円形と推定される。深さは69cmで、底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 9層に分層できる。第5・9層は混貝土層である。ロームブロックや炭化物を多く含んだ不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。混貝土層を主体として覆土全体から10,973点の貝が出土しており、うちヤマトシジミが10,754点（17,720g）で全体の約98%を占めている。これらの貝は、第2号貝層を掘り込んで構築していることに起因していると考えられる。

土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック多量 6 黒褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土ブロック・貝微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 7 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子・貝微量 8 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・貝微量 9 混貝土層 黒褐色土主体、混貝率20%（ヤマトシジミ主体・炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量）
 5 混貝土層 黒褐色土主体、混貝率30%（ヤマトシジミ主体・炭化物少量、ローム粒子微量）

遺物出土状況 縄文土器片 488 点、土製品 2 点（耳飾り、耳栓）、石器 1 点（磨石）、石製品 2 点（小玉）、貝製品 1 点（貝輪）のほか、獣骨片が出土している。縄文土器片のうち 100 点が製塩土器である。遺物の多くが覆土下層から底面にかけて集中する傾向が認められる。271、TP1229・TP1233・TP1235・TP1236、Q119 は、いずれも底面から出土している。



第48图 第280号土坑·出土物实测图

所見 第2号貝層を掘り込んでいることや後期中葉～後葉の他の土坑と規模や形状の点で異質であること、翡翠製の小玉が出土していることなどから、墓坑の可能性がある。時期は、第2号貝層を掘り込んでいることや出土土器から後期後葉から晩期前葉と考えられる。

第280号土坑出土遺物観察表(第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
271	縄文土器	深鉢	-	(49)	3.0	長石・石英	黒褐色	普通	RLの単節縄文 内面ナデ 底部削り後磨き	底面	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1229	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	沈澱文→削み→貼帶→RLの単節縄文	底面	PL18
TP1230	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	沈澱文→貼帶→削み・RLの単節縄文→無文部磨き 内面ナデ	覆土下層	
TP1231	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐色	沈澱文→貼帶→削み・RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土下層	
TP1232	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	沈澱文→貼帶→LRの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	覆土下層	
TP1233	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	沈澱文→RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	底面	
TP1234	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐色	条線文→沈澱文→削み 内面磨き	覆土中	
TP1235	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	RLの単節縄文→条線文 内面ナデ	底面	
TP1236	縄文土器	鉢	長石・石英	灰褐色	LRの単節縄文→沈澱文→無文部磨き 内面磨き	底面	
TP1237	縄文土器	浅鉢	長石・石英	褐色	貼帶→沈澱文→LRの単節縄文→無文部ナデ 内面磨き	覆土中	
TP1238	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	口唇部削り後ナデ 外面削り 内面ナデ	覆土下層	製塩土器
TP1239	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	口唇部削り後ナデ 外面削り 内面ナデ 外面被熱により急激化	覆土下層	製塩土器
TP1240	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	口唇部削り後ナデ 外面削り 内面ナデ	覆土中	製塩土器
TP1241	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	口唇部ナデ 外面削り 内面ナデ	覆土中	製塩土器

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP118	耳栓	径1.6	-	1.8	4.11	灰褐色 長石・石英	底部沈澱による加飾 側面ナデ	覆土下層	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q119	磨石	9.8	4.7	4.5	285.0	安山岩	全面研磨 一端部に瘤状の敲打痕	底面	
Q120	小玉	径0.8	孔径0.3	0.4	0.30	翡翠	一方からの穿孔 研磨整形 一切断面未整形	覆土下層	PL24
Q121	小玉	径0.8	孔径0.4	0.5	0.46	翡翠	一方からの穿孔 研磨整形	覆土下層	PL24

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
S31	貝輪	(3.5)	(3.3)	(0.4)	(1.25)	ベンケイガイ	丁寧な研磨整形	覆土下層	

第284号土坑(第49図)

位置 調査B区のF3d8区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号貝層下に存在している。第244・287号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西部の一部を第244・287号土坑に掘り込まれているが、現存している長径は0.40m、短径0.30mほどの楕円形と推定され、長径方向はN-7°-Wである。深さは95cmで、底面は皿状である。壁はほぼ直立している。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況から埋め戻されている。

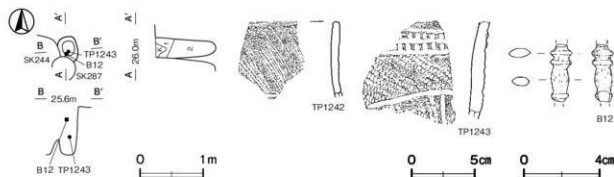
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物少量

2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片 24 点、骨角歯牙製品 1 点（髪飾り）のほか獣骨片が出土している。土器はいずれも細片で、覆土中に散在した状態で出土している。TP1243 は覆土中層、B12 は覆土上層から出土している。

所見 ビット状の深い土坑で、規模や形状、覆土の状況などから柱穴の可能性がある。時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。

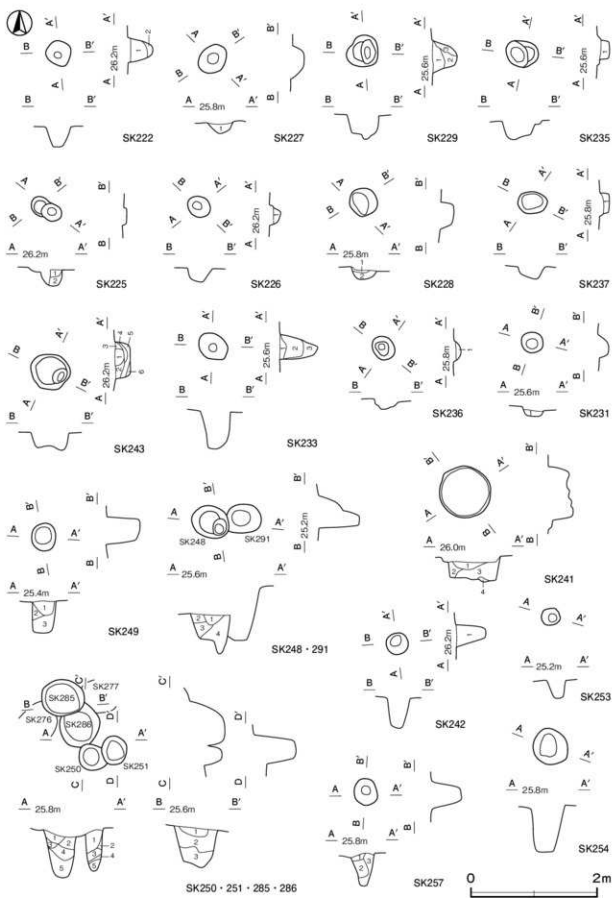


第 49 図 第 284 号土坑・出土遺物実測図

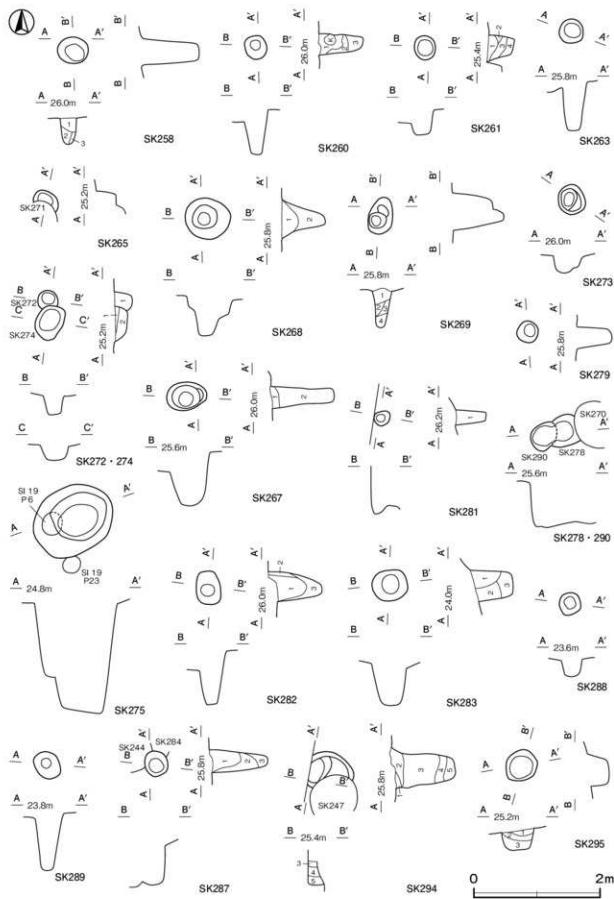
第 284 号土坑出土遺物観察表（第 49 図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1242	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	地縄文→条線文 □器部内面沈線文 内面磨き	覆土中	
TP1243	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	RLの半筋縄文→沈線文→刷み 内面ナデ	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
B12	髪飾り	(30)	1.2	0.5	(1.92)	シカ中手骨カ	頭部3本の溝状の快り入り 針部欠損 丁寧な研磨整形	覆土上層	PL25



第50图 土坑实测图(1)



第51图 土坑实测图(2)

第 222 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第 225 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 226 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 227 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量

第 228 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量、黒色粒子微量

第 229 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子中量、黒色粒子微量

第 231 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第 233 号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、黒色粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量、黒色粒子微量

第 235 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 236 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量

第 237 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・貝微量

第 241 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック多量（締まりあり）
- 4 褐色 ロームブロック多量

第 242 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 243 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック、焼土ブロック・貝微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量
- 3 濃い黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・貝微量
- 6 濃い黄褐色 ロームブロック中量

第 248 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・貝微量
- 2 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック少量、焼土粒子・貝微量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

第 249 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第 251 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、破砕貝微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・破砕貝微量
- 4 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 257 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、貝微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、黒色粒子微量

第 258 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物・貝微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第 260 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、黒色粒子微量

第 261 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・貝微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・貝微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子・貝微量

第 267 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・貝微量

第 268 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・貝微量

第 269 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子・貝微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・貝微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・灰少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・灰微量

第 272 号土坑土層解説

- 1 灰黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 274 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量

第 281 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量

第 282 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

第 283 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、炭化物・焼土粒子・貝微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・貝微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・貝微量

第 285 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 286 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・貝殻量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・貝殻量
- 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック多量

第 287 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

第 294 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子・破砕貝殻量
- 2 混貝土層 黒褐色土主体、混貝率 30% (ヤマトシジミ主体・破砕率低い)、ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・破砕貝殻量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子・破砕貝殻量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第 295 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

表 7 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形状	概 概		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
221	F 3 b7	-	[円形]	0.55	57	平坦	直立	人為	縄文土器、魚骨	本跡→SK240
222	F 3 b8	N-23°-W	楕円形	0.43×0.38	40	皿状	外傾	人為	縄文土器	
223	F 3 a8	N-36°-W	楕円形	0.52×0.46	124	平坦	外傾	人為	縄文土器	SK239→本跡
224	F 3 b8	-	円形	0.60	71	傾斜	外傾	人為	獣骨	
225	F 3 a8	N-52°-W	楕円形	0.52×0.26	30	段状	外傾	人為	縄文土器	
226	F 3 a8	N-68°-W	楕円形	0.38×0.33	22	傾斜	傾斜	不明	縄文土器、湖片	
227	E 4 j2	N-51°-E	楕円形	0.50×0.38	19	皿状	傾斜	人為	縄文土器	
228	E 4 j2	-	円形	0.44	22	平坦	外傾	人為	-	
229	E 4 j4	-	不整形	0.50	37	段状	外傾	人為	縄文土器	
231	F 4 a5	-	円形	0.34	16	皿状	外傾・傾斜	不明	縄文土器	
233	F 4 b3	N-46°-W	楕円形	0.50×0.40	58	皿状	外傾	人為	縄文土器	
235	F 4 d7	N-86°-W	楕円形	0.53×0.40	29	段状	外傾	人為	縄文土器	
236	F 3 c0	N-52°-W	楕円形	0.40×0.33	15	皿状	傾斜	不明	縄文土器	
237	F 3 a0	N-82°-E	楕円形	0.46×0.35	21	傾斜	傾斜	不明	縄文土器	
238	F 4 d1	N-64°-W	楕円形	0.41×0.34	22	皿状	外傾	不明	縄文土器、土偶	
239	F 4 a8	N-46°-W	[楕円形]	(0.42)×0.37	36	皿状	外傾	人為	-	本跡→SK223
240	F 3 b7	-	円形	0.35	31	皿状	外傾	不明	縄文土器	SK221→本跡
241	F 3 b9	-	円形	0.82	34	凹凸	外傾	自然	縄文土器	
242	F 3 i8	-	円形	0.34	48	皿状	外傾	人為	-	SI16
243	F 3 b8	N-71°-W	楕円形	0.64×0.56	25	平坦	外傾	人為	縄文土器	
244	F 3 d7	N-57°-W	[楕円形]	(0.70)×0.63	55	平坦	外傾	人為	縄文土器	SK284→本跡 →SK287、SM12
245	F 3 d7	N-4°-E	楕円形	0.65×0.51	91	平坦	外傾・直立	人為	縄文土器	本跡→SM12
246	F 3 d7	-	円形	0.40	71	平坦	直立	人為	縄文土器、獣骨	本跡→SM12
247	F 3 c7	N-43°-E	楕円形	0.84×0.72	98	平坦	直立	人為	縄文土器、骨角製刺突具、貝輪、湖片、獣骨	SK264・294→本跡 →SM2
248	F 3 d7	N-63°-W	楕円形	0.62×0.50	(64)	段状	外傾・直立	人為	縄文土器	SK291→本跡 →SM2
249	F 3 c7	N-5°-E	楕円形	0.44×0.37	53	傾斜	直立	人為	-	SM2
250	F 3 c7	N-81°-W	[楕円形]	(0.45)×0.38	70	平坦	外傾	人為	-	SK286→本跡 →SK251、SM12

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
251	F 3c7	N-5°-W	楕円形	0.45×0.38	66	平坦	外傾	人為	縄文土器、銅片	SK250→本跡 →SM2
252	F 3d7	-	円形	0.35	91	平坦	直立	人為	縄文土器	本跡→SM2
253	F 3d7	-	円形	0.28	28	皿状	外傾	不明	-	SM2
254	F 3b7	N-20°-W	楕円形	0.58×0.52	75	平坦	外傾・直立	人為	縄文土器	SM2
255	F 3c7	N-21°-W	[楕円形]	(0.73)×0.50	105	平坦	外傾・直立	人為	縄文土器、土偶	SK256→本跡 →SM2
256	F 3c7	N-46°-W	[楕円形]	(0.65)×0.48	66	平坦	外傾	人為	縄文土器	本跡→ SK255、SM2
257	F 3c7	N-18°-W	楕円形	0.43×0.32	50	平坦	外傾	人為	縄文土器	本跡→SM2
258	F 3c7	N-67°-W	楕円形	0.45×0.38	92	平坦	外傾・直立	人為	縄文土器、銅片	SI17A・B→本跡 →SM2
259	F 3d8	N-50°-W	楕円形	0.62×0.55	52	傾斜	外傾	人為	縄文土器	本跡→ SI17A・B、SM2
260	F 3b7	N-13°-W	楕円形	0.37×0.31	70	平坦	外傾	人為	縄文土器	SM2
261	F 3c7	N-3°-W	楕円形	0.37×0.31	40	傾斜	外傾	人為	縄文土器	SM2
262	F 3b7	-	円形	0.85	62	平坦	外傾	人為	縄文土器、獣骨	本跡→SM2
263	F 3b7	-	円形	0.38	76	平坦	外傾・直立	人為	縄文土器	
264	F 3c7	N-76°-W	[楕円形]	(0.70)×0.62	33	皿状	外傾	人為	縄文土器	SK271→本跡 →SK247、SM2
265	F 3c7	N-39°-W	[楕円形]	0.42×(0.28)	33	平坦	外傾	不明	縄文土器	本跡→ SK271、SM2
266	F 3d8	N-37°-W	楕円形	0.57×0.50	58	平坦	外傾	人為	縄文土器、土器片四枚、 獣骨	本跡→SM2
267	F 3c7	N-78°-E	楕円形	0.63×0.44	82	皿状	外傾	人為	縄文土器	本跡→SM2
268	F 3c7	N-86°-E	楕円形	0.74×0.64	67	皿状	外傾	人為	縄文土器	SM2
269	F 3e8	N-16°-E	楕円形	0.60×0.38	78	段状	外傾	人為	縄文土器	本跡→ SI17A・B、SM2
270	F 3e8	N-33°-W	楕円形	0.80×0.64	85	平坦	直立・内傾	人為	縄文土器、獣骨	SI17A・B、SK278 →本跡→SM2
271	F 3c7	N-6°-W	[楕円形]	(0.59)×0.51	46	平坦	外傾	人為	縄文土器、獣骨	SK265→本跡 →SK294、SM2
272	F 3c7	-	[円形]	0.32	26	平坦	外傾	人為	-	本跡→ SK274、SM2
273	F 3b9	N-54°-W	楕円形	0.46×0.34	27	段状	外傾・傾斜	不明	縄文土器	
274	F 3c7	N-35°-E	楕円形	0.56×0.42	30	平坦	外傾	人為	-	SK272→本跡、SM2
275	F 3e7	N-62°-E	楕円形	1.32×1.04	171	傾斜	外傾	人為	縄文土器	本跡→SI19A・B・C
276	F 3c7	N-43°-E	[楕円形]	(0.85)×0.54	60	平坦	外傾	人為	縄文土器、銅片、獣骨	本跡→ SK285、SM2
277	F 3c7	N-52°-W	[楕円形]	0.62×(0.50)	67	皿状	外傾	人為	縄文土器、貝輪、獣骨	本跡→ SK285、286、SM2
278	F 3e8	N-70°-E	[楕円形]	(0.58)×0.48	67	平坦	外傾	人為	縄文土器	本跡→ SK270、290、SM2
279	F 3c7	N-24°-E	楕円形	0.35×0.30	54	皿状	外傾・直立	人為	-	SM2
280	F 3e8	-	[楕円形]	[1.45×1.30]	69	平坦・凹状	外傾	人為	縄文土器、耳飾り、耳栓、 磨石、小玉、貝輪、獣骨	SI19C、SM2→本跡
281	F 3b7	N-50°-E	[楕円形]	0.29×0.22	47	平坦	外傾	人為	-	
282	F 3b7	N-4°-W	楕円形	0.52×0.37	82	平坦	外傾・直立	人為	縄文土器	
283	F 4j5	N-83°-E	楕円形	0.56×0.48	64	平坦	外傾	人為	縄文土器	本跡→SM1
284	F 3d8	N-7°-W	[楕円形]	(0.40×0.30)	95	皿状	直立	人為	縄文土器、骨角製刃突、 獣骨	本跡→ SK244、287、SM2
285	F 3c7	N-87°-W	楕円形	0.68×0.58	68	傾斜	外傾	人為	縄文土器	SK276、277、280 →本跡→SM2
286	F 3c7	N-43°-E	[楕円形]	(0.68)×0.60	75	平坦	外傾	人為	-	SK277→本跡→ SK250、285、SM2
287	F 3d7	-	円形	0.39	61	皿状	直立	人為	縄文土器	SK244、284→本跡 →SM2
288	F 4j5	-	円形	0.35	26	皿状	外傾	不明	-	本跡→SM1
289	F 4j5	N-34°-W	楕円形	0.45×0.37	86	皿状	外傾	人為	縄文土器	本跡→SM1
290	F 3d8	N-70°-E	[楕円形]	(0.43)×0.40	70	平坦	直立	人為	縄文土器	SK278→本跡、SM2
291	F 3d8	N-83°-E	[楕円形]	(0.54)×0.45	82	平坦	外傾	人為	-	本跡 →SK248、SM2
294	F 3e7	N-56°-W	[楕円形]	(0.70)×0.32)	99	平坦	外傾	人為	-	本跡 →SK247、SM2
295	F 3c7	N-50°-E	楕円形	0.52×0.47	32	平坦	外傾	人為	縄文土器	SM2

(3) ビット群

調査B区北東部及び南部から黒褐色を基調とする覆土をもった、ビットのまとまりを確認した。配列から建物跡などを復元できないため、ビット群として報告する。なお、第3号ビット群は、第364集で報告した調査D区北西部に位置しているビット群と面的に連続しており、規模や形状及び出土遺物などから同一遺構ととらえた。

第3号ビット群 (第52～54図)

位置 調査B区のE 4 h5～F 4 a5区、標高25mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南北12m、東西8mほどの範囲から、ビット59か所を確認した。各ビットの平面形は、長径21～65cm、短径17～50cmの円形または楕円形で、深さは14～80cmである。

覆土 黒褐色を基調としてローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含んだ土層であり、単一層であるビットが多いことから埋め戻されている。

土層解説

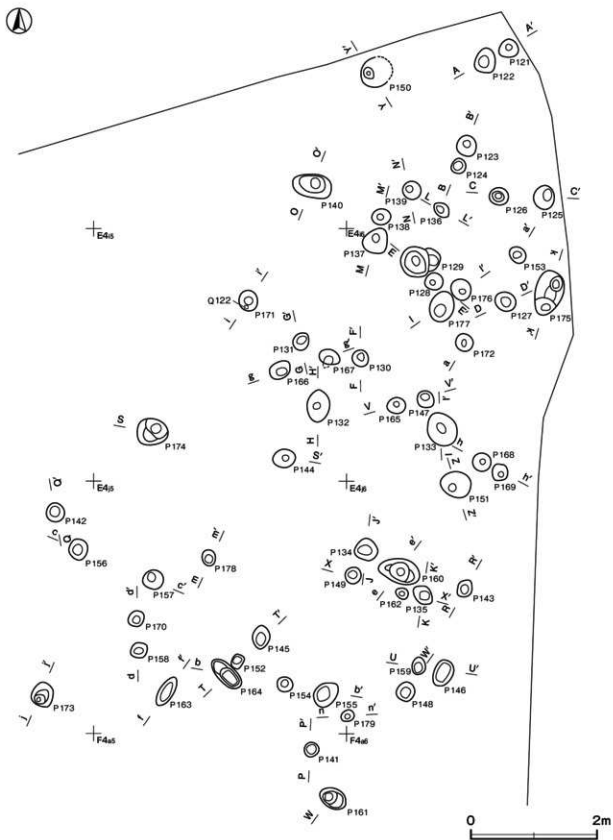
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片356点、石器2点(石皿、敲石)、石製品1点(石剣)、剥片3点(チャート)、焼礫1点が出土している。土器の大部分が細片で、出土状況に特筆すべき特徴はみられない。TP1244はP 133、TP1245はP 147、TP1246はP 150、TP1247はP 156、Q123はP 169、Q124はP 121、Q125はP 129の覆土中からそれぞれ出土している。また、Q122はP 171の覆土中層からの出土である。

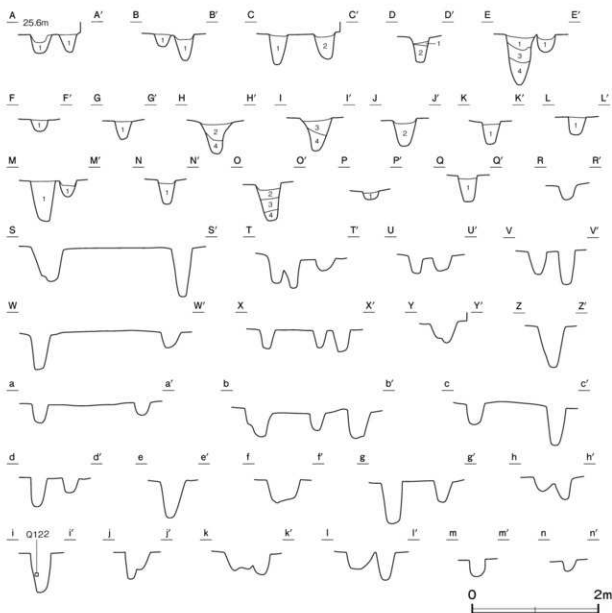
所見 規模と形状から柱穴の可能性が高いが、配置から建物跡を想定することはできない。時期は、出土土器から後期中葉から晩期前葉と考えられる。

表8 第3号ビット群ビット一覧表

ビット番号	位置	形状	規模 (cm)			ビット番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長軸 (径) × 短軸 (径)	深さ					長軸 (径) × 短軸 (径)	深さ	
121	E 4 b6	円形	30 × 30	28		139	E 4 b6	円形	28 × 28	38	
122	E 4 b6	楕円形	40 × 33	30		140	E 4 h5	楕円形	61 × 36	60	
123	E 4 b6	円形	33 × 33	41		141	F 4 a5	円形	24 × 22	14	
124	E 4 b6	楕円形	25 × 22	20		142	E 4 j4	円形	30 × 28	41	
125	E 4 b6	楕円形	38 × 32	42		143	E 4 j6	楕円形	29 × 25	25	
126	E 4 b6	楕円形	31 × 26	48		144	E 4 i5	楕円形	36 × 29	77	
127	E 4 i6	楕円形	34 × 30	40		145	E 4 j5	楕円形	38 × 28	20	
128	E 4 i6	円形	28 × 28	28		146	E 4 j6	楕円形	44 × 29	25	
129	E 4 i6	不整楕円形	65 × 50	80		147	E 4 i6	楕円形	30 × 24	54	
130	E 4 i6	円形	25 × 25	18		148	E 4 j6	楕円形	31 × 28	25	
131	E 4 i5	楕円形	29 × 26	28		149	E 4 j6	円形	27 × 25	30	
132	E 4 i5	楕円形	51 × 36	50		150	E 4 b6	[楕円形]	[52] × 45	33	
133	E 4 i6	楕円形	56 × 45	53		151	E 4 j6	楕円形	47 × 40	65	
134	E 4 j6	円形	38 × 35	45		152	E 4 j5	楕円形	22 × 18	48	
135	E 4 j6	楕円形	36 × 26	35		153	E 4 i6	楕円形	29 × 24	20	
136	E 4 b6	楕円形	27 × 20	29		154	E 4 j5	円形	26 × 24	26	
137	E 4 i6	楕円形	43 × 38	63		155	E 4 j5	楕円形	43 × 32	45	
138	E 4 b6	楕円形	29 × 24	25		156	E 4 j4	楕円形	32 × 28	33	

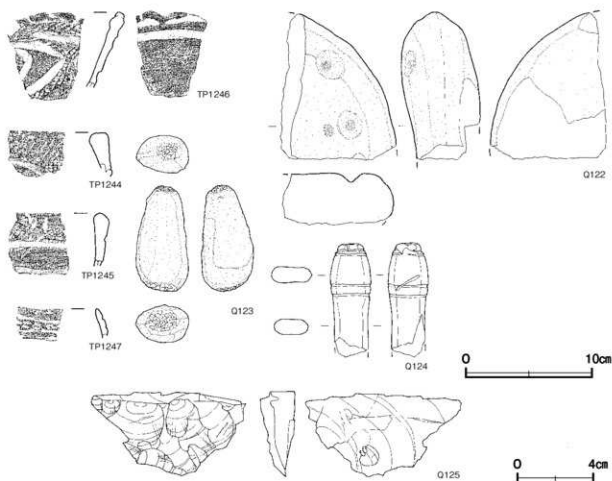


第52図 第3号ピット群実測図(1)



第53図 第3号ビット群実測図(2)

ビット 番号	位置	形状	規 模 (cm)			ビット 番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸 (径) × 短軸 (径)	深さ	長軸 (径) × 短軸 (径)				深さ		
157	E 4j5	円形	32 × 30	63	169	E 4i6	円形	27 × 26	32		
158	E 4j5	楕円形	28 × 25	45	170	E 4j5	楕円形	28 × 24	22		
159	E 4j6	楕円形	28 × 21	28	171	E 4i5	楕円形	34 × 29	63		
160	E 4j6	楕円形	65 × 40	60	172	E 4i6	円形	26 × 26	30		
161	F 4a5	楕円形	45 × 32	55	173	E 4j4	楕円形	40 × 35	42		
162	E 4j6	楕円形	30 × 18	27	174	E 4i5	楕円形	50 × 42	54		
163	E 4j5	楕円形	51 × 21	36	175	E 4i6	楕円形	72 × 43	37		
164	E 4j5	楕円形	59 × 28	43	176	E 4i6	楕円形	34 × 30	44		
165	E 4j6	楕円形	28 × 25	35	177	E 4i6	楕円形	50 × 38	27		
166	E 4i5	楕円形	34 × 25	68	178	E 4j5	楕円形	36 × 21	27		
167	E 4i5	楕円形	34 × 24	33	179	E 4j6	楕円形	21 × 17	17		
168	E 4i6	円形	29 × 28	23							



第54図 第3号ピット群出土遺物実測図

第3号ピット群出土遺物観察表(第54図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1244	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	RLの単筋縄文 内面ナデ	P133 覆土中	
TP1245	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	横位の平行沈線文→LRの単筋縄文→平行沈線文内面ナデ	P147 覆土中	
TP1246	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒	口唇部粘土貼付・幅広の沈線文→LRの単筋縄文 口唇部内面沈線文 内面ナデ	P150 覆土中	
TP1247	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	口縁部横位の平行沈線文→平行沈線文間縦列の連続刺突文 内面ナデ	P156 覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q122	石皿	(118)	(92)	(63)	(6647)	安山岩	両面は皿状に凹む 表面に断面V字状の孔2か所・ 底面状の凹み1か所	P171 覆土中層	
Q123	磁石	84	4.2	3.0	131.3	安山岩	両端部に底面状の縦打痕	P169 覆土中	
Q124	石剣	(90)	3.2	(1.3)	(740)	粘板岩	頭部に2本一組の沈線 磨製整形	P121 覆土中	P123
Q125	銅片	22	4.1	1.0	6.2	チャート	横長銅片	P129 覆土中	

第5号ピット群 (第55図)

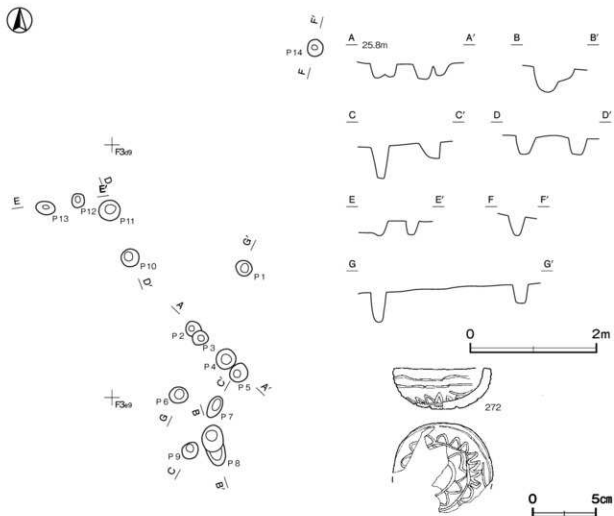
位置 調査B区のF 3c9～F 3e9区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 南北7m、東西5mほどの範囲から、ピット14か所を確認した。各ピットの平面形は、長径22～68cm、短径20～32cmの円形または楕円形で、深さは20～54cmである。

覆土 黒褐色を基調としてローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を微量含んだ土層である。覆土中には、ヤマトシジミを主体とする破砕貝が含まれている。貝の総数は1,375点で、うちヤマトシジミが92.4% (1,271点) を占めている。次いでハマグリ63点、シオフキ17点、オキシジミ13点と続き、第2号貝層の貝組成と一致している。これは同貝層に近接していることに起因すると考えられる。

遺物出土状況 縄文土器片43点が出土している。図示した272を除いたすべての土器は細片である。272はP 8の覆土中から出土しており、第2号貝層KD 2区北東部上層から出土した土器片と接合したものである。

所見 規模と形状から柱穴の可能性が高いが、配置から建物跡を想定することはできない。現況では第2号貝層とは面的な連続性は認められないが、本来は同貝層に内包されていた可能性が高い。時期は、出土土器及び第2号貝層上層の土器と当跡の土器との接合関係から、後期後葉から晩期前葉と考えられる。



第55図 第5号ピット群・出土遺物実測図

表9 第5号ビット群ビット一覧表

ビット番号	位置	形状	規 模 (cm)			ビット番号	位置	形状	規 模 (cm)		
			長軸 (径) × 短軸 (径)	深さ					長軸 (径) × 短軸 (径)	深さ	
1	F 3d9	楕円形	28 × 24	32	8	F 3e9	不整楕円形	68 × 32	40		
2	F 3d9	[円形]	23 × (19)	24	9	F 3e9	楕円形	30 × 23	54		
3	F 3d9	円形	23 × 23	20	10	F 3d9	円形	28 × 28	27		
4	F 3d9	円形	32 × 32	23	11	F 3d8	円形	33 × 32	29		
5	F 3d9	円形	30 × 28	20	12	F 3d8	円形	22 × 21	22		
6	F 3d9	楕円形	30 × 24	48	13	F 3d8	楕円形	30 × 22	24		
7	F 3e9	楕円形	36 × 20	27	14	F 3e9	楕円形	28 × 25	30		

第5号ビット群出土遺物観察表 (第55図)

番号	種 別	器 機	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備 考
272	縄文土器	ニナエフ 土器	(74)	3.3	-	灰白・石灰・ 赤色粒子	褐	普通	横位の沈線文→縦向位の沈線文 内面ナデ	P 8 覆土中	60% PL16

表10 縄文時代ビット群一覧表

番号	位置	柱 穴					主な出土遺物	時期	備 考
		柱穴数	平面形	長径	短径	深さ			
3	E 4b5～F 4a5	59	円形・楕円形	21～65	17～50	14～80	縄文土器、石器・石製品 割片、燧石	後期後葉～ 晩期出葉	平成21年度調査区120小所
5	F 3c9～F 3e9	14	円形・楕円形	22～68	20～32	20～54	縄文土器	後期後葉～ 晩期出葉	

(4) 斜面貝層

第1号貝層 (第56～59図)

位置 調査E区のF 4i4区～F 4a5区、東西に延びる細長い亜支谷に面した北斜面部に位置している。標高は23～24mである。

確認状況 表土除去前の段階で貝の散布が認められたため精査したところ、粗密の差はあるものの南北6m、東西5mほどの範囲で貝の散布が認められた。貝層の西側は、第6号トレンチ(平成19年度調査)を境に平成21年度調査区(調査B区)と接しているが、現況では調査B区南部で調査し第1号貝層との面的な連続性は見られなかった。しかし、第6号トレンチでは貝層の一部を確認しており、また、平成21年度調査区(B区)に分布している第1号貝層と同様に、台地が緩やかに傾斜する傾斜交換点付近にあたることから、連続していたものと考えられる。

重複関係 本貝層下に第283・288・289号土坑が存在している。第289号土坑は、上層が混貝土層となっており、本貝層の形成と大きな時期差はないと考えられる。

調査の方法 遺構確認後、貝層の堆積状況や層厚及び範囲を把握するために十字状にトレンチ調査を実施した。その結果、遺存状況は良好でなく、貝層上層の大部分が削平されていることが分かった。そこで、トレンチを利用し、4つの小調査区ごとに掘り下げを行った。大形の土器片、土製品、石器・石製品、骨角歯牙製品については座標と高さを計測し、それ以外については層を3分し、上・中・下層の人工層位ごとに取り上げた。貝は全て取り上げ水洗選別し、貝種ごとに点数を記録した。なお、カウントした貝は殻頂部が残存しているものに限った。

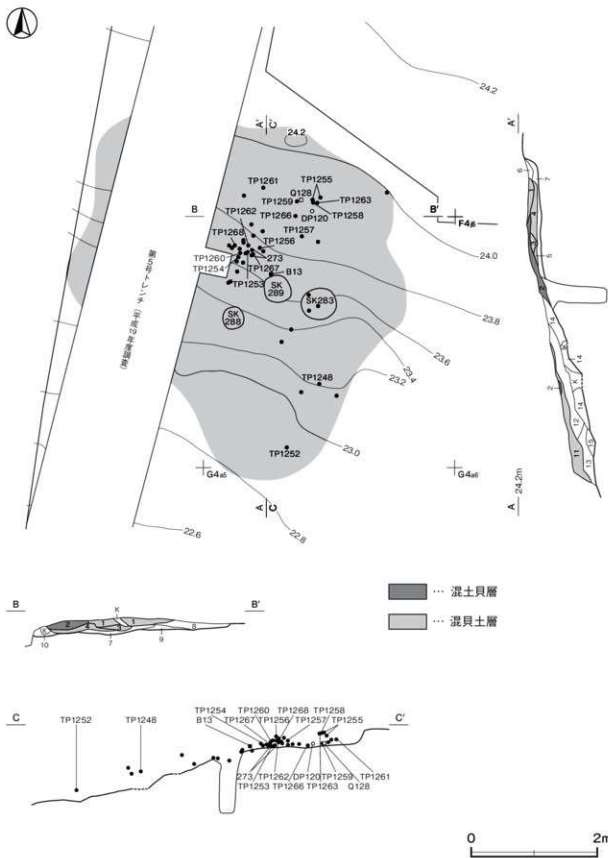
貝層の広がりと**堆積状況** 調査区南部のE区に位置している斜面貝層である。地形は、ほぼ南方向に傾斜している標高22.8m～24.0mの斜面部である。貝層の範囲は、南北5.8m、東西5.3mほどの不定形である。傾斜角は3～12度で、北側ほど傾斜角が小さい。堆積している層は、最上層にある混土貝層は層厚8～23cmで、その下層に混貝率が低い混貝土層が最大で20cmほど堆積している。また、北部ほど混貝率が高く、層厚も厚い傾向がある。これは、現確認範囲の周縁部ほど遺存状態が悪いことにも起因していると思われる。第2層は、黒褐色土を含んだ混貝率70%の混土貝層で、平成21年度調査の「混土貝層1」に対応する。上層には、混貝土層である第1・3・4・5・11層以外の層にも微量の破砕貝が含まれている。一方、下層にあたる第7～9層及び第12～15層は、黄褐色を基調とした砂粒を多く含んだ土層で、谷地形に由来する流入土である。出土した貝の総数は30,165点で、貝種組成は表11のとおりである。第1優占種はヤマトシジミで、26,287点(32,040g)が出土しており、全体の87.14%を占めている。次いで第2優占種のハマグリが2,242点(7.43%)である。これは、平成21年度調査の第1号貝層の貝種組成とほぼ一致している。また、今年度調査した第2号貝層の貝種組成と比較すると、ややヤマトシジミの割合が低い。これは、遺存状況が悪いことや貝層の一部の調査であること、あるいは時期差に起因するとも考えられる。また、淡水産二枚貝類とした貝は十分な同定ができなかったが、イシガイ類・マツカサガイ類と比定でき、淡水産の二枚貝が一定量含まれていることも第2号貝層と共通する。出土層位をみると、混貝土層を含まない下層からも一定量出土しているが、破砕率は高い。

土層・貝層解説

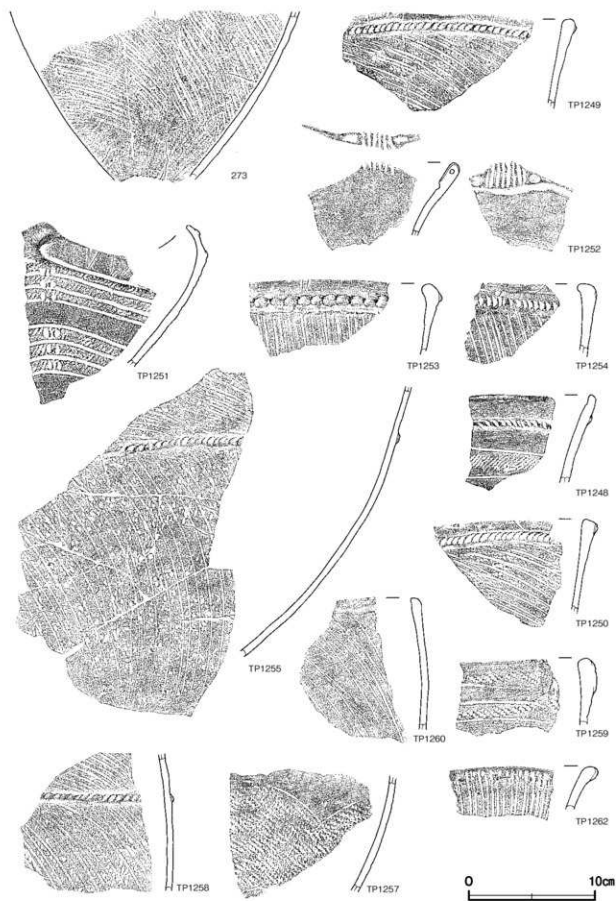
- | | | | |
|--------|--|---------|---|
| 1 混貝土層 | 灰黄褐色土主体、混貝率10%以下(ヤマトシジミ主体、破砕率中程度)、炭化物・焼土粒子微量 | 6 灰黄褐色 | 砂粒中量、焼土粒子微量 |
| 2 混土貝層 | 黒褐色土少量、混貝率70%(ヤマトシジミ主体、破砕率低い)、炭化物・焼土粒子微量 | 7 灰黄褐色 | 砂粒中量、焼土ブロック・炭化物・破砕貝微量 |
| 3 混貝土層 | 黒褐色土主体、混貝率10%以下(ヤマトシジミ主体、破砕率高い)、炭化粒子・灰微量 | 8 灰黄褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・破砕貝微量 |
| 4 混貝土層 | 黒褐色土主体、混貝率20%(ヤマトシジミ主体・軟骨片を含む、破砕率低い)、炭化粒子微量 | 9 灰黄褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 混貝土層 | 黒褐色土主体、混貝率10%(ヤマトシジミ主体、破砕率高い)、灰中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 | 10 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | | 11 混貝土層 | 黒褐色土主体、混貝率10%(ヤマトシジミ主体、破砕率高い)、砂粒少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| | | 12 黒褐色 | 砂粒少量、焼土ブロック・炭化物・破砕貝微量 |
| | | 13 灰黄褐色 | 砂粒中量、黒色粒子少量 |
| | | 14 黒褐色 | 砂粒・黒色粒子少量 |
| | | 15 暗褐色 | 砂粒少量 |

表11 第1号貝層貝種組成表

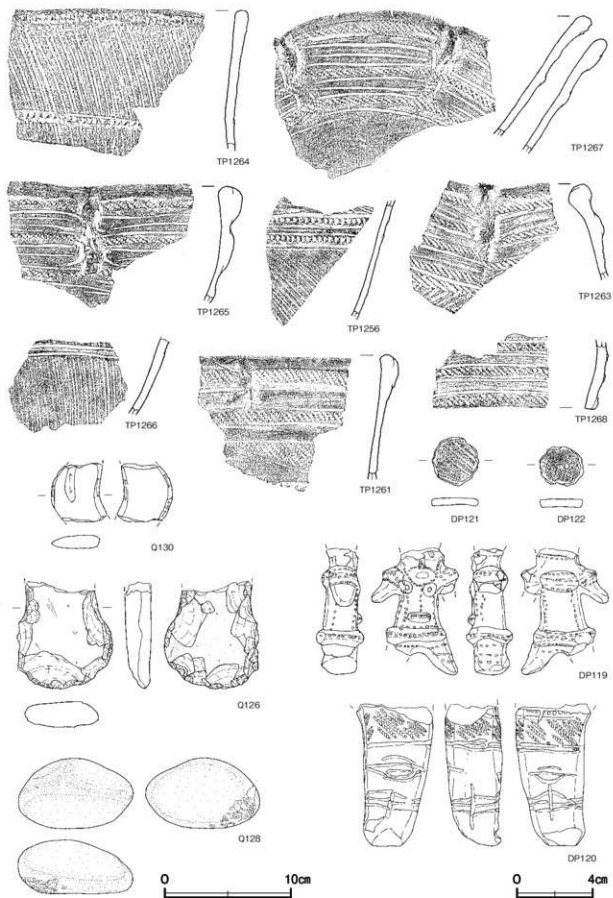
貝種	点数(点)	割合(%)	層位別点数(点)			備考
			上層	中層	下層	
ヤマトシジミ	26,287	87.14	9,092	7,748	2,433	重量:32,040g
ハマグリ	2,242	7.43	731	601	209	701
シオフキ	905	3.00	311	227	163	204
オキシジミ	28	0.09	11	13	3	1
サルボウ	26	0.09	8	9	0	9
シラトリガイ	16	0.05	3	7	2	4
アコシ	9	0.03	3	1	1	4
ムラサキガイ	13	0.04	5	7	1	0
フノガイ類	9	0.03	1	3	0	5
アサリ	3	0.01	0	1	0	2
バイガイ	1	0.00	1	0	0	0
イタヤガイ	1	0.00	1	0	0	0
小形巻貝類	330	1.09	108	84	36	102
淡水産二枚貝類	289	0.96	81	82	19	107
不明	6	0.02	6	2	1	1
計	30,165		10,362	8,785	2,868	8,154



第 56 図 第 1 号貝層実測図



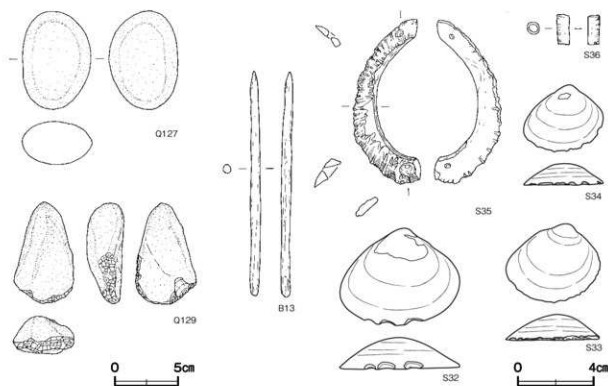
第57图 第1号貝層出土遺物実測図(1)



第58图 第1号貝層出土遺物実測図(2)

遺物出土状況 縄文土器片 2,191点 (30,211.6g)、土製品 4点 (土偶2、土器片円盤2)、石器 12点 (打製石斧1、石皿1、磨石7、敲石2、砥石1)、剥片2点 (チャート、黒曜石)、骨角歯製品1点 (刺突具)、貝製品 5点 (貝刃3、貝輪1、装身具1)のほかイノシシを中心とした獣骨が出土している。出土位置は、確認範囲のほぼ中央部に位置する標高23.4～24.0mに集中し、出土層位は、第3～5層の混貝土層が中心である。全ての土器が破片の状態で出土しており、接合関係はほとんど認められないことから、貝とともに土器の廃棄行為があったと想定できる。土器片は加曾利B式から安行2式までが含まれているが、主体となる土器は後期後葉の安行1式土器である。層位ごとの時期については、層厚が薄いこともあり明確にすることはできなかった。B13は中央部、DP120は北部のいずれも混土貝層中から出土している。

所見 平成19年度調査区 (B区南部) で確認した第1号貝層からは、多寡の差はあるが後期前葉から晩期前葉までの土器が出土しており、後期前葉から晩期前葉までに継続的に地点を変えながら土器を廃棄していると想定されている。本貝層の北端部には若干の段差があり、斜面を削平した痕跡が一部で認められたが、柱穴や顕著な硬化面、炉跡が確認できなかったことから住居跡にすることを逡巡した。本貝層の貝や遺物の分布状況を見ると、中央部に集中しており、住居跡などの窪地に貝を捨てた地点貝塚から発達した貝層の可能性もある。層ごとの時期は明確にできないが、貝層上位から出土した土器から、後期後葉の安行1式期には本貝層が形成されたと考えられ、B区に存在する第2号貝層より古い。



第59図 第1号貝層出土遺物実測図 (3)

第1号貝層出土遺物観察表(第57～59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
273	縄文土器	深鉢	-	(134)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	条線文→胴部下端磨き 内面磨き	3区 遺目土層下層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1248	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	絳線文・沈線文→沈線文間LRの単筋縄文→無文部磨き 口唇部内面沈線 内面磨き	2区 遺目土層下層	
TP1249	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	地縄文→条線文→絳線文 内面ナデ	1区 遺目土層下層	
TP1250	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	地縄文→条線文→絳線文 内面磨き	1区 遺目土層下層	
TP1251	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒	口縁部隆帯文→LRの単筋縄文→沈線文・区切り文→無文部磨き 内面磨き	3区 遺目土層下層	PL18
TP1252	縄文土器	浅鉢	長石・石英	明赤褐	外面磨き 内面沈線文・円形刺突文→ナデ	2区 遺目土層下層	
TP1253	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒	絳線文・条線文→横位の沈線文 内面磨き	3区 遺目土層下層	
TP1254	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	条線文・口唇部削み 内面磨き	3区 遺目土層下層	
TP1255	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	地縄文→条線文 内面磨き	1区確認層	
TP1256	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒	条線文→沈線文→削み 内面磨き	3区 遺目土層中	
TP1257	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒	RLの単筋縄文→沈線文→無文部磨き 内面磨き	2区 遺目土層下層	
TP1258	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒	地縄文→条線文→絳線文 内面磨き	1区確認層	
TP1259	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	胎磨→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	1区 遺目土層下層	
TP1260	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	条線文 内面磨き	3区 遺目土層中	
TP1261	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	3区 遺目土層下層	PL18
TP1262	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒	条線文 内面磨き	1区確認層	
TP1263	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	矢羽根状沈線文・胎磨→横位の沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	1区確認層	PL18
TP1264	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	地縄文→条線文→沈線文→削み 内面磨き	トレンチ中	
TP1265	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	胎磨→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	トレンチ中	PL18
TP1266	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	条線文→沈線文 内面ナデ	1区 遺目土層下層	
TP1267	縄文土器	浅鉢	長石・石英	黒	胎磨→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き	3区 遺目土層下層	PL18
TP1268	縄文土器	台付鉢	長石・石英	黒	RLの単筋縄文→沈線文→無文部磨き 内面磨き	3区 遺目土層中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP119	土偶	(68)	(47)	(26)	(45.2)	暗赤褐 長石・石英・雲母	山形土偶の胴部～脚部 刺突文で加飾 全面赤彩	4区 トレンチ中	PL22
DP120	土偶	(75)	(40)	(30)	(90.8)	灰褐 長石・石英・赤色粒子	ミズク土偶の脚部 沈線文・刺突文で加飾	1区 遺目土層下層	PL22
DP121	土器片割	3.9	3.7	0.6	10.21	灰褐 長石・石英・雲母	安行式板製深鉢利用 周縁部粗削り	3区 遺目土層中	
DP122	土器片割	3.2	3.5	0.7	10.15	にぶい赤褐 長石・石英	周縁粗削り後、一部研磨整形	1区 遺目土層中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q126	打製石斧	(85)	(75)	(21)	(176.0)	凝灰岩	分銅形 扁平な腰を妻材とし、両面調整	3区土層	
Q127	磨石	7.8	5.5	3.4	207.4	安山岩	全面研磨	3区 遺目土層中	
Q128	磨石	5.5	9.1	4.3	286.8	安山岩	一端部に磨痕状の磨打痕	1区 遺目土層下層	
Q129	磨石	8.1	4.8	3.0	131.1	旗レイ岩	一端部に磨痕状の磨打痕	トレンチ中	
Q130	砥石	(4.7)	(4.4)	(1.1)	(29.8)	砂岩	両側縁砥面 一端縁は研磨により刃状 両端部欠損	2区 遺目土層中	PL23

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
B13	刺突具	11.9	0.6	0.5	3.69	シカ中足(手)骨	丁寧な研磨整形	2区 遺目土層上層	PL24

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
S32	貝牙	5.2	6.4	1.7	20.43	ナカケンハマグリ	腹縁に連続する潤滑痕 右殻	1区 遺目土層中	PL25
S33	貝牙	4.2	5.0	1.4	8.62	ハマグリ	腹縁に連続する潤滑痕 右殻	4区	PL25
S34	貝牙	3.5	4.2	1.2	4.65	ハマグリ	腹縁に連続する潤滑痕 右殻	トレンチ中	PL25
S35	貝輪	8.8	3.7	1.4	15.99	オオツツノハ	両端部各1孔、一方側からの穿孔 切断面及び腹縁研磨整形	1区 遺目土層中	PL26
S36	貫眼器具	1.5	0.6	0.6	0.55	ツノガイ類	切断面研磨整形	1区 遺目土層中	PL25

第2号貝層（第60～87図）

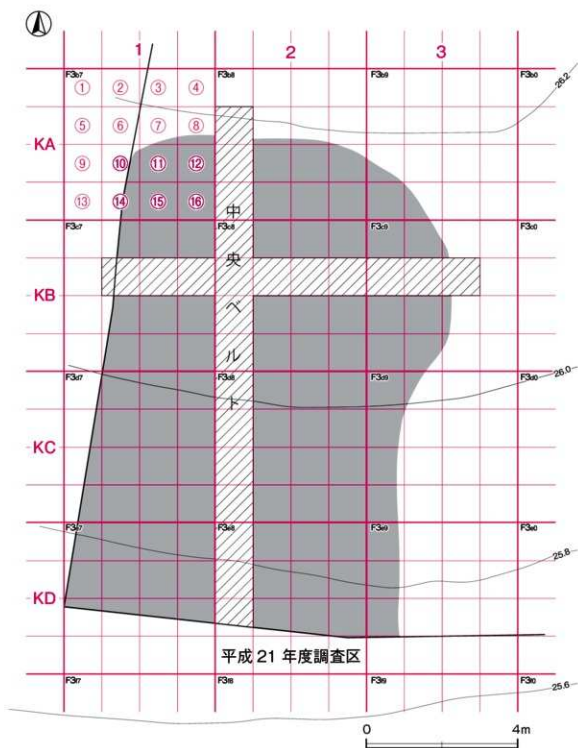
位置 調査B区のF3b7～F3c9区、標高25.6～26.2mの南方向に緩傾斜している台地斜面部に位置している。

確認状況 平成19年度調査の第1号トレンチで貝層の一部を確認している。また、南部の平成21年度調査区境では、層厚45cmほどの貝層が確認できた。表土除去を実施したところ、南北約13m、東西約9mの範囲で、貝の散布が認められた。表面観察では、貝の分布は標高が下がる南部ほど密になる傾向があり、また第1号トレンチで確認した第17A・17B号住居跡の想定範囲（F3c8区）にも貝が集中する状況が認められた。また、貝層確認範囲の北部は、北北東から南南西の方向に入るトレンチャー耕作による攪乱により、貝層と地山の境界は不明瞭な部分もあった。

重複関係 第280号土坑に掘り込まれている。第17A・17B・19A・19B・19C号住居跡及び第244～248・250～252・255～259・262・264～267・269～271・276・277・284～287・291・294号土坑の上位に存在している。第249・253・254・260・261・268・272・274・278・279・290・295号土坑及び第5号ピット群P10～P13と重複しているが、新旧関係は明確でない。

調査の方法 本貝層は、ほぼ北から南に緩傾斜している斜面貝層であることから、遺跡全体を網羅した広域グリッドをそのまま利用して、F3b7区を北西隅の起点として貝層の確認範囲を4mの基本グリッドで覆った。調査区の名称は遺物管理や調査の便宜上、基本グリッドはアルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1・2・3…とし、貝層のローマ字表記の頭文字である「K」を冠して「KA1区」のように呼称した。4m四方の基本グリッドをさらに1m四方の単位グリッドで16分割し、北西隅を起点に①～⑯区とした。掘り込み当たっては、貝層中央部を南北に通した「中央ベルト」とそれに直交するベルトを残し、1m四方の単位グリッド毎に人工層位の5cmずつ掘り下げていくこととした。単位グリッドを人工層位の1層分掘り上げた段階で、遺物出土状況を実測図及び写真に記録し、次の人工層位の掘り込みに移った。なお、土器細片や微細な獣骨類は単位グリッドの1層ごとにビニール袋に分けて取り上げた。貝は、単位グリッドの層毎に全て取り上げ、5mm、3mm、1mmメッシュの順であるいを使用した水洗選別を行った。取り上げた貝は、単位グリッドの層毎に貝種を同定し、それぞれの点数を記録した。なお、第1号貝層と同様に、カウントした貝は殻頂部が残存しているものに限った。

貝層の広がりと**堆積状況** 斜面の傾斜に沿って南北に長い帯状に堆積している斜面貝層である。平成21年度調査区を含めた貝層全体では、本調査区はその北部にあたる。地形は、南方向に傾斜している標高25.4～25.8mの緩斜面である。今年度調査区の貝層確認範囲は、南北約13m、東西は西側調査区外まで広がっているため確認できた範囲は9mほどで、貝層確認面での傾斜角は約4度である。50層に分層でき、層厚は5～48cmで、堆積状況は一律でなく、北部の第17A・17B号住居跡の上面と南部の第19A・19B・19C号住居跡の上面に厚く堆積している。単位グリッドごとの貝の出土点数を見ると、KB2区とKC1・2区南部及びKD1・2区北部に特に多数の貝が出土している区域が認められ、後述する遺物の出土状況とも一致している。第19A・19B・19C号住居跡の上面は特に厚い貝層が確認でき、南部の調査区境では層厚48cmであった。本貝層の南部における貝層の傾斜角は8～10度である。南部の貝層は遺存状況が良好である。東西に横断するベルトが貝層の中心からずれてしまったため、貝の廃棄単位は把握できなかったが、幅1mの「中央ベルト」の東面（A-A'）と西面（B-B'）の間の堆積状況に相違があることから、一定の廃棄単位があったことがうかがえる。B-B'ラインは、おおむね混土貝層・灰主体の層・混貝土層・ローム土主体の層が互層状に堆積しており、貝の廃棄や灰の廃棄、さらには整地が繰り返し行われていたと推察される。北部の貝層は、



第 60 図 第 2 号具層調査区設定図

層厚が薄く、トレンチャー耕作による攪乱の影響が大きいことから、堆積状況を明確にすることは困難である。また、南部の貝層下位にあたる第34～36層は、層厚7～43cmのローム土主体で遺物をほとんど含まない土層が貝層と同様の傾斜で堆積しており、第19C号住居跡の廃絶後にいったん整地行為をしたうえで貝の廃棄を開始したと考えられる。

本貝層から出土した貝の総数は、455,212点で、貝種組成は表12のとおりである。第1優占種はヤマトシジミで、430,949点(976,001g)が出土しており、全体の94.67%を占めている。次いで第2優占種のハマグリが16,911点(3.71%)、シオフキ3,077点(0.68%)と内湾性の二枚貝が出土している。前述した第1号貝層と比較すると、ヤマトシジミの割合がより高くなり、一方ハマグリも割合が低くなっている。これは、貝層の遺存状況や調査した層位が異なるため単純な比較はできないが、より海退が進んだ時期であることに起因する可能性もある。また、第1号貝層と同様に、マツカサガイ類やイシガイ類などの淡水産二枚貝も一定量出土していることも特徴のひとつである。なお、ベンケイガイが3点出土しているが、いわゆる「打ち上げ貝」の状態であることから、貝殻として採集され、貝輪製作のために持ち込まれたものであろう。

中央ベルト南端部にあたるKD1⑨区の最も貝層が厚い地点で、第一優占種であるヤマトシジミの貝長を分析することを主な目的として、縦20cm×横20cm、深さ55cmの柱状サンプルを採取した。採取した層は、第1・5・13・17・35層が相当し、うち第1・5・13・17層が混貝率50～90%の混土貝層である。貝種組成については表12、ヤマトシジミの殻長計測結果については表13のとおりである。なお、貝種組成では殻頂部が残存しているものをすべてカウントしているため、表12と表13の総数にはずれがある。ヤマトシジミの貝長については、全体の約82.2%が2.0～2.8cmの範囲内であり、4.0cmを超える貝はなく、概して中形の貝を採取していたことがうかがえる。2.2～2.4cmにピークが見られるが、典型的な正規分布は示していないことから、ヤマトシジミの採取にあたって、大きさを選別していた状況や季節性は認められない。当遺跡における貝採取行為の様相を考える一助になるとと思われる。一方、貝種組成については、サンプリングした総点数が少ないため貝種が限定されているが、表12で示した本貝層全体における貝種組成と際立った傾向の違いはなく、組成分析の結果をおおむね追認することができる。

土層・貝層解説

1 混土貝層	黒褐色微量。混貝率90%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・破砕貝微量
2 混貝土層	黒褐色土主体。混貝率10%(ヤマトシジミ主体・破砕率中程度)。ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	12 混土貝層	黒褐色土少量。混貝率70%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3 混貝土層	黒褐色土主体。混貝率30%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	13 混土貝層	黒褐色土微量。混貝率90%(ヤマトシジミ主体・混貝率低い)。炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
4 混貝土層	暗褐色土主体。混貝率10%以下(ヤマトシジミ主体・破砕率中程度)。ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	14 混貝土層	灰黄褐色の灰主体。混貝率40%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)炭化物少量。ロームブロック・焼土ブロック微量
5 混土貝層	黒褐色土主体。混貝率60%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。ロームブロック・炭化物微量	15 混貝土層	黒褐色土主体。混貝率30%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。炭化物少量。ロームブロック・焼土ブロック微量
6 混貝土層	黒褐色土主体。混貝率30%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	16 混貝土層	黒褐色土主体。混貝率20%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。炭化物少量。焼土粒子微量
7 混貝土層	黒褐色土主体。混貝率10%(ヤマトシジミ主体・破砕率中程度)。ローム粒子・炭化粒子微量	17 混土貝層	黒褐色土少量。混貝率50%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。炭化物少量。焼土粒子微量
8 混土貝層	黒褐色土微量。混貝率80%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。ロームブロック・炭化粒子微量	18 混土貝層	黒褐色土微量。混貝率90%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。ローム粒子・炭化粒子微量
9 暗褐色	ロームブロック中量。焼土粒子・炭化粒子・破砕貝微量	19 混貝土層	黒褐色土主体。混貝率30%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。ロームブロック・炭化粒子微量
10 混土貝層	黒褐色土微量。混貝率80%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	20 混土貝層	黒褐色土微量。混貝率80%(ヤマトシジミ主体・破砕率低い)。ロームブロック少量。炭化物・焼土粒子微量

21	黒 褐 色	ロームブロック・破砕貝殻量	36	褐 色	ロームブロック多量、破砕貝殻量
22	混貝土層	灰黄褐色の灰主体、混貝率20%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	37	混土土層	黒褐色土微量、混貝率90%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、ロームブロック・炭化粒子微量
23	混貝土層	黒褐色土主体、混貝率10%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、炭化物少量、ローム粒子・炭化物微量	38	混貝土層	黒褐色土主体、混貝率30%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、ロームブロック・炭化粒子微量
24	黒 褐 色	焼土ブロック・炭化物・灰・破砕貝殻量	39	混土土層	黒褐色土微量、混貝率80%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
25	にんじやう褐色	焼土ブロック・炭化物・灰少量、ローム粒子・破砕貝殻量	40	混土土層	黒褐色土微量、混貝率80%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
26	混貝土層	灰黄褐色の灰主体、混貝率10%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	41	混貝土層	黒褐色土主体、混貝率10%（ヤマトシジミ主体、破砕率中程度）、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
27	混貝土層	灰黄褐色の灰主体、混貝率10%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	42	混貝土層	黒褐色土主体、混貝率10%（ヤマトシジミ主体、破砕率高い）、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
28	混土土層	黒褐色土微量、混貝率60%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量	43	混貝土層	黒褐色土主体、混貝率10%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
29	混貝土層	灰黄褐色の灰主体、混貝率10%（ヤマトシジミ主体、破砕率中程度）、炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量	44	混土土層	黒褐色土微量、混貝率90%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、ロームブロック・焼土粒子微量
30	混土土層	黒褐色土微量、混貝率80%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量	45	混土土層	黒褐色土微量、混貝率70%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
31	混土土層	黒褐色土微量、混貝率70%（ヤマトシジミ主体、破砕率低い）、炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量	46	黒 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、破砕貝殻量
32	にんじやう褐色	ロームブロック多量、炭化物・焼土粒子・破砕貝殻量	47	暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・破砕貝殻量
33	暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化物・破砕貝殻量	48	黒 褐 色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・破砕貝殻量
34	黒 褐 色	ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック・炭化物	49	暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・破砕貝殻量
35	暗 褐 色	ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子・炭化物	50	暗 褐 色	ローム粒子中量、焼土ブロック・破砕貝殻量

表 12 第2号貝層貝種組成表

貝 種	点数(点)	割合(%)	基本グリッド毎内訳										備考	
			KA 1	KA 2	KA 3	KB 1	KB 2	KB 3	KC 1	KC 2	KD 1	KD 2		トレンジ
ヤマトシジミ	430,949	94.67	2,298	4,580	106	11,579	56,629	4,097	68,968	35,964	69,541	160,059	18,119	基準 978.00g
ハマグリ	16,911	3.71	70	266	2	318	3,675	132	1,584	4,518	1,633	4,430	283	
シオフキ	3,077	0.68	12	85	2	59	933	24	248	494	188	905	107	
オキシジミ	425	0.09	6	6	0	27	137	9	30	56	33	110	11	
ザルガウ	264	0.06	2	5	0	4	59	3	34	39	36	72	10	
アカニシ	162	0.04	2	1	0	1	40	2	3	14	51	43	5	
ムササネガイ	101	0.02	1	0	0	0	7	0	6	17	6	64	0	
シラトリガイ	76	0.02	1	6	0	2	54	1	2	6	1	2	1	
オオノガイ	27	0.01	0	0	0	1	6	0	1	0	0	19	0	
アサリ	24	0.01	0	0	0	0	6	1	1	4	1	10	1	
フノガイ類	13	0.00	0	0	0	1	5	1	0	0	1	5	0	
カガミガイ	10	0.00	1	0	0	0	5	0	0	2	1	1	0	
ツメタガイ	6	0.00	0	0	0	0	3	0	1	1	1	0	0	
ハイガイ	5	0.00	0	0	0	0	1	0	0	3	0	1	0	
バンケイガイ	3	0.00	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	
イタヤガイ	3	0.00	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	
小形巻貝類	2,014	0.44	9	35	0	15	256	13	209	306	125	1,012	24	
淡水産二枚貝類	1,035	0.23	13	17	0	40	405	5	84	146	60	254	11	
その他・不明	107	0.02	0	3	0	7	27	0	4	11	20	35	0	
合計	455,212	100.00	2,415	5,013	110	12,054	61,269	4,288	71,177	41,582	71,709	167,023	18,572	

表13 第2号貝層柱状サンプルにおけるヤマトシジミ殻長計測表

層番号	計 測 値 (cm)																																							
	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0									
第1層	1	0	3	6	3	4	5	5	24	23	93	63	67	111	92	88	34	37	33	17	25	14	8	7	3	2	2	1	2	0	0									
第5層	0	0	0	4	1	2	2	2	8	10	69	77	79	94	67	102	43	30	20	10	27	11	8	3	4	3	2	0	0	0										
第13層	0	0	0	0	1	4	1	13	14	23	98	80	165	179	100	136	52	53	35	30	32	19	16	9	6	7	1	3	0	0										
第17層	0	0	0	0	0	2	3	9	10	15	53	32	78	79	46	51	28	40	26	8	24	9	5	5	7	3	1	1	0	0										
第35層	1	0	1	0	1	0	0	0	2	3	1	2	2	1	2	3	0	0	3	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0										
計	2	0	4	10	6	12	11	29	58	74	314	254	391	464	307	360	157	150	117	67	108	53	37	25	20	15	6	5	2	0	0									

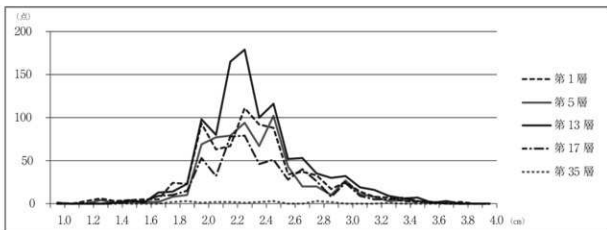


表14 第2号貝層柱状サンプルにおける貝種組成表

層番号	ヤマトシジミ		ハマダマリ		シオフキ		オキシジミ		小形巻貝類	淡水産二枚貝類
	点数	重量 (g)	左殻	右殻	左殻	右殻	左殻	右殻		
第1層	901	1,530.2	15	14	2	1	0	0	1	2
第5層	666	1,220.3	13	10	1	1	1	0	1	3
第13層	1,313	2,140.6	33	25	4	1	0	0	0	1
第17層	696	1,029.8	13	10	2	6	2	0	9	6
第35層	43	60.0	1	1	2	0	0	0	2	2
計	3,619	5,961.9	75	60	9	9	3	0	13	14

遺物出土状況 縄文土器片 29,937点 (451,644g)、土製品 51点 (耳飾り 24、耳栓 1、有孔装身具 1、土偶 10、土器片鎌 3、土器片円盤 9、不明土製品 3)、石器 83点 (石鎌 4、磨製石斧 1、打製石斧 2、石皿 7、磨石 51、敲石 6、凹石 1、石鎌 3、砥石 7、軽石製品 1)、石製品 9点 (小玉 4、勾玉 1、垂飾り 1、石剣 1、石棒 2)、石核 5点 (チャート)、剥片 43点 (チャート 23、黒曜石 9、瑪瑙 6、安山岩 3、頁岩 2)、骨角歯牙製品 24点 (牙鎌 8、釣り針 3、刺突具 6、弭形骨角製品 2、垂飾り 1、髪飾り 2、環状装身具 1、有孔装身具 1)、加工痕のある獣骨 6点、貝製品 30点 (貝刃 10、ヘラ状貝製品 4、貝輪 13、装身具 3)のほか、イノシシ・シカを主体とした獣骨類、スズキ・クロダイなどの魚骨が出土している。

土器のほとんどが破片の状態で、破片1点の平均重量は約 14gと細片が多く、完形もしくはそれに近い土器は、ミニチュア土器など小形の土器に限られている。土器同士の接合関係は少なく、主体となる土器片の周囲に点在している破片が接合する程度である。土器の多くは、混貝土層中から出土しており、混貝土層や再堆積層からの出土量はわずかである。また、1m四方の単位グリッド毎に比較した貝と土器の出土点数を見るとほぼ同様の傾向が認められることから、貝層の形成と土器の廃棄行為は並行して行われていたことがうかがえる。土器の平面分布は、大きく北部 (KB 1区～KB 2区) と南部 (KB 1区南部～KD 2区) の

2か所に出土集中地点が見られ、それぞれを北部ブロック、南部ブロックと呼称して解説する。

北部ブロックは、第17A・17B号住居跡や土坑が集中している区域にあたり、これらの施設を廃絶した後、窪地に貝とともに廃棄したものととらえることができる。一方、南部ブロックは、第19A・19B・19C号住居跡の推定西壁付近からその西側の遺構が確認されていない区域に、KD1③区を中心とした径3mほどの円形の廃棄ブロックを形成して、顕著な集中が認められる。

貝層全体からは、後期中葉の加曽利B式期から晩期前葉の安行3b式期の土器が出土しているが、北部ブロックと南部ブロックでは組成に相違がある。北部ブロックは、加曽利B式土器が一定量みられるが、主体となるのは曾谷式から安行1式土器であるのに対して、南部ブロックでは、加曽利B式土器はほとんど出土しておらず、後期後葉の安行2式から晩期前葉の安行3b式土器が多く出土している。それぞれの出土層位については、北部ブロックは層厚が薄いので時期差をとらえることはできなかったが、南部ブロックについては、おおむね上位ほど新しく、下位ほど古い時期の土器が出土している傾向が認められ、貝層の遺存状況は良好であると言える。また、南部ブロックは、出土数が多いこともあるが、器種組成が豊富なことも特徴のひとつである。325・335は後期後葉の安行2式期から晩期前葉にかけて関東地方に特徴的に見られる手觸形土器で、KD1⑦区及びKD2①区の混泥土層中層から出土している。また、完形もしくは準完形のミニチュア土器である326・327は、KD1①区及びKD1⑦区の混泥土層下層からそれぞれ出土している。319・320、TP1388・TP1393・TP1396・TP1420などの三叉文をモチーフとした晩期前葉の土器は、KD1・2区の主に貝層の最上層から出土しており、本貝層形成の下限の時期を示している。製塩土器とされる無文で外面がヘラ削りされた薄手土器が多量に出土していることも、本貝層の特徴のひとつである。製塩土器は、1,585点(19,615.3g)出土しているが、南部ブロックのKD1・2区だけで全体の74.3%(重量では71.3%)にあたる1,179点(13,985.0g)が集中して出土している。製塩土器のすべてが破片の状態で、接合関係もほとんどなかった。層位は貝層下位から出土しているものが多い。

土器以外の人工遺物は、土製品、石器・石製品、骨角歯牙製品、貝製品が出土しているが、出土数は多くはない。平面分布は土器と同様の傾向を示しており、各ブロック内でのまとまりも特にとらえることはできない。縄文時代の遺跡としては石器の出土数が少ないのが特徴的で、磨石はやや多く見られるもの、石皿・敲石・石鏃は数点しか出土しておらず、前年度までの調査で指摘されていたことと齟齬はない。反面、本調査区では、砥石が一定量出土していることが指摘できる。Q148は、貝輪製作の際の研磨工程で使用されたとされる「立体有溝砥石」で、南部ブロックKD1⑥区の混泥土層中から出土している。また、Q136の撥状の砥石は北部ブロックKB2⑤区から、Q161の砥石は南部ブロックKD2②区からそれぞれ出土しており、形状や使用痕からQ148と同様に貝輪製作に関わる砥石の可能性がある。

土製品は、耳飾りと土偶が優位を占めている。耳飾りは破片の状態のものがほとんどで、南部ブロックを中心に散在している。層位にもまとまりは認められない。南部ブロックから出土している耳飾りは、径に対して高さが低く、沈線主体の施文がされているものであるのに対して、北部ブロックから出土しているDP125・DP126は径に対して高さがある無文で小形の耳飾りで形態に差異が認められる。時期差を反映したものととらえておきたい。大形の耳飾りのDP133は、KC1②区の混泥土層上層から出土している。土偶は、DP135以外は破片の状態、平面位置は土器の出土傾向と同様に北部ブロックと南部ブロックに集中しているが、各ブロックとも斜面高所にあたる北周縁部から出土している傾向が看取できる。また、土偶は山形土偶とミミズク土偶が出土しており、出土位置に傾向が見られる。すなわち山形土偶であるDP129～DP131は北部ブロックから、ミミズク土偶のDP135・DP137・DP148は南部ブロックを中心に出土しており、土器

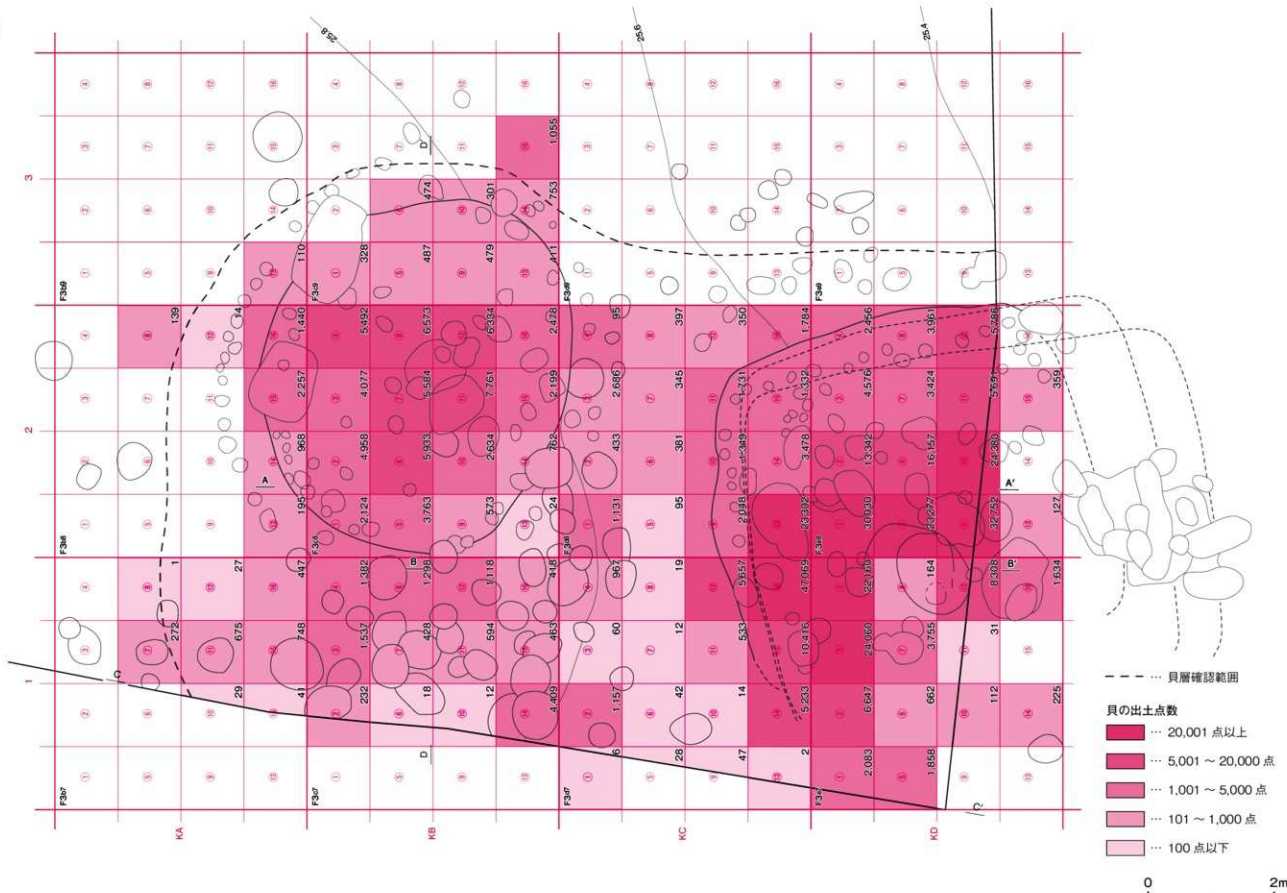
や耳飾りと同様に貝層の形成時期の差異を明確に反映している。DP135は、頸部の一部を欠いているがほぼ完形のミスク土偶で、KC 1⑤区の貝層確認面から10cmほど掘り下げた混貝土層中から横位で出土している。なお、当土偶の上位及び周辺には掘り込みは確認できず、埋納した状況は見られなかった。

骨角歯牙製品では、狩猟や漁労に関わる遺物が一定量出土しており、特にイノシシの犬歯を加工した牙鎌の出土が目立っており、未成品1点を含めた8点が出土している。いずれも貝の水洗選別中に抽出したもので、出土位置は北部ブロックKB 2区から4点、南部ブロックKC 1区から3点、KD 2区から1点である。釣り針は、未成品1点を含めて3点が出土している。いずれも北部ブロックKB 2区出土の貝の水洗選別中に抽出したもので、B19の完形の釣り針は、KB 2①区の混貝土層から出土している。牙鎌、釣り針ともに未成品が含まれていることから、当地で骨角歯牙製品の製作が行われていたと想定され、豊富な砥石が出土していることからこの想定が補完される。刺突具は、直線状のものと基部が茎状に括れるもの2種類があるが、出土位置にまともは認められず、貝層中に散在した状態で出土している。骨角製の装身具は、B39のタスキ犬歯製の垂飾りやB38の海獣類の指骨製の有孔装身具など点数は少ない。いずれも南部ブロックKD 2区の混貝土層中からの出土である。

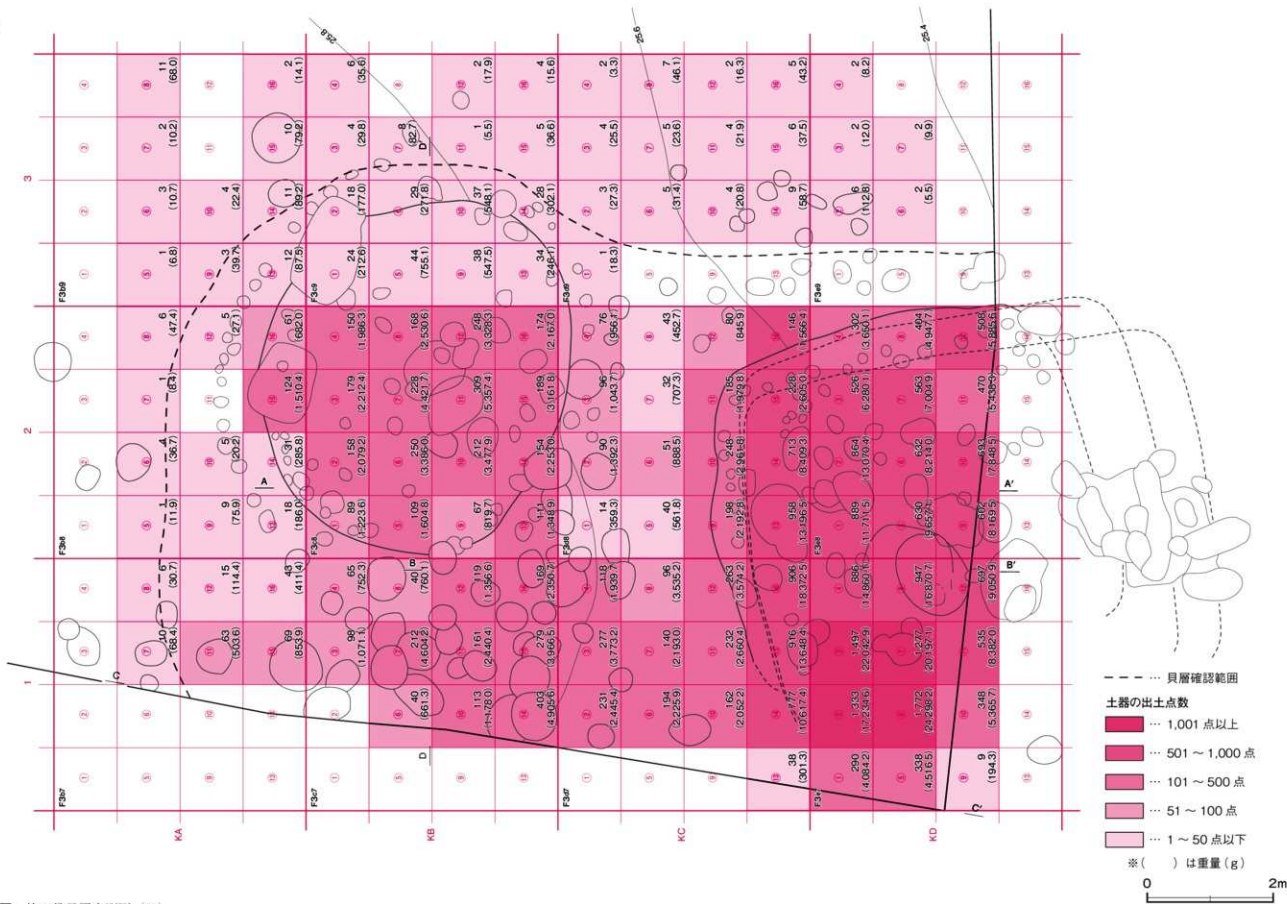
貝製品は、貝輪と貝刃が優位を占めている。13点出土している貝輪は、サルボウ属6点、ベンケイガイ5点のほか、サトウガイ・アカガイが各1点である。いずれも水洗選別時に抽出したもので、北部ブロックと南部ブロックに散在した状態で出土している。貝刃はすべてハマグリ製で、平均長さ5.0cmと概して小形であり、出土位置に特異な傾向は見られない。

動物遺体は、貝のほかに獣骨や魚骨が出土している。獣骨は貝層中から広く出土しており、貝と並行して廃棄されたものと考えられる。獣種はイノシシとシカが大多数で、特にイノシシの占める割合が非常に高いのが特徴である。人為的に破断されたことを示す鋭い破断面をもった「スパイラル剥片」と呼ばれる骨片が多く見られ、骨髄を食すためなどに打ち欠かれたものと考えられる。魚骨は、クロダイ・スズキが主体である。これら動物遺体の同定・分析の詳細については、付章1を参照されたい。

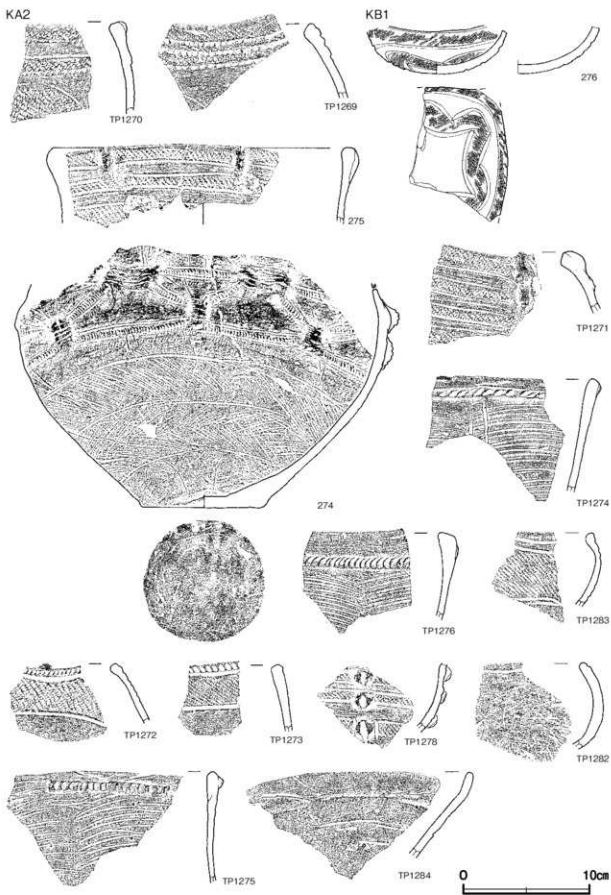
所見 本貝層は、西に入り込む亜支谷に面した南斜面に形成された斜面貝層である。貝の分布には粗密があり、大きく北部ブロックと南部ブロックの2か所にまとまりがある。北部ブロックの下位には第17A・17B号住居跡と土坑群が、南部ブロックの下位には第19A・19B・19C号住居跡が存在していることから、これらの施設廃絶後の窪地に継続的に貝を廃棄し、面的に連続したものになったと考えられる。人工遺物も貝の密度とほぼ連携しており、貝や獣骨・魚骨などの食料残渣の廃棄と並行して、土器をはじめとする生活用品などを投棄していたものと考えられる。南部ブロックは遺物の集中が顕著で、廃棄ブロックを形成している。土偶や石棒などの「第2の道具」やミニチュア土器・手燭形土器がある程度のまとまりをもって出土していることは、南部ブロックで何らかの儀礼的な行為が行われたことを示唆しているが、明確にはできない。各層ともに後期中葉から晩期前葉までの複数時期の土器の混入が見られ、層の時期を特定することは難しいが、北部ブロックが後期後葉の曾谷式から安行1式土器が主体であるのに対して、南部ブロックは後期後葉の安行2式を主体に晩期前葉の安行3b式土器までが見られることから、廃棄場所が北部の高所から南部の低所に移って行った状況が看取できる。また、南部ブロックの下位には、ローム土主体の人工遺物・自然遺物ともにほとんど含まれない層が堆積している。この層の上位から遺物の集中が始まっていることから、第19C号住居跡廃絶後、間もなく整地したうえで、遺物の廃棄が開始されたものと考えられ、貝層の形成過程を考察する好材料となる。時期は、出土土器及び下位に存在している遺構との関係から、後期後葉から晩期前葉と考えられる。



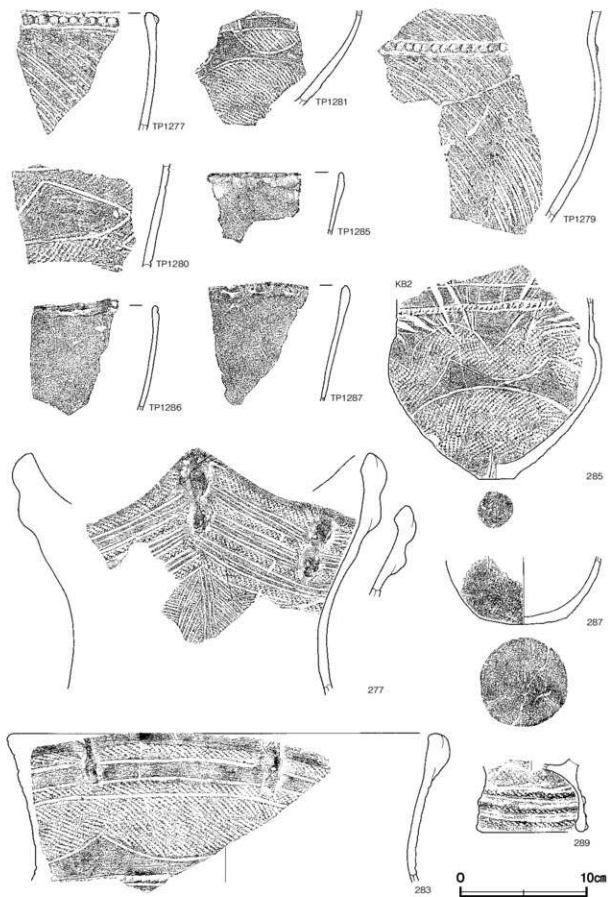
第 61 図 第 2 号貝層実測図 (1)



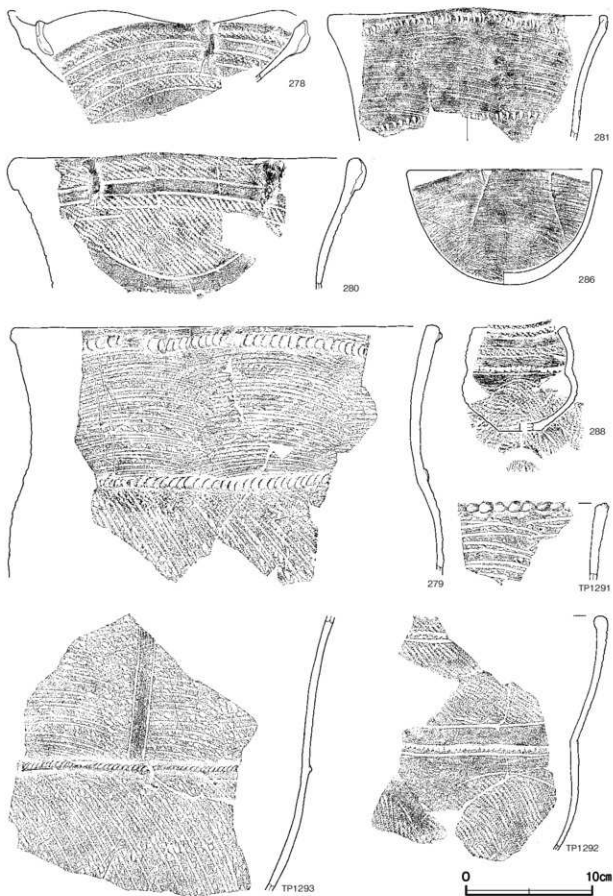
第 63 図 第 2 号具層実測図 (3)



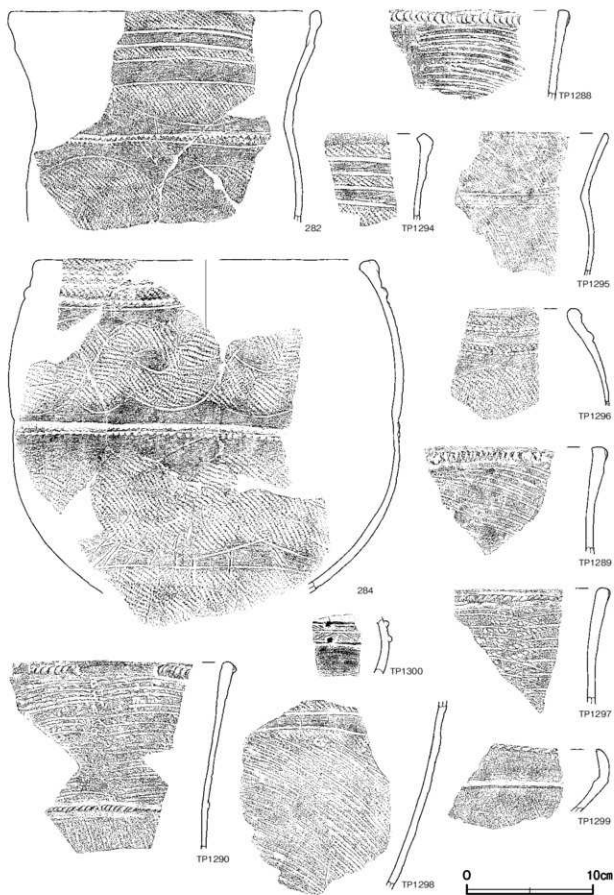
第65图 第2号貝層出土遺物実測図(1)



第66图 第2号貝層出土遺物実測図(2)



第67图 第2号貝層出土遺物実測図(3)



第68图 第2号貝層出土遺物実測図(4)

KB3



TP1301

KC1



292



291



293



294



TP1302



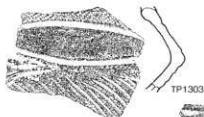
295



297



296



TP1303



TP1309



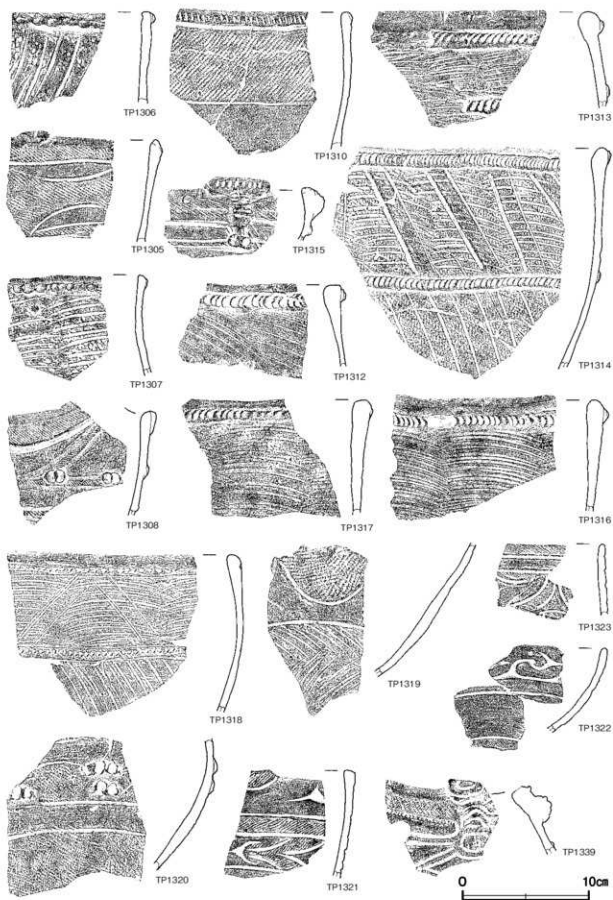
TP1304



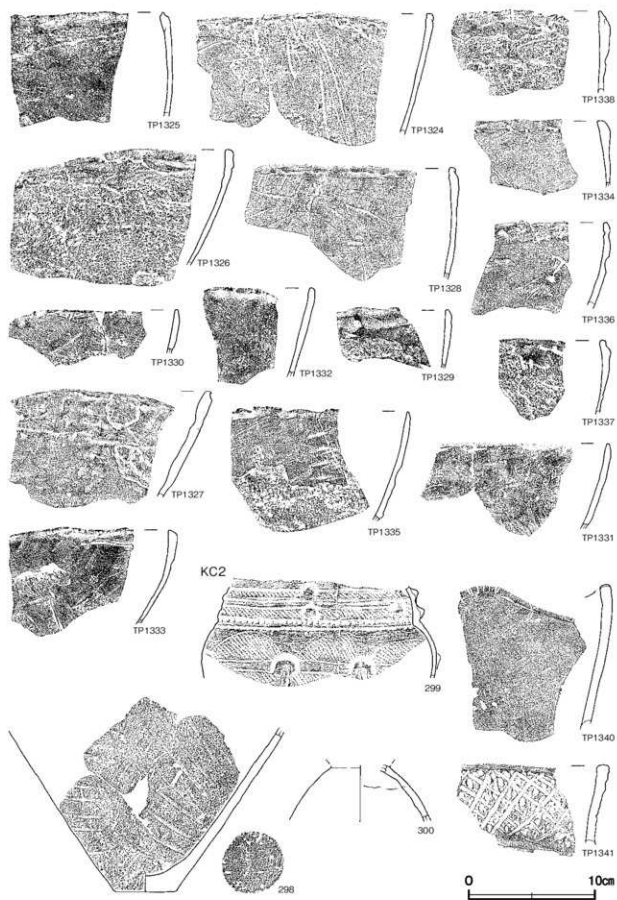
TP1311



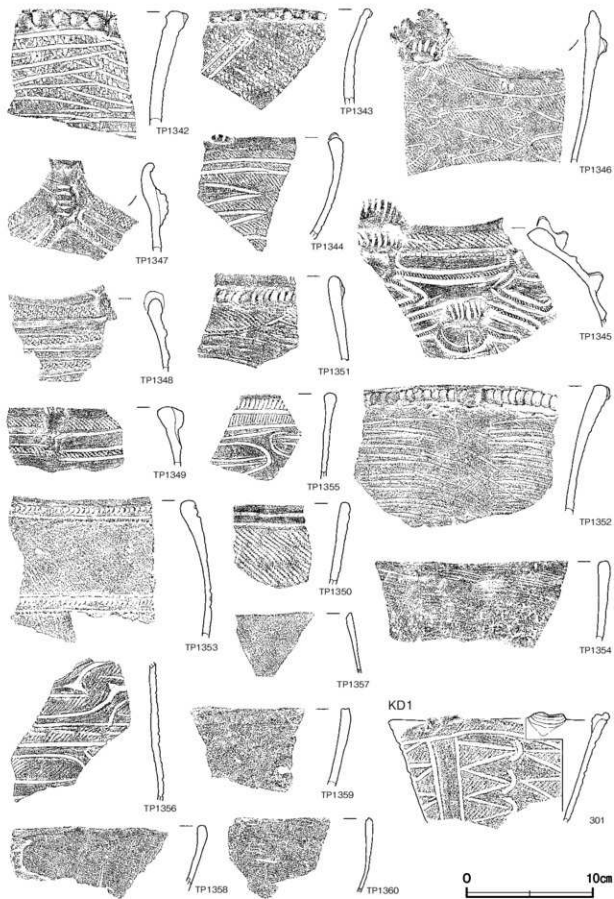
第69图 第2号貝層出土遺物実測図(5)



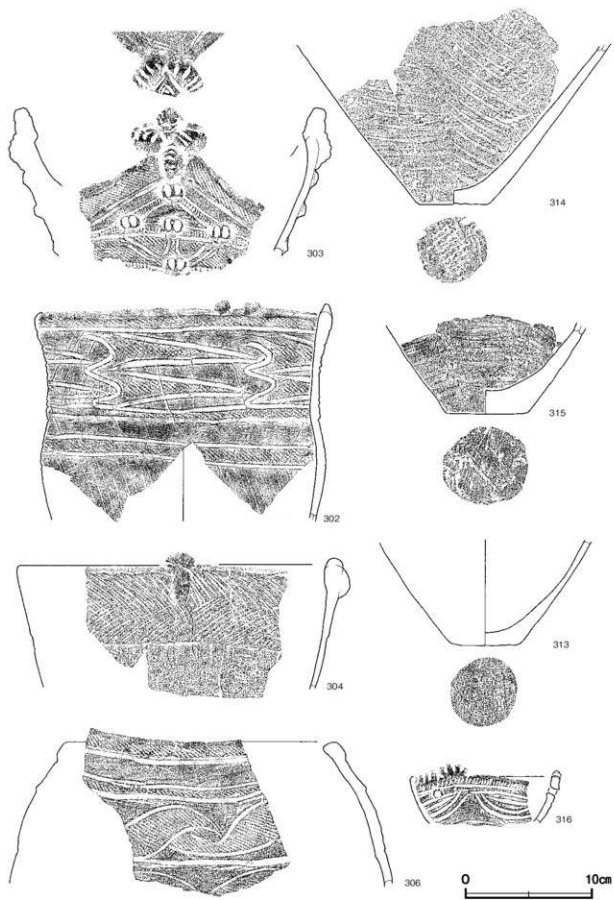
第70图 第2号层出土物实测图(6)



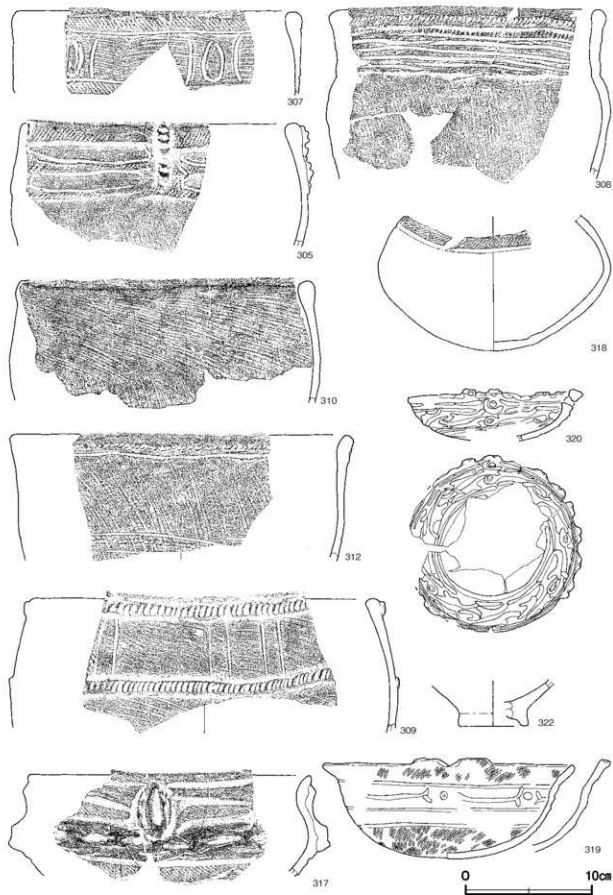
第71图 第2号貝層出土遺物実測図(7)



第72图 第2号层出土文物实测图(8)



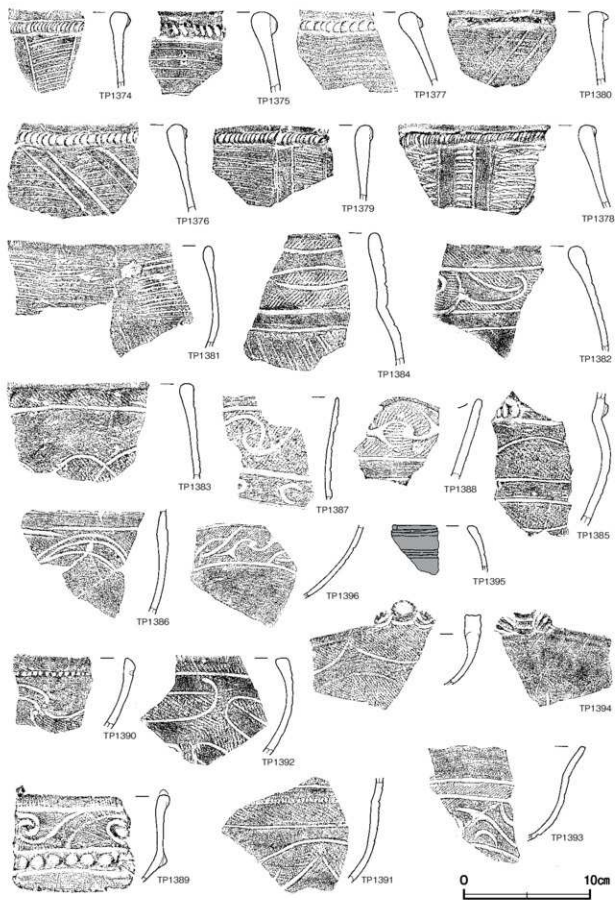
第73图 第2号层出土遗物实测图(9)



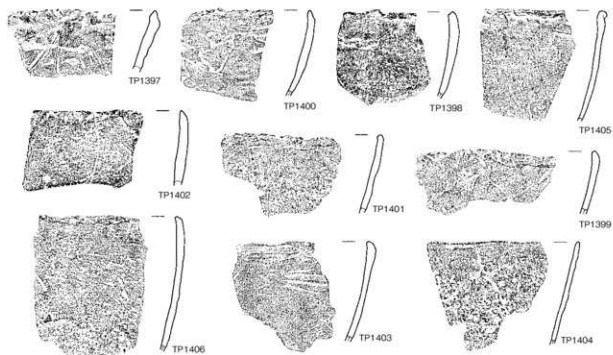
第74图 第2号貝層出土遺物实测图(10)



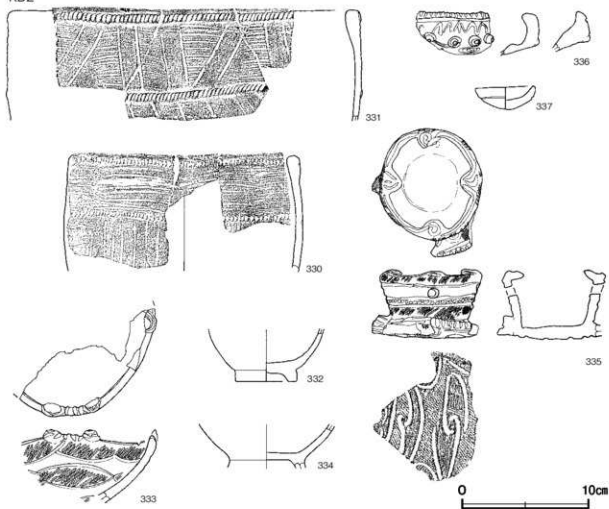
第75图 第2号貝層出土遺物実測図(11)



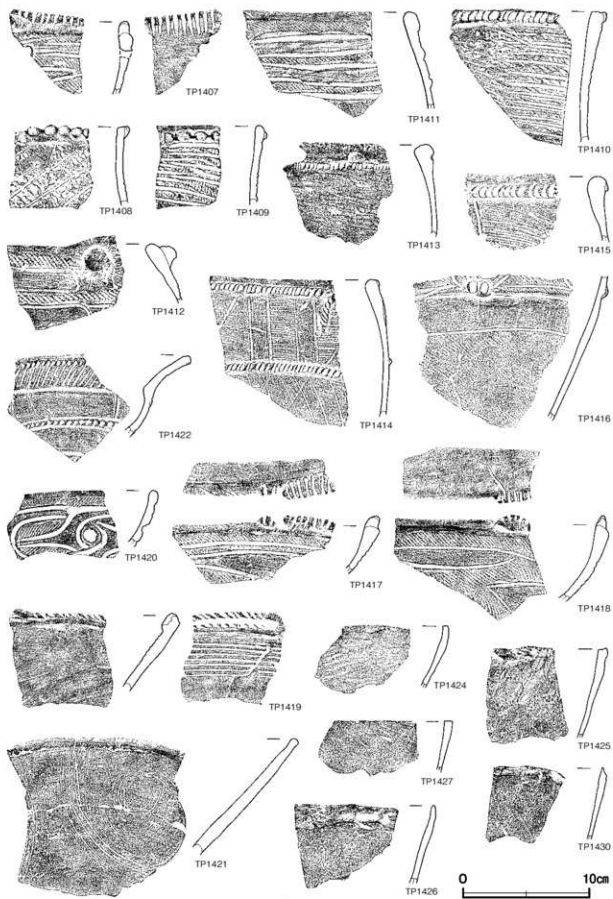
第76图 第2号层出土文物实测图(12)



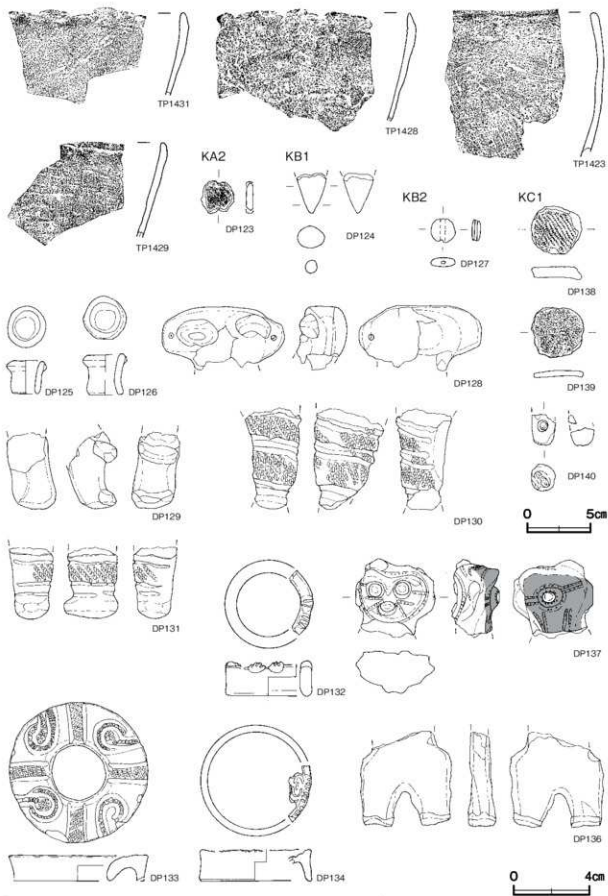
KD2



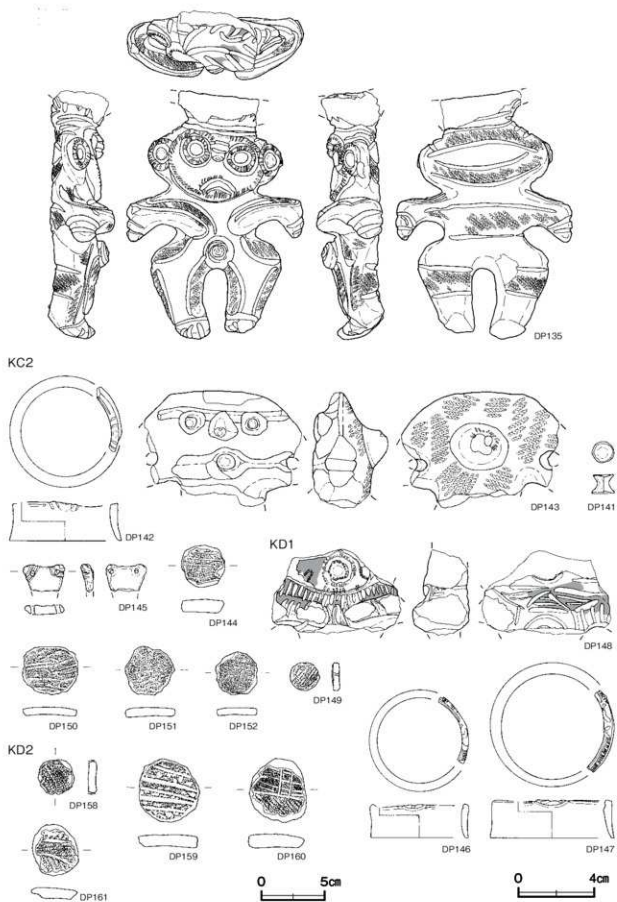
第77图 第2号貝層出土遺物実測図(13)



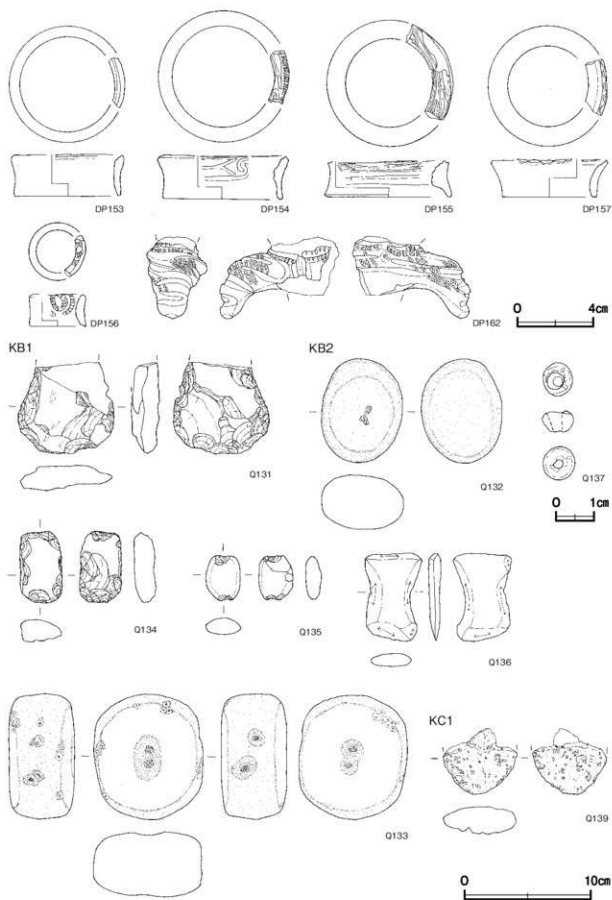
第78图 第2号层出土文物实测图(14)



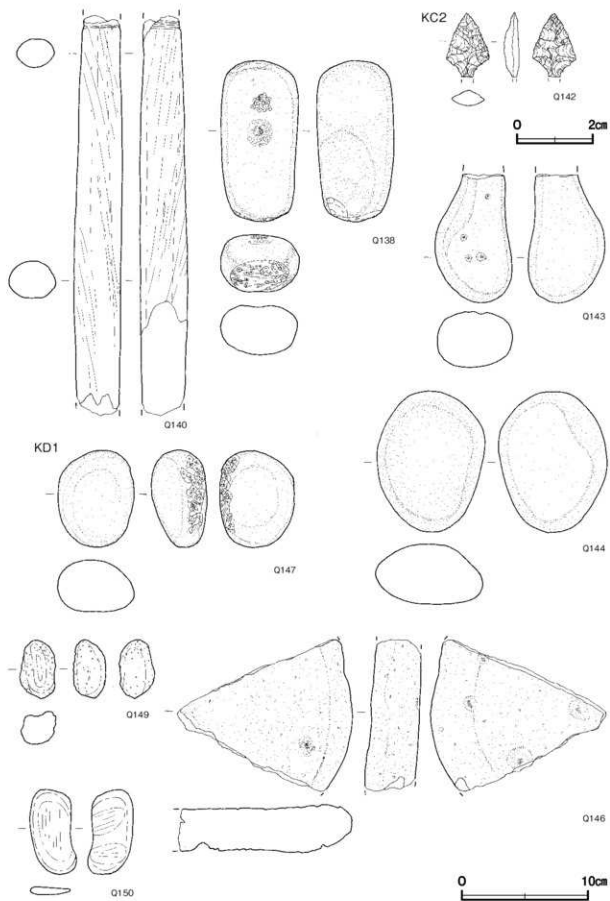
第79图 第2号层出土遗物实测图(15)



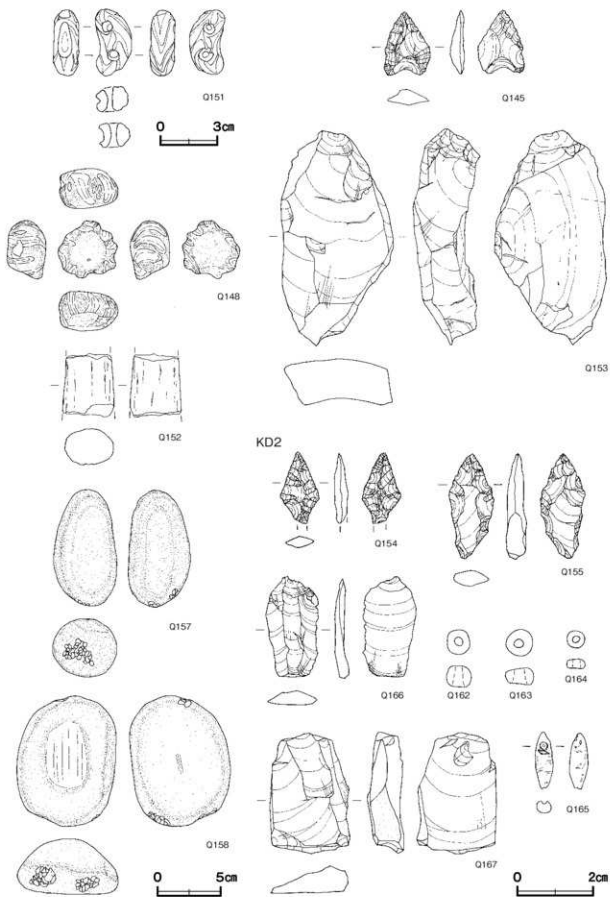
第80图 第2号具層出土遺物実測図(16)



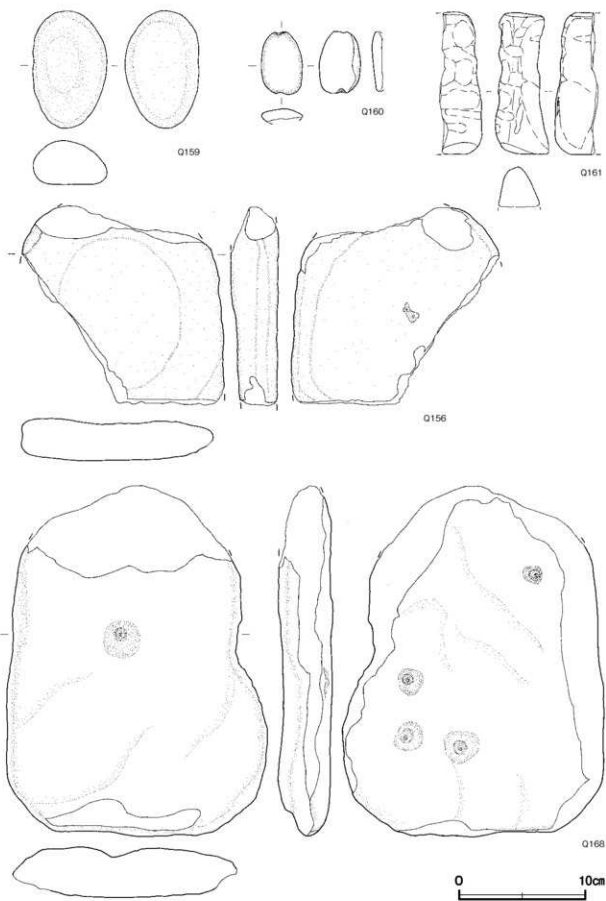
第81图 第2号貝層出土遺物実測図(17)



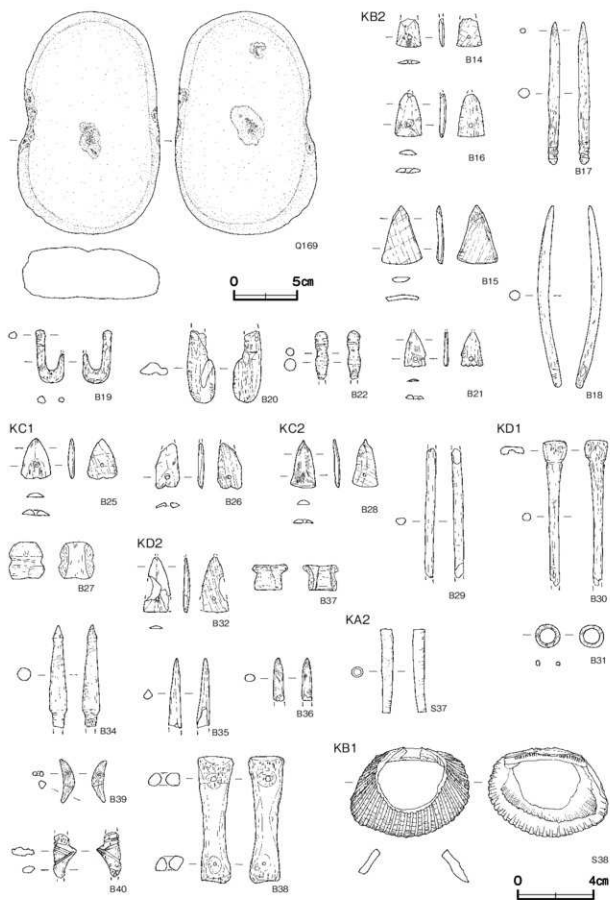
第 82 図 第 2 号貝層出土遺物実測図 (18)



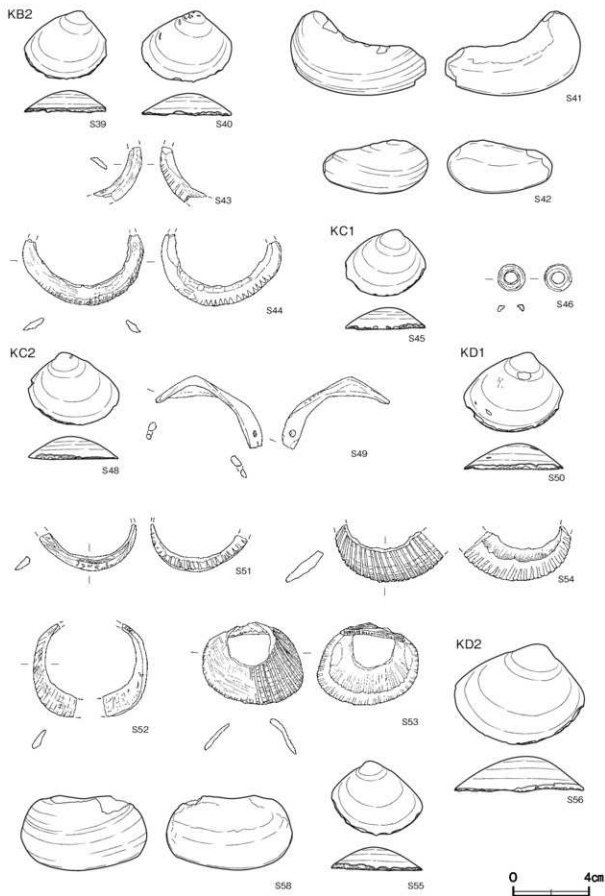
第 83 图 第 2 号貝層出土遺物実測図 (19)



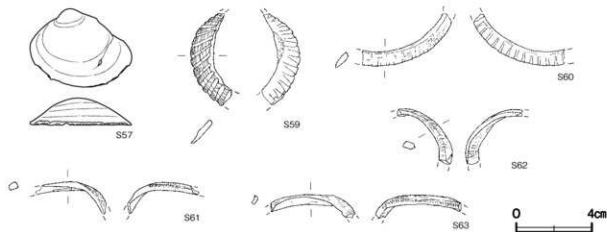
第84図 第2号貝層出土遺物実測図(20)



第85图 第2号貝層出土遺物実測図(21)



第 86 图 第 2 号貝層出土遺物実測図 (22)



第 87 図 第 2 号貝層出土遺物実測図 (23)

第 2 号貝層出土遺物観察表 (第 65 ~ 87 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
274	縄文土器	鉢	-	(17.8)	9.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部貼着→沈線文刷込み→無文部磨き 胴部沈線文→条線文 内面磨き 底部磨き	KB 1⑦	60%
275	縄文土器	鉢	[23.8]	(6.1)	-	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	普通	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1⑧11x	5%
276	縄文土器	浅鉢	[10.5]	(3.9)	-	長石・石英・赤色粒子	黒黒	普通	沈線文→L区の単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1⑨4x	40% PL17
277	縄文土器	深鉢	[27.2]	(19.2)	-	長石・石英	黒	普通	貼着→条線文→沈線文→RLの単筋縄文→ 無文部磨き 内面磨き	KB 2③	10%
278	縄文土器	深鉢	[24.0]	(5.8)	-	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	普通	貼着→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 2④	5%
279	縄文土器	深鉢	[33.6]	(19.8)	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	縄線文→条線文→縦線文 内面磨き	KB 2⑤	5%
280	縄文土器	深鉢	[27.3]	(10.5)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	貼着→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 2⑦2x	10% PL17
281	縄文土器	深鉢	[22.0]	(10.5)	-	長石・石英	褐灰	普通	条線文→刷込み 内面磨き	KB 2⑧	5%
282	縄文土器	深鉢	[24.6]	(6.9)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	沈線文→胴部沈線文刷込み→無文部磨き→ RLの単筋縄文 内面磨き	KB 2⑨	10%
283	縄文土器	深鉢	[33.8]	(11.8)	-	長石・石英・赤色粒子	黒黒	普通	貼着→沈線文→RLの単筋縄文→胴部刷込み→ 無文部磨き 内面磨き	KB 2⑩	5%
284	縄文土器	深鉢	[27.0]	(26.5)	-	長石・石英・赤色粒子	暗褐	普通	沈線文→口縁部及び胴部刷込み→ RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 2⑪	5%
285	縄文土器	深鉢	-	(14.4)	2.8	長石・石英・赤色粒子	黒黒	普通	沈線文→口縁部及び胴部刷込み→ RLの単筋縄文→無文部磨き 内面及び底部磨き	KB 2⑫・⑬	20% PL15
286	縄文土器	鉢	15.4	9.2	-	長石・石英	黒黒	普通	内・外面丁寧な磨き	KB 2⑭	95% PL14
287	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	6.8	長石・石英	黒	普通	内・外面及び底部磨き	KB 2⑮	20%
288	縄文土器	コシヤフ土器	[7.2]	8.3	3.2	長石・石英・赤色粒子	黒黒	普通	沈線文→口縁部及び胴部刷込み→ RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 2⑯1x ⑰2x	40% PL15
289	縄文土器	台付鉢	-	(5.7)	8.9	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	普通	隆帯上 RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KB 2⑱	5% PL16
290	縄文土器	コシヤフ土器	-	(2.3)	1.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内・外面ナデ	KB 3①2x	80%
291	縄文土器	深鉢	[24.1]	(25.9)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部・胴部条線文→口縁部平行沈線文→ 口縁部横位の沈線文→RLの単筋縄文 内面ナデ	KC 1①	25% PL15
292	縄文土器	深鉢	-	(11.8)	6.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	隆帯文→貼着→隆帯下刷込み→沈線文→ RLの単筋縄文 内面ナデ 底部刷り	KC 1②	20% PL15
293	縄文土器	深鉢	-	(5.1)	[6.4]	長石・石英	灰黄褐	普通	胴部下端内・外面ナデ 底部高台状	KC 1③5x	5%
294	縄文土器	浅鉢	-	(2.2)	[5.2]	長石・石英・赤色粒子	黒黒	普通	胴部下端磨き→横位の沈線文 内面磨き→一部赤形残存 底部磨き	KC 1④	5%
295	縄文土器	台付土器	-	(4.8)	-	長石・石英・雲母	黒	普通	内・外面磨き 台部内面ナデ	KC 1⑤	5%
296	縄文土器	深鉢	[21.8]	(22.2)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部刷り残ナデ 外面鏡面により一部凹窪 内面ナデ	KC 1⑥	胴底土器 20% PL17 胴底土器 30%
297	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	3.9	長石・石英	にぶい赤褐	普通	外面刷り・鏡面により潤滑 内面ナデ	KC 1⑦	5%
298	縄文土器	深鉢	-	(13.1)	5.0	長石・石英	にぶい赤褐	普通	条線文 内面ナデ 底部刷り	KC 2①	10%
299	縄文土器	深鉢	-	(7.3)	-	長石・石英・赤色粒子	黒黒	普通	貼着→沈線文→胴部基部沈線文→ RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KC 2②	10%
300	縄文土器	鉢	-	(4.5)	-	長石・石英	褐灰	普通	内・外面磨き・赤形残存 台部内面ナデ	KC 2③4x	5%
301	縄文土器	深鉢	[17.6]	(8.8)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	貼着→L区の単筋縄文→横位の沈線文→内面 沈線文→刷込み→無文部磨き 内面磨き	KD 1①	5% PL17
302	縄文土器	深鉢	[23.0]	(17.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	貼着→条線文→横位の沈線文→L区の単筋縄文→内面 刷込み→無文部磨き 内面磨き	KD 1②・④	15% PL15
303	縄文土器	深鉢	[23.2]	(11.7)	-	長石・石英・赤色粒子	黒黒	普通	隆帯文→貼着→RLの単筋縄文→沈線文→ 無文部磨き→隆帯上刷込み 内面ナデ	KD 1③	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
304	縄文土器	深鉢	[25.2]	(10.4)	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	胎轆→糸織文→縦位の削り 内面ナデ	KD 1④	5%
305	縄文土器	深鉢	[21.6]	(9.8)	-	長石・石英	にぶい青褐	普通	胎轆→沈線文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1③	5% PL17
306	縄文土器	深鉢	[21.4]	(11.6)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 1④	5%
307	縄文土器	深鉢	[22.3]	(6.6)	-	長石・石英	黒	普通	糸織文→沈線文→RLの単筋縄文 内面ナデ	KD 1⑤	5%
308	縄文土器	深鉢	[20.6]	(13.5)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい青褐	普通	糸織文→沈線文→LRの単筋縄文 内面ナデ	KD 1⑦	10%
309	縄文土器	深鉢	[27.0]	(10.7)	-	長石・石英	黒	普通	糸織文→沈線文→口縁部削み 内面磨き 内面ナデ	KD 1④	5%
310	縄文土器	深鉢	[23.3]	(9.7)	-	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	糸織文→沈線文→RLの単筋縄文→緑線文 内面ナデ	KD 1③	5%
311	縄文土器	深鉢	[27.4]	(6.8)	-	長石・石英	黒	普通	糸織文 内面磨き	KD 1⑤	5%
312	縄文土器	深鉢	[26.4]	(10.9)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	糸織文 内面ナデ	KD 1⑤	5%
313	縄文土器	深鉢	-	(8.4)	5.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	糸織文→沈線文・刺突文 内面ナデ	KD 1②	10%
314	縄文土器	深鉢	-	(12.8)	5.4	長石・石英・赤色粒子	黒	普通	削り残磨き 内面削り	KD 1③	5%
315	縄文土器	深鉢	-	(7.3)	6.4	長石・石英・雲母	橙	普通	糸織文 内面ナデ後磨き 底部削代痕	KD 1⑦	5%
316	縄文土器	鉢	[11.5]	(4.2)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黒	普通	糸織文 内面ナデ後磨き 底部削り	KD 1③&⑥	20%
317	縄文土器	鉢	[22.2]	(8.0)	-	長石・石英	橙	普通	沈線文・胎轆→穿孔・口縁部削み→無文部磨き 内面磨き	KD 1⑤	5% PL17
318	縄文土器	鉢	-	(10.8)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	胎轆状の緑帯文→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④	40% PL15
319	縄文土器	浅鉢	20.0	7.9	-	長石・石英	黒	普通	沈線文→LRの単筋縄文→割部磨き 内面ナデ	KD 1③	70% PL15
320	縄文土器	浅鉢	13.1	(4.2)	-	長石・石英・赤色粒子	黄灰	普通	突起→横位の沈線文→沈線による文様・穿孔 内面磨き	KD 1③	60% PL16
321	縄文土器	台付鉢	-	(10.5)	12.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい黒	普通	沈線文→RLの単筋縄文→穿孔→無文部磨き 台部内面ナデ	KD 1②・④	20% PL16
322	縄文土器	台付土器	-	(3.6)	(5.5)	長石・石英	灰黄褐	普通	内・外面ナデ	KD 1	5%
323	縄文土器	台付土器	-	(6.7)	-	長石・石英	黒褐	普通	沈線文→RLの単筋縄文→無文部丁寧な磨き 内面ナデ	KD 1④	5%
324	縄文土器	台付土器	-	(6.3)	-	長石・石英	橙	普通	緑帯文→隆部上削み・沈線文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 1③&⑤	5%
325	縄文土器	手摺形土器	-	(2.9)	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	胎轆部糸織文・穿孔・台部表面沈線文・刺突文 把手部削代 台部・手摺部残存	KD 1⑦	20% PL17
326	縄文土器	1 ¹ / ₂ フタ土器	10.8	5.8	5.3	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	突起彫刻→胎面圧痕 輪積み痕残存 内面ナデ 底部ナデ	KD 1④	95% PL16
327	縄文土器	1 ¹ / ₂ フタ土器	7.8	4.7	-	長石・石英	にぶい青褐	普通	輪積み痕残存 内面ナデ	KD 1⑦	100% PL16
328	縄文土器	1 ¹ / ₂ フタ土器	-	(3.4)	5.0	長石・石英	灰褐	普通	台部ナデ・胎面圧痕 内面ナデ	KD 1⑤	30%
329	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	(3.0)	長石・石英	明赤褐	普通	外面削り→被熱により発色化 内面ナデ 胎部削り	KD 1②	製成土器 5%
330	縄文土器	深鉢	[17.7]	(9.3)	-	長石・石英	黒褐	普通	口縁部糸織文→割部糸織文→削み 内面ナデ	KD 2②	5% PL15
331	縄文土器	深鉢	[27.0]	(8.8)	-	長石・石英	黒褐	普通	糸織文→緑線文→平行沈線文→平行沈線文間ナデ 内面ナデ	KD 2②&⑧	5%
332	縄文土器	深鉢	-	(4.2)	4.8	長石・石英	明赤褐	普通	外面ナデ・台部外面磨き 内面削代磨き	KD 2②&⑧	10%
333	縄文土器	浅鉢	-	(5.8)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	突起彫刻→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 2・⑧x 1/3	20%
334	縄文土器	台付土器	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	外面削り→被熱により一部剥離 内面ナデ	KD 2②	5%
335	縄文土器	手摺形土器	8.2	5.5	(8.9)	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	LRの単筋縄文→沈線文→刺突文→無文部磨き	KD 2①	70% PL17
336	縄文土器	1 ¹ / ₂ フタ土器	-	(3.3)	-	長石・石英	にぶい青褐	普通	胎轆→沈線文・口唇部削み 内面ナデ	KD 2⑤&⑧	10%
337	縄文土器	1 ¹ / ₂ フタ土器	4.6	1.9	-	長石・石英	灰褐	普通	沈線文→磨き 内面ナデ	KD 2③	80% PL16

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1209	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	沈線文→削み→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KA 2②1x	
TP1270	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	沈線文→削み→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KA 2②2x	
TP1271	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	胎轆→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1②	PL18
TP1272	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	沈線文・口唇部削み→RLの単筋縄文 内面磨き	KB 1①3x	
TP1273	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	沈線文→口唇部削み→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1②&8x	
TP1274	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	糸織文→沈線文→緑線文 内面ナデ	KB 1⑦	
TP1275	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黒	糸織文→緑線文 内面磨き	KB 1②&8x	
TP1276	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗灰	糸織文→緑線文 内面磨き	KB 1④	
TP1277	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	糸織文→緑線文 内面磨き	KB 1①	PL19
TP1278	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒	横位の沈線文→胎轆→RLの単筋縄文→区切り文→無文部磨き 内面磨き	KB 1②	
TP1279	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	地縄文→糸織文→緑線文 内面磨き	KB 1③	

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1280	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	沈線文→RLの単節縄文→無文部ナデ 内面磨き	KB 1 4 8	
TP1281	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	沈線文→RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 4 8	
TP1282	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	黒	条線文・口唇部沈線文 内面磨き	KB 1 4 8 2 x	
TP1283	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	沈線文→RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 4 8 4 x	
TP1284	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	外面へう割り 内面磨き	KB 1 4 8	PL19
TP1285	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐色	口唇部ナデ 外面磨り 内面ナデ	KB 1 4 8 4 x	製塩土器
TP1286	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒	口唇部磨り後ナデ 外面磨り 内面ナデ	KB 1 4 8 10x	製塩土器 PL20
TP1287	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐色	口唇部磨り後ナデ 外面磨り 内面ナデ	KB 1 4 8 4 x	製塩土器 PL20
TP1288	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐色	地縄文→条線文→縦位の平行条線文→経線文 内面磨き	KB 2 ③	
TP1289	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	条線文→経線文 内面磨き	KB 2 ③	
TP1290	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	地縄文・経線文→条線文 内面磨き	KB 2 ③ 2 x	
TP1291	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	地縄文→条線文→経線文 内面磨き	KB 2 ③	
TP1292	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	沈線文→RLの単節縄文・沈線間詰め→無文部磨き 内面磨き	KB 2 ② 3 x	
TP1293	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	地縄文→条線文→縦位の平行条線文間詰め・経線文 内面磨き	KB 2 ③	
TP1294	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	沈線文→RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 2 ③	
TP1295	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	条線文→平行沈線文間詰め 内面磨き	KB 2 ③	
TP1296	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	無暗褐色	詰め→RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 2 ③ 4 x	PL19
TP1297	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黒	地縄文→条線文→経線文 内面ナデ	KB 2 ③ 2 x	PL19
TP1298	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐色	RLの単節縄文→条線文・平行沈線文→無文部磨き 内面磨き	KB 2 ③	
TP1299	縄文土器	鉢	長石・石英	黒	口唇部詰め 胴部に横 内外面磨き	KB 2 ③ 3 x	PL19
TP1300	縄文土器	鉢	長石・石英	暗灰	横位の沈線文→詰め→斜行沈線文→磨き 内面磨き	KB 2 ③ 2 x	PL19
TP1301	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黒	条線文・口唇部詰め 内面磨き	KB 3 ③ 3 x	
TP1302	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	沈線文→口唇部詰め・RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 ①	
TP1303	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	条線文・沈線文→LRの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 ① ②	
TP1304	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	地縄文→経線文→斜格子文 口唇部内面沈線 内面磨き	KB 1 ① ③	
TP1305	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	口唇部詰め→沈線文→RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 4 1 x	PL19
TP1306	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	地縄文→条線文→経線文 口唇部内面沈線・内面磨き	KB 1 4 ③	
TP1307	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	地縄文→条線文→経線文 内面磨き	KB 1 4 ③	
TP1308	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	隆帯 RLの単節縄文→詰め→無文部磨き 内面ナデ	KB 1 4 ③ 3 x	
TP1309	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	沈線文→胴部詰め→RLの単節縄文→無文部ナデ 内面ナデ	KB 1 ① ②	
TP1310	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	沈線文→口唇部詰め→LRの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 4 ① 1 x	
TP1311	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	経線文→条線文→沈線文 内面ナデ	KB 1 4 ③	
TP1312	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	条線文→経線文 内面磨き	KB 1 4 ③ 3 x	
TP1313	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黒	条線文→経線文 内面磨き	KB 1 4 ③	
TP1314	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	RLの単節縄文→条線文→経線文→沈線文→沈線文間詰め 内面ナデ	KB 1 4 ③	PL19
TP1315	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	詰め→無文部ナデ→沈線文→RLの単節縄文 内面ナデ	KB 1 4 ③	
TP1316	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	条線文→経線文 内面磨き	KB 1 4 ③	
TP1317	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	条線文→経線文 内面ナデ後一部磨き	KB 1 4 ③	
TP1318	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	条線文→縦位の沈線文→条線文→沈線文間詰め→縦位の平行条線文 内面ナデ	KB 1 4 ③	PL19
TP1319	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	条線文→沈線文→RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 ① ③	
TP1320	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	沈線文→詰め→RLの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 4 ③	
TP1321	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	平行沈線文・三叉文→Lの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 4 ③ 3 x	
TP1322	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	平行沈線文・三叉文→LRの単節縄文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 4 ③ 3 x	
TP1323	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	沈線文→条線文→無文部磨き 内面磨き	KB 1 4 ① x	PL19
TP1324	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	口唇部磨り後ナデ 外面磨り・焼熱により発色化 内面ナデ	KB 1 4 ③	製塩土器 PL20
TP1325	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	口唇部磨りにより発色化 外面磨り 口縁部焼熱により発色化 内面ナデ	KB 1 4 ③	製塩土器 PL20
TP1326	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	口唇部磨り後ナデ 外面焼熱により潤滑 内面ナデ	KB 1 4 ③	製塩土器

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1327	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	口唇部削り後ナデ 口縁部指頭圧痕 外面削り 内面ナデ	KC 1 9F	製塚土器
TP1328	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	口唇部削り後ナデ 外面削り 内面ナデ	KC 1 9F	製塚土器
TP1329	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	口唇部削りにより実形化 外面削り・被熱により一部剥離 内面ナデ	KC 1 9F	製塚土器
TP1330	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄	口唇部削りにより実形化 外面削り・被熱により一部剥離 内面ナデ	KC 1 9F	製塚土器
TP1331	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	口唇部ナデ 外面削り 内面ナデ	KC 1 9F 5x	製塚土器 PL19
TP1332	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄	口唇部ナデ 外面被熱により剥離 内面ナデ	KC 1 9F 3x	製塚土器 PL20
TP1333	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄	口唇部削りにより実形化 外面削り・被熱により一部剥離 内面ナデ	KC 1 9F 5x	製塚土器 PL20
TP1334	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄	口唇部削り後ナデ 外面削り 内面ナデ	KC 1 9F 3x	製塚土器
TP1335	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	口唇部削りにより実形化 外面削り・被熱により一部剥離 内面ナデ	KC 1 9F	製塚土器 PL20
TP1336	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄	口唇部ナデ 外面削り 内面ナデ	KC 1 9F	製塚土器 PL20
TP1337	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	口唇部削り後ナデ 外面被熱により剥離 内面ナデ	KC 1 9F	製塚土器
TP1338	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	口唇部削りにより実形化 外面被熱により剥離 内面ナデ	KC 1 9F	製塚土器
TP1339	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒	隆帯文・貼留→沈線文→沈線内・隆帯上刻み→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ後一部磨き	KC 1 9F	
TP1340	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	外面削り・底辺部刻み 内面ナデ	KC 2 9F 3x	PL19
TP1341	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	地縄文→沈線による斜格子文→無文部磨き 口唇部内面沈線内面磨き	KC 2 9F	
TP1342	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黄	地縄文・絛線文→条線文 口唇部内面沈線 内面磨き	KC 2 9F	
TP1343	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄	地縄文・絛線文→条線文 内面磨き	KC 2 9F 11x	
TP1344	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄	貼留→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KC 2 9F 5x	PL19
TP1345	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤黒	隆帯文・貼留→沈線文→沈線内刻み・RLの単筋縄文・隆帯上刻み→無文部磨き 内面磨き	KC 2 9F	PL19
TP1346	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄	貼留→沈線文→RLの単筋縄文 内面ナデ	KC 2 9F 4x	PL19
TP1347	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	隆帯文・貼留→隆帯上刻み・RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KC 2 9F	
TP1348	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	貼留→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KC 2 9F	
TP1349	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	貼留→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KC 2 9F 7x	
TP1350	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	沈線文→RLの単筋縄文→口唇部磨き 内面磨き	KC 2 9F 9x	
TP1351	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	沈線文・絛線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KC 2 9F	
TP1352	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	条線文→絛線文 内面磨き	KC 2 9F	
TP1353	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	条線文→沈線文→沈線文間及び口縁部刻み 内面粗い磨き	KC 2 9F 5x	PL19
TP1354	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	条線文 器面被熱により発色化 内面ナデ	KC 2 9F	
TP1355	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	口縁部刻み→沈線文→無文部磨き 内面磨き	KC 2 9F	PL19
TP1356	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗赤褐	沈線文・三文文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KC 2 9F 3x	PL19
TP1357	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	口唇部へう切り 外面削り 内面ナデ	KC 2 9F 30x	製塚土器
TP1358	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	口唇部へう切り 外面削り・被熱により一部剥離 内面ナデ	KC 2 9F 11x	製塚土器 PL20
TP1359	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	口唇部へう切り後 内外面ナデ 外面削り 内面ナデ	KC 2 9F 5x	製塚土器
TP1360	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	口唇部削り後ナデ 口縁部指頭圧痕 外面削り・一部被熱により発色化 内面ナデ	KC 2 9F 4x	製塚土器 PL20
TP1361	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	地縄文→条線文→絛線文 口唇部内面沈線文 内面磨き	KD 1 9F	
TP1362	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	地縄文→斜格子沈線文→無文部磨き 内面磨き	KD 1 9F	
TP1363	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	貼留→沈線文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1 9F	PL19
TP1364	縄文土器	深鉢	長石・石英	黄	貼留→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1 9F	
TP1365	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐	貼留→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1 9F	
TP1366	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	貼留→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1 9F	PL19
TP1367	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐	貼留→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1 9F	
TP1368	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄	貼留→沈線文・隆帯上刻み・RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 1 9F	
TP1369	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐	条線文→底状沈線文 内面磨き	KD 1 9F	PL19
TP1370	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄	条線文 内面磨き	KD 1 9F	
TP1371	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	条線文→沈線文→LRの単筋縄文→無文部・無文部磨き 内面磨き	KD 1 9F	
TP1372	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1 9F	
TP1373	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	貼留→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面粗い磨き	KD 1 9F	

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1374	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	条線文→沈線文→結線文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④ 8x	
TP1375	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐色	条線文→結線文 内面粗い磨き	KD 1④	
TP1376	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	条線文→沈線文→無文部磨き→結線文 内面ナデ	KD 1④	
TP1377	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	条線文→結線文 内面ナデ	KD 1④	
TP1378	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	沈線文→条線文→結線文→沈線文→無文部磨き 内面磨き・ナデ	KD 1④	
TP1379	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	地縄文→条線文→沈線文→結線文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④	
TP1380	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	条線文→沈線文→結線文→無文部磨き 内面粗い磨き	KD 1④	
TP1381	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗赤褐色	条線文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④	
TP1382	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	沈線文→無文部磨き→RLの単筋縄文 内面ナデ	KD 1④	
TP1383	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 1④ PL19	
TP1384	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	条線文→沈線文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④ PL19	
TP1385	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒	沈線文→胎磨→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 1④	
TP1386	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④	
TP1387	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	沈線文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 1④ PL19	
TP1388	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	沈線文→又入直文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 1④	
TP1389	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	結線文→条線文→横位の沈線文→口縁部沈線文・筋み 内面磨き	KD 1④ PL19	
TP1390	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	沈線文→刺突文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④ PL19	
TP1391	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	沈線文→筋み・RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 1④	
TP1392	縄文土器	鉢	長石・石英	にぶい橙	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④	
TP1393	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐灰色	沈線文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 1④ PL20	
TP1394	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	暗褐色	胎磨→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④	
TP1395	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	赤	沈線文 外面赤彩 内面ナデ	KD 1④ 10x	
TP1396	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	横位の沈線文→口縁部沈線文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 1④ PL20	
TP1397	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	口唇部磨り及び胎磨押圧により実管化 外面磨り 内面ナデ	KD 1④ 製塩土器	
TP1398	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	口唇部磨り後ナデ 外面被熱により実管化 内面ナデ	KD 1④ 製塩土器 PL20	
TP1399	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	口唇部磨りにより実管化 外面磨り 内面磨き	KD 1④ 製塩土器	
TP1400	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	口唇部磨り後ナデ・実管化 外面磨り・一部被熱により網線 内面ナデ	KD 1④ 8x 製塩土器	
TP1401	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	口唇部磨りにより実管化 外面磨り・被熱により実管化	KD 1④ 製塩土器	
TP1402	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	口唇部磨りにより実管化 外面磨り・被熱により実管化 内面ナデ	KD 1④ 製塩土器	
TP1403	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	口唇部磨り後ナデ・実管化 外面磨り 内面ナデ	KD 1④ 製塩土器 PL20	
TP1404	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐色	口唇部ヘラ切り 外面被熱により実管化 内面ナデ	KD 1④ 製塩土器	
TP1405	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	口唇部磨り後ナデ 外面磨り 内面ナデ	KD 1④ 製塩土器 PL20	
TP1406	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	口唇部磨りにより実管化 外面被熱により網線 内面ナデ	KD 1④ 製塩土器 PL20	
TP1407	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗褐色	口唇部粘土貼付→沈線による筋み 沈線文→RLの単筋縄文→無文部ナデ 内面磨き	KD 2① 13x PL20	
TP1408	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	地縄文→条線文→結線文 口唇部内面沈線文 内面磨き	KD 2② 5x	
TP1409	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	RLの単筋縄文→沈線文→結線文 内面磨き	KD 2② 8x	
TP1410	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	地縄文→条線文→結線文 内面ナデ	KD 2③	
TP1411	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐色	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 2② 10x	
TP1412	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	胎磨→沈線文→RLの単筋縄文→無文部ナデ 内面磨き	KD 2②	
TP1413	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	褐灰色	磨り→口唇部結線沈線文 内面ナデ	KD 2③	
TP1414	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	条線文→結線文→平行沈線文→沈線文間ナデ 内面ナデ	KD 2③ PL20	
TP1415	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐色	条線文→条線文→無文部磨き 内面磨き	KD 2③	
TP1416	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐色	胎磨→胎磨→胎磨上筋み・RLの単筋縄文→沈線文→無文部ナデ 内面ナデ	KD 2③	
TP1417	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	胎磨→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	KD 2② 12x	
TP1418	縄文土器	鉢	長石・石英	黒褐色	胎磨→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	KD 2①	
TP1419	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	褐灰色	区画内結線沈線文 口縁部内面沈線文→区切り文→磨き	KD 2③ PL20	
TP1420	縄文土器	鉢	長石・石英	暗赤褐色	沈線文→LRの単筋縄文→無文部丁寧な磨き 内面磨き	KD 2② 7x PL20	

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1421	縄文土器	浅鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	平行沈線による渦巻文 口唇部及び内面書き	KD 2②	PL20
TP1422	縄文土器	浅鉢	長石・石英	灰青褐色	沈線文→沈線文間詰め→無文部書き→口縁部沈線文 内面書き	KD 2③ 13x	PL20
TP1423	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	外面周り 内面ナデ	KD 2②	製塩土器 PL20
TP1424	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	口唇部ヘラ切り 外面周り 内面ナデ	KD 2① 12x	製塩土器
TP1425	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	口唇部無調整 外面周り 内面ナデ	KD 2②	製塩土器
TP1426	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	口唇部周り後ナデ 外面周り 内面ナデ	KD 2③ 8x	製塩土器
TP1427	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	口唇部ヘラ切り後ナデにより平直化 外面周り 内面ナデ	KD 2② 4x	製塩土器
TP1428	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	口唇部指頭押圧により実写化 外面被熱により調整 内面ナデ	KD 2②	製塩土器 PL20
TP1429	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐色	口唇部ナデ 外面周り 内面ナデ	KD 2②	製塩土器
TP1430	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黒	口唇部周りにより実写化 外面周り 内面ナデ	KD 2③	製塩土器
TP1431	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	口唇部周り及び指頭押圧により実写化 外面周り 内面ナデ	KD 2②	製塩土器 PL20

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP123	土器片鉢	2.6	2.6	0.6	4.70	黒褐色 長石・石英	側縁部に挟り4か所	KA 2③ 1x	PL21
DP124	不明土製品	(3.1)	(2.4)	(1.9)	10.34	黒褐色 長石・石英	中実 丁寧な書き	KB 1⑦ 2x	
DP125	耳飾り	径 2.1	孔径 1.5	1.8	3.86	にぶい黒 長石・石英	無文 全面ナデ	KB 2③	PL21
DP126	耳飾り	径 2.3	孔径 1.9	2.2	7.31	黒褐色 長石・石英	無文 側面書き	KB 2③	PL21
DP127	右乳袋糸鼻	1.9	2.0	0.7	2.43	明赤褐色 長石・石英	長径方向に孔が貫通 外面ナデ	KB 2③ 2x	
DP128	土偶	(3.4)	(6.5)	(2.6)	(41.99)	黒褐色 長石・石英	山形土偶の頭部 除帝文 右乳孔未貫通 表面ナデ	KB 2④	PL22
DP129	土偶	(4.1)	(2.6)	(2.6)	(20.51)	にぶい赤褐色 長石・石英・赤色粒子	山形土偶の脚部 膝部に粘土貼付 側り主体の調整	KB 2③ 2x	
DP130	土偶	(5.3)	(3.0)	(3.7)	(47.42)	明赤褐色 長石・石英	ミミズ土偶の脚部 平行沈線文 RLの単純縄文	KB 2④	PL22
DP131	土偶	(3.8)	(2.3)	(2.9)	(28.57)	黒褐色 長石・赤色粒子	山形土偶の脚部 平行沈線文 RLの単純縄文	KB 2④	PL22
DP132	耳飾り	径 [4.7]	孔径 [3.4]	1.8	(5.40)	黒褐色 長石・石英	胎土で加飾 側面ナデ	KC 1③	
DP133	耳飾り	径 7.4	径 2.9	(1.3)	(52.28)	黒褐色 長石・石英	着付沈線間にLRの単純縄文 沈線による裏文内に筋及びピストロー状の工具による刻突 無文部及び側面・内面丁寧な書き	KC 1③	PL21
DP134	耳飾り	径 [6.0]	孔径 [5.3]	1.7	(3.80)	にぶい黒 長石・石英	沈線と刻みで加飾 側面・内面書き	KC 1③ 1x	
DP135	土偶	(13.2)	9.4	(2.6)	(256.67)	黒褐色 長石・石英	ミミズ土偶 顔面部一部欠損 顔面部平直面に赤彩残存 口を沈線文で表現	KC 1③	PL21
DP136	土偶	(5.0)	(4.9)	(1.5)	(30.20)	黒褐色 長石・石英	山形土偶の脚部-脚部 板状 表面ナデ	KC 1③	PL22
DP137	土偶	(4.2)	(4.3)	(2.5)	(36.54)	にぶい黒 長石・石英	ミミズ土偶の頭部 後頭部に胎土 一部赤彩残存	KC 1③	PL22
DP138	土器片内蓋	3.8	4.0	1.0	17.30	黒褐色 長石・石英・赤色粒子	縁部粗削り後、一部研磨	KC 1④ 4x	
DP139	土器片内蓋	4.0	4.2	0.6	11.03	黒褐色 長石・石英・赤色粒子	縁部粗削り後、一部研磨	KC 1④ 4x	
DP140	不明土製品	(2.5)	(1.9)	(2.2)	(6.08)	黒褐色 長石・石英	一方向からの穿孔 中空 表面書き	KC 1④ 9x	
DP141	耳栓	径 1.1	-	1.0	0.87	黒褐色 長石・石英	無文 全面丁寧なナデ	KC 2① 1x	PL21
DP142	耳飾り	径 [6.0]	孔径 [4.8]	2.1	(3.45)	明赤褐色 長石・石英	沈線で加飾 側面・内面丁寧な書き	KC 2③ 2x	
DP143	土偶	(6.2)	(8.3)	(4.0)	(131.97)	黒褐色 長石・石英	山形土偶の頭部 後頭部にRLの単純縄文	KC 2③	
DP144	土器片内蓋	3.4	3.4	1.0	14.25	にぶい黒褐色 長石・石英	安形式粗製深鉢利用 縁部粗削り後、一部研磨	KC 2⑦ 1x	
DP145	不明土製品	(2.2)	(3.3)	(1.0)	(5.88)	黒褐色 長石・石英	端部沈線で加飾後、一方向からの穿孔 表面書き	KC 2⑤ 5x	
DP146	耳飾り	径 [5.3]	孔径 [4.5]	1.8	(4.13)	黒褐色 長石・石英	沈線と刻みで加飾 側面・内面丁寧な書き	KD 1④	PL21
DP147	耳飾り	径 [6.6]	孔径 [5.5]	2.0	(5.00)	黒褐色 長石・石英・赤色粒子	沈線と刻みで加飾 側面・内面書き	KD 1⑤ 10x	PL21
DP148	土偶	(4.5)	(6.9)	(3.0)	(77.92)	明赤褐色 長石・石英	ミミズ土偶の頭部-脚部 赤彩残存	KD 1⑦ 11x	PL22
DP149	土器片鉢	2.3	2.3	0.6	3.76	黒褐色 長石・石英	縁部研磨 側縁部に挟り4か所	KD 1② 5x	PL21
DP150	土器片内蓋	3.8	4.4	0.7	14.40	黒褐色 長石・石英	安形式粗製深鉢利用 周縁部研磨	KD 1② 6x	
DP151	土器片内蓋	3.9	3.9	0.8	13.74	にぶい黒 長石・石英・赤色粒子	縁部粗削り後、一部研磨	KD 1⑤ 6x	
DP152	土器片内蓋	3.5	3.3	0.6	8.53	黒褐色 長石・石英	縁部研磨	KD 1⑦ 7x	
DP153	耳飾り	径 [6.0]	孔径 [5.6]	2.2	(2.64)	明赤褐色 長石・石英	内面上位沈線文 側縁・内面丁寧な書き	KD 2	
DP154	耳飾り	径 [7.0]	孔径 [5.7]	2.3	(4.76)	黒褐色 長石・石英	縁部刻み 内面沈線文・三叉文で加飾 側面・内面丁寧な書き	KD 2⑦ 7x	
DP155	耳飾り	径 [6.8]	孔径 [5.6]	1.9	(10.93)	にぶい黒 長石・石英・赤色粒子	内面上位沈線により加飾 側面・内面書き	KD 2⑧ 12x	PL21
DP156	耳飾り	径 [3.0]	孔径 [2.0]	1.7	(2.28)	明赤褐色 長石・石英	内面結節沈線により加飾 側面・内面書き	KD 2⑤ 5x	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特 徴	出土位置	備 考
DP157	耳飾り	径 [6.4]	孔径 [4.3]	2.0	(3.44)	にぶい赤褐色長石・石英	内面上位沈殿・押圧により加飾 側面・内面磨き	KD 2③9x	
DP158	土器片鏃	2.7	2.9	0.7	6.73	にぶい赤褐色長石・石英	側縁部粗削り 側縁部に抉り4か所	KD 2③11x	
DP159	土器片鏃	5.1	4.8	1.1	27.48	にぶい赤褐色長石・石英	磨石式粗製深鉢を利用 側縁部粗削り後、一部研磨	KD 2③12x	
DP160	土器片鏃	5.1	4.6	1.2	28.42	赤褐色長石・石英	安行式深鉢を利用 側縁部粗削り後、一部研磨	KD 2③12x	
DP161	土器片鏃	4.1	3.7	0.8	15.48	赤褐色長石・石英・赤鉄粒子	安行1式精製深鉢を利用 側縁部研磨	KD 2③5x	
DP162	土偶	(4.3)	(6.4)	(3.2)	(46.86)	赤褐色長石・石英・赤鉄粒子	ミヌタ土製の右側部・胸部 沈線文・隆帯文・刺突文	トレンチ中	PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q131	打製石斧	(7.2)	7.6	(2.2)	(38.50)	凝灰岩	分銅形 扁平な體を素材とし、両面調整	KB 1②1x	
Q132	磨石	8.2	6.5	4.3	315.60	安山岩	全面研磨 一面に磨痕状の敲打痕	KB 2④4x	
Q133	磨石	10.0	8.7	5.2	772.00	安山岩	全面研磨 表面及び側縁に各2孔 側縁に磨痕状の敲打痕	KB 2	PL23
Q134	石鏃	5.6	3.3	1.7	57.10	凝灰岩	未成品 側縁を削磨調整 両端部に浅い抉り	KB 2③3x	
Q135	石鏃	3.5	2.7	1.2	17.30	安山岩	両端部に抉り	KB 2③1x	
Q136	砥石	7.0	4.6	1.0	32.40	砂岩	全面研磨面	KD 2③3x	PL23
Q137	小玉	径 [0.8]	孔径 [0.5]	0.6	0.55	翡翠	一方向からの穿孔	KB 2	PL24
Q138	磨石	12.7	6.2	4.5	531.70	安山岩	両端部研磨 一端部及び表面に磨痕状の敲打痕 表面凹み	KC 1②	PL23
Q139	軽石製品	(5.2)	6.0	2.2	(7.10)	浮石	全面研磨調整	KC 1	
Q140	石鏃	(31.7)	3.8	3.0	(58.70)	粘板岩	頭部・下端部欠損 頭部沈線文、表面丁寧な研磨	KC 1③	PL23
Q142	石鏃	(1.7)	1.2	0.4	(0.61)	チャート	有茎鏃 両面押圧調整 基部欠損	KC 2	PL24
Q143	磨石	(10.3)	6.1	4.4	(46.30)	安山岩	表面に磨痕状の凹み4か所 被熱により一部変色	KC 2③	
Q144	磨石	11.2	8.7	4.8	626.80	安山岩	全面研磨 被熱により一部変色	KC 2③	PL23
Q145	石鏃	1.7	1.3	0.4	0.61	チャート	凹差無茎鏃 両面押圧調整	KD 1②9x	PL24
Q146	石鏃	(12.0)	(13.9)	(4.4)	(58.80)	安山岩	表面凹状 表面に孔1か所、裏面に断面V字状の孔4か所	KD 1④	
Q147	磨石	7.7	6.0	4.4	298.40	安山岩	全面研磨 一側縁に磨痕状の敲打痕	KD 1③3x	
Q148	砥石	4.7	4.7	3.1	76.30	砂岩	側縁に複数の溝状の痕面	KD 1⑤	PL23
Q149	砥石	4.7	2.9	2.6	25.60	安山岩	表面に溝状の凹み	KD 1⑦7x	
Q150	砥石	6.7	3.7	0.7	23.10	砂岩	表面研磨面	KD 1④4x	
Q151	勾玉	3.5	2.0	1.4	8.51	珪化石	両端2孔 三叉文による加飾 一側面に楕円形の抉り	KD 1③10x	
Q152	石鏃	(5.0)	(4.1)	(2.8)	(89.80)	花崗岩	両端部欠損 表面研磨調整	KD 1⑦14x	
Q153	網片	5.7	3.0	1.8	29.50	チャート	上・横2方向からの打撃	KD 1⑥	
Q154	石鏃	(1.9)	1.0	0.4	(0.48)	メノウ	有茎鏃 両面押圧調整 基部欠損	KD 2	PL24
Q155	石鏃	2.8	1.2	0.6	1.98	チャート	基部未整形の未成品	KD 2③15x	PL24
Q156	石鏃	(15.8)	(16.2)	(3.8)	(109.50)	砂岩	表面凹状 表面凹み1か所	KD 2③	
Q157	磨石	9.3	5.0	4.6	393.20	安山岩	全面研磨 一端部に磨痕状の敲打痕	KD 2③	
Q158	磨石	10.4	7.9	4.4	524.80	安山岩	表面凸部の研磨調整 両端部に敲打痕	KD 2③	
Q159	磨石	9.4	5.9	3.5	275.80	安山岩	全面研磨	KD 2③	
Q160	石鏃	5.0	3.3	(1.0)	(199.80)	ホルンフェルス	両端部に抉り 表面調整	KD 2③7x	
Q161	砥石	11.4	(4.2)	(3.4)	(35.60)	砂岩	複数の溝状の痕面 一側縁に縦方向の痕面	KD 2③	PL23
Q162	小玉	径 [0.6]	孔径 [0.4]	0.5	0.23	翡翠	一方向からの穿孔	KD 2③7x	PL24
Q163	小玉	径 [0.7]	孔径 [0.4]	0.4	0.25	翡翠	一方向からの穿孔	KD 2	PL24
Q164	小玉	径 [0.5]	孔径 [0.2]	0.2	0.06	蛇紋岩	一方向からの穿孔 側縁直線状 被熱により変色	KD 2	PL24
Q165	垂飾り	1.5	0.5	0.3	0.46	翡翠	未成品 鐘形状に研磨整形 横位の割痕が残存 未貫通の穿孔痕1か所	KD 2	PL24
Q166	網片	2.7	1.4	0.4	1.22	黒曜石	二次加工を有する縦長網片	KD 2③14x	
Q167	網片	3.2	2.1	0.9	5.59	頁岩	縦長網片 先端部調整	KD 2③7x	
Q168	石鏃	(27.8)	20.8	4.3	(382.60)	雲母片岩	扁平な體を素材とし、側縁の欠け口を研磨調整 表面1孔・裏面4孔	X	
Q169	凹石	17.8	11.3	4.2	1109.50	安山岩	両側縁に敲打痕、一側縁に抉れ 表・裏面に磨痕状の敲打痕	X	PL23

番号	部 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
B14	牙籤	(1.5)	1.4	0.3	(0.52)	イノシシ犬歯	先端部欠損 周縁を牙状に研磨 一方向から穿孔1か所 表面基部に顕著な研磨痕	KB 2	PL24
B15	牙籤	3.1	2.1	0.4	1.69	イノシシ犬歯	未成品 表面の周縁を牙状に研磨	KB 2	PL24
B16	牙籤	(2.3)	1.4	0.3	(0.88)	イノシシ犬歯	周縁を牙状に研磨 一方向からの穿孔1か所	KB 2	PL24
B17	刺突具	7.6	0.6	0.5	2.84	シカ中手(足)骨	基部溝状の抉り入り 先端部尖頭状に研磨 研磨整形	KB 2①	PL24
B18	刺突具	9.7	0.6	0.5	3.02	シカ中手(足)骨	先端部尖頭状に研磨 研磨整形	KB 2②	PL24
B19	釣り針	2.8	1.5	0.4	1.17	鹿角	無刺式 軸部溝状の抉り入り 研磨整形	KB 2④ 4x	PL24
B20	釣り針	(3.8)	1.5	0.7	(2.06)	鹿角	未成品 表面に溝状の加工痕1か所 裏面に切断痕2か所	KB 2	PL24
B21	牙籤	1.8	1.2	0.2	0.32	イノシシ犬歯	基部に溝状の抉り入り 周縁を牙状に研磨 一方向からの穿孔1か所	KB 2・2x	PL24
B22	釣り針カ	(2.5)	(0.7)	(0.6)	(0.81)	鹿角	釣り針の軸部カ 軸部に溝状の抉り入り 研磨整形	KB 2⑦ 2x	PL24
B25	牙籤	2.2	1.6	0.3	0.82	イノシシ犬歯	周縁部を牙状に研磨 基部に溝状の抉り入り 一方向からの穿孔1か所	KC 1	PL24
B26	牙籤	(2.5)	1.4	0.4	(0.66)	イノシシ犬歯	先端部欠損 周縁部を牙状に研磨 両基一方向から穿孔1か所	KC 1	PL24
B27	頭形 骨角製品	2.0	(1.8)	(1.8)	(1.95)	鹿角	研磨整形 孔径 1.0 ~ 1.4cm	KC 1⑧ 8x	
B28	牙籤	2.5	1.4	0.3	0.71	イノシシ犬歯	周縁部を牙状に研磨 筋状の研磨痕顕著 一方向からの穿孔1か所	KC 2	PL24
B29	刺突具	(6.9)	0.5	0.4	(1.90)	シカ中手(足)骨	両端部欠損 研磨整形	KC 2③ 4x	
B30	髪飾りカ	(7.7)	1.2	0.4	(2.51)	シカ中手(足)骨	頭部に溝状の抉り込み 研磨整形	KD 1④ 8x	PL25
B31	環状骨身 径 1.2 孔径 0.8	0.3	0.24	鹿骨	リング状 丁寧な研磨整形 孔径 0.9cm	KD 1	PL25		
B32	牙籤	(2.9)	(1.4)	0.3	(0.70)	イノシシ犬歯	先端部及び一側縁の一部欠損 周縁部を牙状に研磨 一方向から穿孔1か所	KD 2② 8x	PL24
B34	刺突具	5.5	0.9	0.9	2.57	シカ中手(足)骨	先端部を擬宝珠状に加工 基部茶状 研磨整形	KD 2⑨ 12x	PL24
B35	刺突具	3.7	0.6	0.5	1.05	イノシシ犬歯	基部欠損 先端部尖頭状に研磨	KD 2⑤	PL24
B36	刺突具	2.3	0.5	0.4	0.46	イノシシ犬歯カ	基部欠損 先端部尖頭状に研磨 全面被熱により黒化	KD 2⑩ 15x	
B37	頭形 骨角製品	1.3	(1.9)	(1.2)	(1.06)	鹿角	研磨整形 孔径 0.9 ~ 1.4cm	KD 2	
B38	有孔骨身	6.5	1.9	1.2	5.28	海獣類肋骨	両端部双方向からの穿孔	KD 2⑧ 8x	PL25
B39	垂飾り	2.3	0.6	0.4	0.42	タヌキ左下顎犬歯	基部に反方向からの穿孔	KD 2	PL25
B40	髪飾り	(2.3)	1.2	0.5	(0.81)	シカ骨カ	頭部被熱で加飾 研磨整形 赤彩残存	KD 2	PL25

番号	部 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
S27	管状骨身	4.4	0.7	0.5	1.69	フノガイ類	切断面研磨	KA 2⑤ 1x	PL25
S28	貝輪	4.8	6.3	1.8	16.85	アカガイ	殻頂部付近を欠く 未成品	KB 1⑥ 2x	PL26
S29	貝刃	3.6	4.3	1.2	6.58	ハマダリ	腹縁に連続する剥離痕	KB 2①・②	
S40	貝刃	3.8	4.7	1.2	5.28	ハマダリ	腹縁に連続する剥離痕	KB 2③ 2x	PL25
S41	ヘラ状 貝製品	4.5	7.1	1.5	(21.87)	チョウセン ハマダリ	切断面研磨整形	KB 2① 1x	PL25
S42	ヘラ状 貝製品	2.8	5.5	1.1	14.48	チョウセン ハマダリ	切断面研磨整形	KB 2② 3x	PL25
S43	貝輪	(2.9)	(2.5)	0.9)	(1.74)	ペンケイガイ	研磨整形	KB 2⑥ 1x	
S44	貝輪	(3.8)	6.4	(0.8)	(5.91)	ペンケイガイ	研磨整形	KB 2	PL26
S45	貝刃	3.5	4.2	1.1	5.48	ハマダリ	腹縁に連続する剥離痕	KC 1	
S46	有孔骨身	1.5	1.5	0.4	(0.46)	イモガイ類	表面研磨整形 中央部穿孔	KC 1	PL26
S48	貝刃	3.8	4.8	1.2	7.34	ハマダリ	腹縁に連続する剥離痕	KC 2⑦ 1x	PL25
S49	貝輪	3.9	5.7	1.0	6.00	ペンケイガイ	全面丁寧な研磨整形 両端部に一方向からの穿孔	KC 2③ 4x	PL26
S50	貝刃	4.2	5.3	1.4	7.27	ハマダリ	腹縁に連続する剥離痕	KD 1	PL25
S51	貝輪	(2.5)	(5.1)	(0.8)	(2.86)	ペンケイガイ	表面研磨整形	KD 1	PL26
S52	貝輪	(5.0)	(2.3)	(1.0)	(3.16)	サルボウ属	研磨整形	KD 1	PL26
S53	貝輪	4.4	5.3	1.9	11.96	サトウガイ	殻頂部付近を欠く 表面左手研磨顕著 未成品	KD 1	PL26
S54	貝輪	(3.0)	(5.8)	2.0	(11.35)	サルボウ属	殻頂部付近を欠く 未成品カ	KD 1	PL26
S55	貝刃	3.9	4.8	1.2	6.96	ハマダリ	腹縁に連続する剥離痕	KD 2	PL25
S56	貝刃	5.4	6.9	1.9	23.15	ハマダリ	腹縁に連続する剥離痕	KD 2	
S57	貝刃	4.2	5.4	1.4	9.53	ハマダリ	腹縁に連続する剥離痕	KD 2 トレンチエ	PL25
S58	ヘラ状 貝製品	4.0	6.6	1.5	23.23	チョウセン ハマダリ	切断面研磨整形	KD 2	PL25

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
S59	貝輪	(5.0)	(2.2)	(1.3)	(4.01)	サルボウ属	破断面未加工 未成形カ	KD 2	PL26
S60	貝輪	(2.8)	(4.8)	(0.7)	(3.08)	ペンケイガイ	研磨整形	KD 2・7x	
S61	貝輪	(1.7)	(3.8)	(0.5)	(1.22)	サルボウ属	丁寧な研磨整形	KD 2	
S62	貝輪	(2.9)	(3.0)	(0.6)	(1.87)	サルボウ属	丁寧な研磨整形 切断直	KD 2	
S63	貝輪	(1.3)	(4.6)	(0.4)	(2.30)	サルボウ属	丁寧な研磨整形 全面被熱	KD 2④ 10x	

5) 遺物包含層

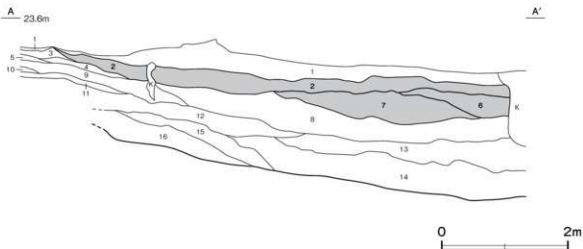
調査B区南東部の斜面部(平成21年度調査区)からは、遺物を多量に含んだ遺物包含層が確認されている。この遺物包含層は、第1号貝層の上位に堆積しており、東部包含層として報告されている(第364集)。本包含層は、位置・地形及び出土土器の時期から東部包含層と同様の時期に形成されたものと判断できるが、廃棄ブロックが認められない点や小形の土器片が多い点などで様相が異なっている。調査区境にある第6号トレンチを境に南部包含層として報告する。

南部包含層(第88・89図・付図)

位置 調査E区のF4j4区からG4a5区、標高22～23mの南に向かう斜面部に位置している。

確認状況と重複関係 第1号貝層の南側から南部の調査区境にかけて、土器片の分布が確認できた。第1号貝層とは近接しており、東部包含層の調査結果から本来重複していた可能性があるが、第1号貝層の土層・貝層からは遺物包含層は確認できなかった。また、谷部にあたる南東部調査区境をトレンチ調査したところ、黒褐色基調の谷への堆積土が2mほどの厚さで堆積しており、その上層に遺物包含層が認められた。この遺物包含層の下位には第18号住居跡が存在している。

包含層の広がりと**堆積状況** 遺物は、南北5.4m、東西3.0mほどの範囲に散布している。16層に分層でき、第2・6・7層が遺物包含層に相当し、特に第6・7層に遺物が多く含まれている。第8層以下は谷の埋没土で、遺物はほとんど含まれていない。第13層以下は粘性が高く、固く締まった層である。第1・3・5・9・10層は、第18号住居跡の推定範囲内を覆う層であり、解説を再録した。これらの層は、谷の傾斜に沿って堆積したものと考えられる。

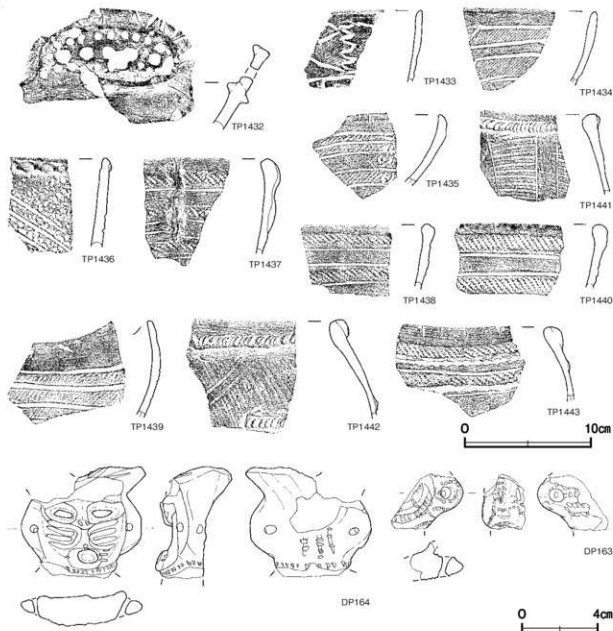


第88図 南部包含層実測図

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10 黒褐色	焼土ブロック少量、炭化物・砂粒微量
2 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量	11 灰黄褐色	砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	12 灰黄褐色	砂粒少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
4 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量	13 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・砂粒・細微塵量(粘性高)
5 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂粒微量	14 褐色	ローム粒子多量、砂粒少量(締まり強)
6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	15 灰黄褐色	砂粒少量(締まり強)
7 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量(粘性高)	16 灰黄褐色	砂粒中量、ローム粒子微量(締まり強)
8 黒褐色	焼土ブロック少量、炭化物・砂粒微量		
9 黒褐色	焼土ブロック中量、炭化物微量		

遺物出土状況 縄文土器片 2,295点 (34,704.7g)、土製品 2点 (土偶)、石器 14点 (磨石 13、敲石 1)、剥片 4点 (チャート 3、黒曜石 1) 点のほか、少量の獣骨が出土している。縄文土器片には 33点 (210.1g) の製塩土器が含まれている。遺物は、第 1 号貝層の南側から谷部にかけて散在しており、本来平成 21 年度調査区と同様に同貝層の上層に堆積した層に含まれていたものと考えられ、原位置をとどめているものは少ない。また層位毎の時期も明らかにできなかった。土器は、後期初頭の称名寺Ⅱ式から後期後葉の安行 2 式土器まで見



第 89 図 南部包含層出土遺物実測図

られるが、称名寺式と堀之内式土器は数点のみで、主体となるのは、加曾利B式から安行1・2式土器である。
所見 平成21年度調査区の東部包含層は、住居跡などの遺構が存在している台地の南斜面部に広がっており、遺物が集中している層は、台地上の施設構築時の掘削土を土器などの遺物とともに廃棄したものと判断されている。今年度の調査区はより集落から遠く、谷底に近い位置にあたり、土器のほとんどが細片で、破断面に磨減が目立つこと、同一の層に複数時期の土器が混在していることなどから、東部包含層を含めた台地上の施設等から、土砂の流入に伴って遺物が集積したことが主な成因と考えられる。時期は、出土土器及び第18号住居跡、第1号貝層との重複関係などから後期中葉から後期後葉にかけて断続的に形成されたものと考えられる。

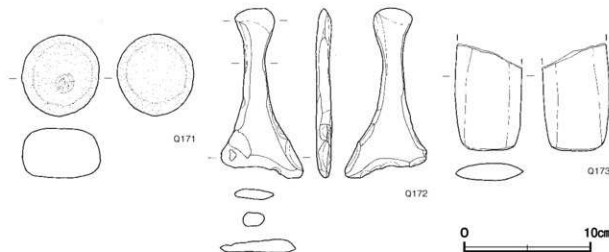
南部包含層出土遺物観察表(第89図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1432	縄文土器	鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい紺	把手部隆帯文→穿孔→口縁部磨き 内面磨き	G 4 a1 区	PL20
TP1433	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄緑	沈線文→区切り文→Lの無筋縄文 内面ナデ	F 4 月 区	
TP1434	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤黒	沈線文→区切り文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	F 4 月 区	
TP1435	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤黒	沈線文→区切り文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面ナデ	G 4 a1 区	
TP1436	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	紺	地縄文→経線文・沈線文 口唇部内面沈線 内面磨き	F 4 月 区	
TP1437	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤黒	胎磨→沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	F 4 月 区	
TP1438	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい紺	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	G 4 a1 区	
TP1439	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄緑	沈線文→LRの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	G 4 a1 区	
TP1440	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒紺	沈線文→RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	F 4 月 区	
TP1441	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい紺	条線文→沈線文・経線文→沈線文間磨き 内面ナデ	F 4 月 区	
TP1442	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤紺	条線文→浅い沈線文間磨き→経線文 内面磨き	G 4 a1 区	
TP1443	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒紺	沈線文→刺突文・RLの単筋縄文→無文部磨き 内面磨き	G 4 a1 区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調・胎土	特徴	出土位置	備考
DP163	土偶	(29)	(38)	(23)	(14.58)	明赤黒 長石・石英・赤色粒子	ミミズク土偶の頭部 隆帯上磨み 連続刺突文	G 4 a1 区	PL22
DP164	土偶	(58)	(66)	(41)	(77.36)	明赤黒 長石・石英・赤色粒子	ミミズク土偶の頭部 沈線文・隆帯上 連続刺突文	G 4 a1 区	PL22

(6) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない縄文時代の遺物のうち、特徴的な遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第90図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土物観察表（第90図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q171	磨石	6.5	6.1	3.9	234.70	安山岩	全面研磨 表表面の研磨顕著 表面に屈曲状の鋭打痕	B区	PL23
Q172	砥石	13.5	6.6	1.2	61.40	砂岩	全面緑砥面 側縁は研削により刃状 研ぎ減りにより微状を呈する	B区	PL23
Q173	砥石	(8.5)	5.4	1.4	(76.80)	砂岩	両側緑砥面 側縁は研削により刃状	B区	

2 中世の遺構

火葬施設

第1号火葬施設（第91図）

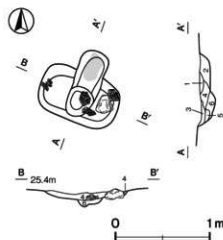
位置 調査B区のF4b5区、標高25mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 軸長78cm、主軸方向N-24°-EのT字状を呈している。

焚き口 北東部に20cmほど突出しており、長さ73cm、幅18～20cm、深さ10～15cmの通気溝に連続している。焚き口は被熱により赤変硬化している。

燃焼部 長さ0.88m、短径0.53mの隅丸長方形である。底面中央部には長径32cm、短径28cmの楕円形の浅い掘り込みがあり、焚き口から連続している通気溝に付随するものと考えられる。

覆土 6層に分層できる。第1・2層に焼土が多く含まれており、特に、第2層に多い。第3～6層はローム粒子・炭化粒子を含んだ黒褐色基調の覆土である。不規則な堆積状況から埋め戻されている。



第91図 第1号火葬施設実測図

土層解説

- | | |
|------------------------------|--------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 4 黒色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 赤褐色 焼土ブロック多量 | 5 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 被熱した礫1点のほか、炭化材と微細な骨片が出土している。礫は、被熱痕のある雲母片岩であり、燃焼部の東壁際底面から出土している。炭化材は燃焼部に散在しており、大きめのものは東半部に偏在している。

所見 形状や骨片・炭化材が出土していることから火葬施設とした。近隣遺跡の類例では、燃焼部に被熱痕が認められるものが多いが、本跡の場合、通気溝の端部の被熱が著しい点で様相が異なり、燃焼方法の相違を反映していると考えられる。また、燃焼部から出土している雲母片岩は、燃焼効率を上げるために据え置かれたものと想定できる。時期判断の指標となる遺物が出土していないため明確ではないが、形状や20mほど北東に位置している中世後半とされている第2号井戸跡（平成21年度調査）との関連などから、時期は中世と考えられる。

第4節 ま と め

本節では、平成21年度までの調査成果を踏まえ、縄文時代後期から晩期の集落景観とともに、特徴的な遺構と遺物を概観しながら、当遺跡の性格について若干の考察を加えまとめたい。

1 集落と斜面貝層の相関と変遷

当遺跡は、平成19年度から平成23年度までの計6次の調査によって、遺跡の西部と南部を中心に調査が進められてきた。遺跡の中央部は未調査区域であり、集落全体の様相はなお不明な点が多い。また、トレンチ試掘によって北部と東部には厚い貝層が形成されていることが分かっているが、保存区域となったため本調査は実施していない。このような限られた情報ではあるが、これまで確認した遺構から集落と斜面貝層の相関と変遷について追ってみたい。なお、時期区分については、各調査時における遺構・貝層のすべてがそれぞれの土器形式に対応して明確に細分されているわけではないため、次の5区分に大別した。

後期初頭 称名寺式期にあたる。調査区北西部（調査C区：平成19年度調査）の台地上で称名寺Ⅱ式期の堅穴住居跡が1軒確認されており¹⁾。当地に人間の生活の営みが刻まれ始めた時期である。調査区域外に集落が広がる可能性もあるが、調査区から出土している該期の土器もごくわずかであることから、単発的であり定住的な集落を形成していたという印象はない。また、斜面貝層も形成されていない。

後期前葉 堀之内式期にあたる。遺構は確認できず、斜面貝層中から土器片が客体的に出土する程度である。調査区北部にあたる調査A区（平成19年度トレンチ調査）で確認した斜面貝層からは、堀之内2式土器が一定量確認されており、A区斜面貝層の堆積開始時期にあたることから、同貝層南側の未調査区に該期の住居が存在していた可能性もある。一方、調査区の谷を挟んだ東側に位置している舌状台地上の中根中谷津遺跡では、堀之内式期の住居跡が10軒（堀之内1式期9軒、堀之内2式期1軒）確認され、台地縁辺に沿って環状に分布する集落が形成されていた。同遺跡の集落は、台地縁辺の斜面部に遺物包含層が形成されている点で当遺跡と類似しているが、土坑内の地点貝塚4か所が点在する程度で斜面貝層は形成されていない²⁾。後期中葉の空期期はあるが、谷津を意識した集落形成がなされていたことが取次き、中根中谷津遺跡から土境旭台遺跡への断続的な集落の移動が想定できる。

後期中葉 加曾利B式期にあたる。遺物の出土数は増加するが、堅穴住居跡をはじめとする遺構は確認されていない。しかし、前述した調査A区で確認した斜面貝層からは該期の土器が多量に出土していることや客体的ながら今回調査した第2号貝層からも出土していることは看過できない。中根中谷津遺跡の第8号遺物包含層から土器片のうち約16%が加曾利B式土器であることも勘案すると、現段階では調査区域外に該期集落が展開していた可能性を示唆しておきたい。調査区南部の南斜面において、第1号貝層の形成が本格的に始まるのはこの時期であるが、同貝層から出土している当期の土器は客体的である。

後期後葉 曾谷式から安行1・2式期にあたる。遺構数が急増し、集落の盛期となる。これまで確認した住居跡18軒のうち10軒がこの時期に帰属している。住居跡は調査区南部にあたる調査B区の標高23～26mの南斜面部に集中している。調査区全体ではほぼ中央部にあたる調査B区東部の台地上には、遺構が検出されない区域があり、その中央部にはピット群が形成されている。ピット群の性格や時期を判断する材料は乏しいが、出土している土器片のほとんどが後期中葉から後葉のものであり、第171号ピットの覆土中層から出土している石剣の特徴などから、おおむねこの時期に帰属するものと考えられる。また、ピット群の周辺は遺構の空白

区域となっており、隣接する中根中谷津遺跡と同様にいわゆる「中央広場」を意識した占地が想定できる。さらに、後述する同位置での住居の建て替えが盛行していることや住居跡が密集していることから、集落の占地に一定の規制がはたらいており、後期後葉から晩期を通じて略馬蹄形の集落形態が維持されていたことが想定される。なお、後・晩期に見られる環状盛土や中央凹地は、現地形や平成19年度のトレンチ調査でも確認できなかった。また、当期の住居や土坑の廃絶後の窪地に貝の投棄が行われ、北側から第2号貝層が形成され始め、安行2式期に盛期を迎える。第1号貝層については、時期別の土器組成を見ると、判別可能土器の約51%がこの時期のもので、同貝層の主たる形成期にあたる。同貝層の形成主体は、斜面上位にあたる北側に存在している住居の居住者であったと想定される。

晩期前葉～中葉 安行3aから安行3d式期にあたる。住居跡は晩期前葉が2軒、晩期中葉が1軒でいずれも台地縁辺の斜面部に位置している。晩期になると遺構の低地への進出がより顕著になることが一般的に指摘されているが、当遺跡でも同様の傾向が認められる。未調査区域に遺構が存在している可能性もあるが、概して集落規模は縮小している。一方で、第2号貝層の調査区中央部（今年度調査区の南部）では、層厚が最大50cmほどの貝層が確認されており、これは主に後期後葉の安行2式期から当期の安行3b式期にかけて堆積した貝層である。貝層の形成主体は、これまでに確認したより低位に存在する住居の居住者であることは考えられず、台地上の未調査区域に当期の居住域があったことを想定せざるをえない。2か所の斜面貝層（第1・2号貝層）の最上層が堆積し、この時期をもって、斜面貝層を伴う上境旭台の集落は終焉を迎える。

2 竪穴住居跡について

今回の調査では、縄文時代後期後葉の住居跡7軒を確認した。前年度までの調査を含めると、縄文時代の住居跡は計18軒を確認している。平成21年度調査区を報告した第364集では、住居構造の分析を通して、後期後葉の住居跡が円形で5～6か所の主柱穴を配するものが主体であることが指摘されている³⁾。今回の調査で確認した住居跡は、円形のもの3軒、方形もしくは長方形のもの4軒で、当遺跡の後期後葉においては、長方形のものも典型から外れるものではないことが分かり、住居形状の相違は時期差や地域差だけでは説明できない。円形の住居跡のうち2軒（第17A・17B号住居跡）、長方形の住居跡のうち3軒（第19A・19B・19C号住居跡）は、ほぼ同位置で建て替えられている点で特徴的な住居跡である。このような住居の反復利用は、晩期中葉の帰属ではあるが、平成21年度調査の第3・4号住居跡でも確認されており、当遺跡の後・晩期の住居跡においては例外的なものではない。

後期後葉（曾谷式～安行1式期）に比定できる第17A・17B号住居跡は、ほぼ同形・同規模で、下位に存在する第17A号住居の廃絶後、埋め戻して第17B号住居が構築されており、住居の反復利用の好例となる。第17A号住居跡の覆土に自然堆積層が見られなかったことや出土土器に時期差が認められなかったことなどから、両住居の間に断絶期間はなかったものと思われる。したがって、第17A号住居の埋め戻しが即第17B号住居の床構築行為であり、そこからは住居の継続利用が想定される。両住居跡の構造を比較すると、先行する第17A号住居跡が「主柱穴（6か所）・密に巡る壁柱穴・出入口（南側・屋内外）」であるのに対して、後続する第17B号住居跡は「主柱穴（6か所）・疎らに巡る壁柱穴・出入口（東側・屋外）」という点で相違が見られる。これまで言われているように、住居構造（住居系統）の違いがそれらを用いている集団の違いを反映しているとすれば、当遺跡で見られる事象には矛盾が残る。また、主柱穴については、両住居で共有している可能性が高い。このような住居の継続利用は、狼島郡境町本田遺跡第4号住居跡などに類例を求めることができ、件の第17A・17B号住居跡と同時期の曾谷式から安行1式（中段階）までの比較的短期間に3回

の反復利用があったことが報告されている⁴⁾。本田遺跡第4号住居跡例では、位置と規模を変更していない点や出入口の位置を変えている点などで第17A・17B号住居跡との共通点が見いだせ、特に主柱穴を共有している点に注目したい。小川岳人氏が述べているように、後期後葉に盛行する住居の反復利用の目的は、住居の継続の有無あるいはその長短を問わず、先行する住居の堅穴と構造材（柱穴、出入口など）の再利用にあったとするならば⁵⁾、拡張だけでなく、前述した当遺跡の第3・4号住居跡例のように規模を縮小している事例があることも首肯できる。

また、第17B号住居跡の床面からは、壁に沿って環状に巡る焼土層が確認できた。同様の例は、第18号住居跡や第19A・19B・19C号住居跡、本田遺跡の第17A・19A・23A号住居跡でも見られ、関東地方における縄文時代後・晩期の住居跡に散見できる。本田遺跡例では、環状の焼土層は覆土下層で確認されており、住居焼失によるものではなく、住居の廃絶時に廃棄されたか住居の廃絶に伴う何らかの儀礼的な行為によるものと推察している⁶⁾。当遺跡第17A号住居跡の場合、先行する住居跡の埋め戻し土（＝床構築土）に6～15cmの厚層で充填されている状態であること、焼土層中に被熱したヤマトシジミ片が多く含まれていることなどから、廃絶後の行為というよりも、構築時の地業の一つと考えてよいのではないだろうか。これは、調査区南部に位置している第18号住居跡で確認した環状の焼土層上面に、敷物の痕跡と考えられる網代状の圧痕が残っていたことも傍証となる。

住居の反復利用のもう一つの例として、第2号貝層下から検出した第19A・19B・19C号住居跡が挙げられる。本跡は、北壁をほぼ共有し、南西方向に短期間のうちに2回にわたって拡張された住居跡であることが分かった。時期は後期後葉で、第17A・17B号住居跡よりも若干古相の土器が目立ち、やや先行する。平成21年度に南部の約3分の1について焼土層確認までの調査を実施しており、その時点では、焼土層中に灰が含まれていること、「火床面」・灰層の面が3面以上あること、焼土中から出土した土器や石器、自然遺物の中に二次焼成の痕跡が見られるものがあつたことなどから、この場所で3回以上の焼成行為が行われたものと推測され、「第2号焼成遺構」と呼称するとともに、製塩土器の出土量の多さから製塩活動に関わる炉の可能性があると報告されている⁷⁾。今回の調査で、「第2号焼成遺構」の北部を調査したところ、同様の灰層と焼土層が面的に連続していることが分かり、方形もしくは長方形の掘り込み及び炉跡を確認できたことから、堅穴住居跡であると判断した。中位に存在している第19B号住居跡と上位の第19C号住居跡は、壁際に焼土層が若干の高まりをもって巡り、床面には上層から黄灰色層（灰層）・赤褐色層（焼土層）・黒色層（炭化物層）の順で整然と堆積している点に大きな特徴がある。科学分析によると、黄灰色の灰層には貝類や獣骨類を粉砕したことを示す成分が含まれており、これらに水を加えて粘土生成あるいは消石灰化することによって硬化する床材を生成していた可能性が示されている。後期初頭と時期は遡る例ではあるが、千葉県千葉市大膳野南貝塚の住居跡の炉跡及び床面で確認された消石灰を主成分とした「漆喰」と科学的な組成で類似した状況が見いだせる⁸⁾。本跡の場合、明確に「漆喰」とは言えないものの、意図的に貼床されたことには疑義はなく、今後の調査・研究を待って再考する必要がある。なお、科学分析結果の詳細については、付章2を参照されたい。

さらに、第19C号住居跡の床面黄灰色層の上面から、部分的にはあるが、網代状炭化物が出土していることも特筆される。当炭化物の樹種は、イネ科タケ亜科という同定結果を得ており、同植物を縦横に編み込んだものである。編み込みの単位はおおむね1cmほどで、断片的な検出であったために本来の大きさ（面積）は不明であるが、最も遺存していた部分では縦横1mの範囲で確認することができた。壁材や何らかの生産に関わる道具の可能性もあるが、前述した第18号住居跡に見られる網代状の圧痕と編み込みの単位が一致していることなどから、床面の敷物であった蓋然性が高い。さらに言えば、網代が炭化材として遺存する状況は、先

に述べたような住居の廃絶時における「火入れ行為」が行われているとすれば、説明できない。これは、本跡が「焼成遺構」ではなく、住居跡と判断した一つの根拠にもなっている。

縄文時代後・晩期の住居跡には、栃木県栃木市藤岡神社遺跡や群馬県榛東村茅野遺跡のように、床面から焼土が面的に検出される例が散見でき、焼土層が防湿などの目的で居住施設の一部として機能していたとする説もある⁹⁾。当遺跡で焼土層上に網代状の圧痕と炭化物が確認できた住居跡2例は、台地縁辺の斜面部に位置しているという共通点が見いだせ、焼土層が防湿の目的であったことを示唆する事例の一つになるであろう。網代状の炭化物や圧痕、環状に巡る焼土層については、地域的な偏差や施設の性格や立地など様々な要因によって成因や目的が異なっていると考えられ、一概には判断できないことを付け加えておきたい¹⁰⁾。

3 出土遺物について

(1) 土器

今回の調査区で出土した土器は、第2号貝層中から出土しているものが圧倒的に多く、総点数は29,937点、重量にして451,644gに及んでいる。後期初頭称名寺式期から晩期中葉安行3d式期までの土器が見られるが、後期初頭・前葉と晩期中葉の土器はごくわずかで、主体となるのは安行1式から安行3b式土器であり、特に安行2式土器の割合が高く、第364集での分析結果と同様の傾向が見られた。また、いわゆる製塩土器の出土量が多いことも当遺跡の特徴のひとつである。製塩土器は、第2号貝層の南部遺物集中ブロックからその多くが出土しており、いずれも破片の状態での点数は1,585点(19,615.3g)に及んでいる。これまでの調査と合わせると実に4,500点を超えることになる。しかし、専門的な製塩遺跡とされる美浦村法堂遺跡のような顕著なまとまりはなく、南部遺物集中ブロック内に平面位置・層位ともに一定せずに散在している出土状況であった。調査区からは製塩炉は確認されておらず、当地で製塩活動が行われていたという積極的な見解をだすことはできない。ここでは、これまでの調査で確認されていなかった、手燭形土器に絞って若干の検討をしたい。

手燭形土器 今回の調査で、手燭形土器は2点出土している。手燭形土器は、後期後葉から晩期前半にみられる土器で、後期中葉加曾利B2式期に出現する異形台付土器から後期後葉に分化し、晩期前葉安行3a式期に独特な器形が完成するとされる土器である¹¹⁾。分布域は関東地方、特に利根川中流域から東京湾東岸域に中心があり、茨城県域では霞ヶ浦の南西地域を主にこれまで8遺跡15例が報告されている。当遺跡から出土した2点は、ともに第2号貝層の南部遺物集中ブロックから出土している。各資料について観察したい。335は、第19C号住居跡廃絶後の整地層と貝層の境界付近の層位から出土しているもので、台部の裝飾の一部と把手部を欠く資料である。口唇部には、中央部に向けた4単位の突起を配し、渦巻状の沈線で加飾している。器部外面は、横位の沈線区画を巡らし、沈線文間にLRの単節縄文と刺突文を施文している。上位の沈線文間の無文部は丁寧な磨きが施され、4単位の孔が穿たれている。台部には突出した裝飾部が見られその端部に刻みを施している。底面にはあたかもミミズク土偶の背面や土版を思わせる沈線による入組文が施文され、LRの単節縄文施文後、無文部を磨いている。一方、325は残存率が低く台部以外はほとんど遺存していない。器部下端には外面からヘラ状の工具によるものと思われる横長の孔が1か所穿たれているほか、破断面の観察から3~4か所の穿孔があったことが分かる。器部下端から台部にかけては集合沈線で文様を描出している。台部は335と同様に先端に刻みを施した突出する裝飾部があり、底面は沈線文とヘラ状の工具による刺突文が施されている。赤彩が残存しており、底部において顕著である。時期は、出土層位や文様の特徴から、安行2~3a式期と幅をもたせてとらえておきたい。

手燻形土器の用途については、油脂・絵具類を収める容器や佩用品¹²⁾、据え置きタイプの異形台付土器から片手で持てるように形態と用法が変わった香炉のように煙をくゆらす道具¹³⁾など諸説がある。その中で、千葉県市原市能満上小貝塚の手燻形土器の出土状況から、住居廃絶後の窪地において、手燻形土器と土製円盤、破片の土偶などが、獣を焼く行為とともに使用されていたのではないかという吹野富美夫氏による推察¹⁴⁾は示唆に富んでいる。当遺跡での出土状況は、能満上小貝塚のように土製円盤や土偶片との共存こそないが、出土地点が第19 C号住居跡の廃絶後のくぼ地であること、出土地点付近からは焼骨や焼土が確認できることなどの点で共通点が認められる。また、ミニチュア土器などの祭祀具の出土も手燻形土器の周辺に集中していることから、「送り」などの何らかの儀礼的な行為が行われていた可能性がある。なお、2点の資料には煤は付着しておらず、その用途の詳細については不明と言わざるを得ない。

(2) 土製品

土製品は75点出土している。うち土偶が18点、耳飾り・耳栓が28点で約61%を占めている。一方、霞ヶ浦沿岸域の貝塚で多出土することが多い土器片鏝は、4点しか出土していない。時期的・地理的要因もあろうが、石鏝の些少さとも関連して、当遺跡では漁網を用いた漁労活動は不活発であったことが推測できる。以下、いわゆる「第二の道具」のうち、出土量の多かった土偶と耳飾りについて概観する。

土偶 18点出土し、うち10点が第2号貝層から出土している。これまでの調査を含めると87点に及び県内では土偶の多出遺跡の一つに数えられる。18点の種類別内訳は、ハート形土偶♂1点、山形土偶♂8点、ミミズク土偶♀9点、出土遺構別内訳は住居跡2点、土坑2点、第1号貝層2点、第2号貝層10点、南部包含層2点である。最も多く土偶が出土している第2号貝層では、土偶の出土位置に2か所のまとまりが認められる。すなわち北部遺物集中ブロックと南部遺物集中ブロックであり、両ブロックともより高所にあたる北部から出土している傾向が見られ、廃棄場所に一定の規制があったことがうかがえる。また、北部遺物集中ブロックが山形土偶、南部遺物集中ブロックがミミズク土偶が主体であることから、前述した貝層形成の時期差を追認することができるだろう。多数の土偶の中で、Q135のミミズク土偶は白眉である。頭頂の装飾部の端部を欠いているが、ほぼ完形で南部遺物集中ブロック上層の混貝土層中から出土した資料である。本文中で述べたとおり、周囲に掘り込みは確認できず、埋納されたような状況は認められず、土偶を介した儀礼的な行為の後、廃棄されたものと考えられる。顔面は、刻みを有する隆帯で輪郭・目・耳を表現し、口は沈線文を用いている。これまで当遺跡で出土しているミミズク土偶と異なり、連続刺突文を用いていないのも特徴の一つである。眉と鼻の表現は安行2式でみられる「ハート形眉鼻」と安行3a式でみられる「T字形独立眉鼻」の中間的な形態を示している。胸部から胴部は、沈線と充填縄文で主文様を描出し、肩から乳房にかけて連続して隆帯により表現され、突出した臍文を付しているのも特徴である。さらに頭頂部や顔の一部には、赤彩が残存している。背面には横位の沈線間に縄文を充填する晩期前葉によく見られる土板の文様構成・手法と類似点が見いだせる。共存している土器や上述した特色から、時期は後期前葉の安行2式期から晩期前葉の安行2a式期と幅をもたせてとらえておきたい。

特徴的な出土状況を示している資料が、DP110の山形土偶である。この土偶は、第17 B号住居跡の炉跡から出土したもので、炉床面から12cmほど層厚で堆積した灰層に埋められた状態で出土している点に注目したい。土偶の全面に灰が付着していることから、意図的に廃棄され灰で埋められたものであることは明らかである。想像をたくましくするならば、灰に内包される「再生」の意味合いや白という色に対する縄文人の特別な思いが想起され、住居廃絶時における何らかの儀礼的な行為の結果と理解しておきたい。後期前葉

における土偶祭祀の在り様を考える上での好例となるだろう。

耳飾り 27点出土し、うち24点が第2号貝層から出土している。これまでの調査を含めると59点である。今回の調査で出土した土製耳飾りは、第2号貝層の中でも南部遺物集中ブロックからまとまって出土している。設楽博己氏による土製耳飾りの類型分類により¹⁵⁾、本文中で図示した第2号貝層出土資料を見ると、環状で厚手に作られるⅡ類が2点(DP133・DP155)、環状で薄手に作られるⅣ類が4点(DP132・DP134・DP154・DP156)、極めて薄手に作られるⅤ類が5点(DP142・DP146・DP147・DP153・DP157)、その他3点(DP125・DP126・DP141)である。ここでは、環状を呈するⅡ・Ⅳ・Ⅴ類が全て南部遺物集中ブロックから出土していることに留意したい。これらの資料は形態から安行2～3b式期に比定され、共存している土器の時期とも齟齬はない。一集落で同一の類型のものが重複して製作・使用されるのがこの時期の特徴であることはすでに指摘されており¹⁶⁾、後期後葉から晩期前葉に、耳飾りが集落内の儀礼的な行為の中で普遍化していったことを反映していると言えるだろう。また、土偶の出土位置とはほぼ一致していることもこの事象と無関係ではないと考えられる。一方、その他として類型化した環状を呈さない資料は、いずれも北部遺物集中ブロックからの出土で、時期差を反映していると思われる。DP125・DP126は、無文で筒状を呈するタイプで、形状も酷似していることやほぼ同位置からの出土であることなどから、対になる資料かもしれない。なお、同じく北部遺物集中ブロックから出土しているDP141は、いわゆる耳栓と呼称される資料である。

(3) 石器・石製品

当遺跡の石器の出土量は多くない。磨石は一定量みられるが、石鏃、石斧類は縄文時代の遺跡としては非常に少ないのが特徴的である。特に狩猟具である石鏃の出土点数は、今回の調査で6点、これまでの調査分を合わせても20点に過ぎない。石鏃出土数の多寡については、前期の例であるが、同一地域内でも石鏃が多出する遺跡と、ほとんど出土しない遺跡があることについて、龍ヶ崎ニュータウン内の遺跡の検討から指摘されている¹⁷⁾。また、石鏃出土数の多寡が、単に集落における石鏃の保有、狩猟活動の活発・不活発だけでなく、原材料の入手、石鏃の製作、狩猟活動の組織、狩りの執行等の活動の有無に関わるものであった可能性が高いとの考えも示されている¹⁸⁾。当遺跡の石鏃出土数の些少さは、剥片類が少ないことからも追認できる。反面、イノシシやシカを主体とした狩猟対象哺乳類が非常に多く出土しており、西本豊弘氏によれば、平成21年度調査区から出土した大形哺乳類の最小個体数は、イノシシ102個体、シカ43個体を数える¹⁹⁾など、獣骨多出貝塚といえる。もちろん狩猟の方法は弓矢による射撃に限定されるものではないが、陥し穴などの他の狩猟方法の痕跡がない当遺跡にあっては、石鏃の出土数の少なさに矛盾が残る。石鏃に代わる刺突用の狩猟具の存在が予察される中で、牙鏃と呼ばれるイノシシ犬歯製の鏃が一定量出土していることには注意しておきたい。

砥石 上述したように石器の出土数が少ない当遺跡にあって、砥石が12点出土していることは注目できる。これまでの調査での出土数を合わせると28点に達する。これらの砥石の用途を明確にすることは難しいが、縁部が磨滅し、断面形が刃状になっている資料が目立つことに気付く。その中にはQ136やQ172のように撥状を呈するものもある。両資料の形状は、両側縁を砥面とし、弧状あるいは環状の形態のものをつくりだすことを志向した結果と思われる。貝輪をはじめとする貝製品、もしくは骨角歯牙製品の製作に関わる道具と想定できる。また、Q148・Q161は、砥面が溝状に凹む資料である。このうち第2号貝層の南部にあたる遺物集中ブロックから出土しているQ148は、小形の砂岩礫を素材とし、周縁部に不規則な溝状の擦り面がみ

られ、アメーバ状を呈した「立体有溝砥石」である²⁰。この貝輪の研磨工程で使用された砥石は、千葉県銚子市余山貝塚、同船橋市金堀台貝塚、同千葉市六通貝塚のほか、近隣では土浦市上高津貝塚からも出土している。貝輪の主な素材となっているベンケイガイやフネガイ科の生息地から離れた内陸部に位置している当遺跡から貝輪製作、しかもその最終工程で使用される砥石が出土していることは特筆される。阿部芳郎氏は、後・晩期における貝輪生産は、余山貝塚を頂点とした貝輪の生産流通システムと自給的な貝輪生産システムが二重の構造をもって存在し、需要を満たしていたことを指摘し、内陸部であっても自給的な貝輪生産が行われていたことを予察している。あわせて、「この仮説を決定づけるのは、内陸遺跡における貝輪素材と未成品、そして貝輪製作にかかわる道具類の出土である」と述べている²¹。この視点で当遺跡における貝輪製作環境を概観すると、①「立体有溝砥石」の存在、②貝輪素材である未加工のベンケイガイの出土、③殻頂部を敲打した段階の貝輪未成品の出土（S38・S53）などの点から、当地で貝輪生産が行われていたことは十分に想定できる。明確に敲打具と認められる石器は出土していないが、Q107の欠損した石棒の一端には敲打痕が認められることから、貝輪製作に使用された可能性もある。あるいは鹿角などを使用したのかもしれない。いずれにしても、内陸部における貝輪生産を考察するうえで、有効な事例と言えそうである。

(4) 骨角歯牙製品

34点出土している。うち24点が第2号貝層の遺物集中ブロックから出土しており、大部分が貝層の水洗選別中に抽出できたものである。狩猟具の割合が高く、刺突具11点、牙籤8点（未成品1点含む）、釣り針3点（未成品1点含む）、弧形骨角製品4点で、狩猟具だけで全体の約76%を占めている。装身具では、垂飾り2点、髪飾り3点、環状装身具1点、有孔装身具1点、不明1点が出土している。これら骨角歯牙製品の出土数は決して多くはないが、貝層すべてを水洗選別したことが奏功し、これまでの調査で確認できなかった牙籤や釣り針を確認できたことは、大きな成果であった。牙籤と釣り針には、それぞれ1点の未成品が含まれており、当地で製品の製作が行われていたことを物語っている。刺突具は、シカの中手骨あるいは中足骨を素材とし、茎を有するものと茎を有さず直線状で長さがあるものの2種類がある。このうち茎を有するB9・B11・B34などは銛の可能性もある。装身具では、海獣類の指骨を素材としたB38の有孔装身具が注意を引く。ここでは、今回の調査で初めて確認できた牙籤を主に解説したい。

牙籤 イノシシ下顎大歯を素材とし、丁寧な研磨整形によって鋭利な刃部が作出された籤である。中央線上の基部付近に小孔が穿たれ、鑄が形成されている点に特徴がある。いずれも無茎で、基部の形状は、①浅い弧状を呈するもの（B14・B16・B28）、②中央部に1か所の挟り入りを設けるもの（B25・B26・B32）、2か所の挟り入りを設けるもの（B21）に分類可能である。②のタイプのうち、B25のように底辺の2隅を斜切し「W」字状に成形しているものは、土浦市上高津貝塚でまとまって出土しており、霞ヶ浦周辺地域での定形的な形態であると予察されている²²。また、東茨城郡大洗町大貫落南貝塚で出土している8点のうち4点がこのタイプである²³。B25は後期後葉（安行1式期）を主体とした北部遺物集中ブロックから出土しているが、上高津貝塚や大貫落南貝塚が後期前葉から中葉が主たる時期であるとともに、牙籤多出遺跡の一つである千葉県市原市西広貝塚の同タイプの牙籤が後期中葉掘之内式期の資料であることを勘案すると、他のタイプも含め当遺跡出土牙籤の時期による形態変化を追うことは難しい。その中で①に属するB28のように、五角形を呈し、明瞭な鑄を作出して精緻に整形されている資料は、西広貝塚でも出土しており、後期後葉の安行1・2式期に位置付けられている点は留意しておきたい²⁴。牙籤は、常総台地に特徴的な文化であり、これはイノシシの入手が容易であった反面、石籤製作のための石材入手が困難であったことな

どが背景にあると思われる。敷衍すれば、石礫に比べて加工も容易であった牙礫は、石礫の不足を補完する道具だったと言えるのかもしれない。

(5) 貝製品

貝輪 19点出土しており、その多くが貝層の水洗選別時に抽出できたものである。素材別に見ると、フネガイ科が10点（サルボウ属8点²⁵⁾、アカガイ1点、サトウガイ1点）、ベンケイガイが5点、オオツツノハが3点、不明1であり、平成23年度報告（第364集）の傾向と同様にフネガイ科・ベンケイガイが優位を占めている。サルボウ製のS53など、殻頂部を敲打する段階の未成品や内縁部の研磨段階で使用される「立体有溝砥石」の存在からも当地での貝輪製作が想定できるが、出土数は決して多いとは言えない。今回の調査では、これまで出土していなかったオオツツノハ製の貝輪が3点出土していることが特筆できる。これは今回の調査で出土した貝輪の15.7%（平成19年度からの調査での総数との比は5.8%）にあたり、縄文時代の一遺跡の出土数では最大である市原市西広貝塚が15点で全貝輪数の3%に過ぎないこと勘案すると、当遺跡の出土数は特異と言えそうである。以下、オオツツノハ製貝輪について概観する。

第17B号住居跡出土のS27と第1号貝層出土のS35は、両端部に穿孔がなされ、破断面は研磨整形されているが、第19C号住居跡出土のS28は穿孔及び破断面の研磨はされていない。この違いは貝輪のタイプの差であるのか補修後の再使用の有無によるのかは判然としなが、他の素材の貝輪に穿孔されたものがほとんど見られないことから、貴重品ゆへの補修の結果と考えておきたい。3点のオオツツノハ製貝輪の長さ（現存値）は、S27が88mm、S28が85mm、S35が88mmで、完形品であればさらに殻長があったと思われる。これまで県内で出土した縄文時代後期のオオツツノハ製貝輪は、五霞町冬木A貝塚の14点、日立市南高野貝塚の7点などが挙げられ、これらの殻長は冬木A貝塚で61～75mm、南高野貝塚で61～85mmである。忍澤成視氏によれば、全国の縄文時代の遺跡から出土した計測可能なオオツツノハ製貝輪の平均殻長は82mmであり³⁰⁾、これと比較しても当遺跡から出土した貝輪は大形の資料である。また、冬木A貝塚、南高野貝塚出土の資料は、ともに後期前葉（堀之内1式期）の所産であるが、前者が土器内からの出土、後者が人骨と共伴している点で特殊性が認められる。当遺跡の資料3点のうち2点が住居跡床面からの出土であることは、これら2遺跡と同様に何らかの儀礼的な意思が働いていることを示唆している。

貝刃 13点出土している。いずれも第1・2号貝層の水洗選別時に抽出したものであり、自然の営みによる腹縁部の欠けと判別が困難なものもあり、腹縁に連続した押圧剥離痕が明瞭に認められるものを貝刃として取り上げた。素材はチョウセンハマグリが1点で、残る12点はいずれもハマグリ製である。これまでの統計によると、素材としたハマグリは殻長60～90mmのものが多く、未加工の殻よりも大きい傾向があることが指摘されているが²⁷⁾、当遺跡の資料は42～69mmで、平均値は49.6mmと概して小形である。未加工の殻と比して殻長の差異やサイズの規格性は認められず、特に素材を取捨選択したとは考えにくい。1点だけ確認したチョウセンハマグリ製の資料は、腹縁部の押圧剥離痕が3か所だけにある点でハマグリ製のものとは異なっている。これが使用目的の相違を表しているのか未成品であるのかなどについては明確でないが、入手が容易な日常の食料残渣を素材としたハマグリばかりでなく、搬入品であるチョウセンハマグリも貝刃の素材として利用していることは注目される。

ヘラ状貝製品 6点出土しており、第2号貝層の水洗選別時に抽出できたものである。いずれもチョウセンハマグリ製で、腹縁から必要幅を残しておおむね成長線に沿って打ち欠き、後縁を切断した後、舌状に研磨整形したものである。チョウセンハマグリは、主に鹿島灘以南の潮間帯から水深20m程度の砂泥底に生息

する二枚貝である。当遺跡の貝層からは、未加工のチョウセンハマグリは1点も出土していないことから、搬入品であることは明らかであり、道具として使用する目的意識を認めることができる。いずれも腹縁に顕著な研磨痕が見られる。S41は他の5点と形状が異なり、内縁の打ち欠き後の研磨がなされていない。これは、取手市中妻貝塚出土のチョウセンハマグリ製と思われるヘラ状貝製品に類例をみる。この形状の違いについては使途の違いではなく、前掲書で堀越正行氏が述べているように研磨と打製の加工法の違いによるものと理解したい³⁰。一方、近年の研究で、ヘラ状貝製品は自然の営為によって「チョウセンハマグリ特有の殻の分厚さゆえに結果的に残った、海岸部に打ち上げられる個体の最終段階の形状を示している」との見解もある³⁰。当遺跡出土のヘラ状貝製品のうち、S42・S58は全周縁が磨滅していることから自然営為による摩耗の可能性もあるが、生息地から遠い内陸部で出土していることは、人為的な遺物と見做すことが妥当と考える。県内における縄文時代後期の遺跡から出土したチョウセンハマグリ製ヘラ状貝製品は、管見の限りでは大洗町落神南貝塚の14点、取手市中妻貝塚の2点、上高津貝塚の1点などで出土例は少ない。当遺跡から出土したヘラ状貝製品は、その用途や流通経路等を考える一助となるだろう。

4 小結

平成19年度から6次にわたる調査を通して、漸次ながら集落の全体像や性格が明らかになってきた。今回のまとめでは、これまでの調査で確認されていなかった、あるいは紹介されていなかった特殊な遺構や遺物に焦点をあてて記載した。そこから読み取れることをもとに、当遺跡の性格について考えられることを書き留めて小結とした。

まずは、多様な遺物が出土していることが挙げられる。特に、オオツタノハ製の貝輪が3点出土していることは特筆できる。オオツタノハ以外でもベンケイガイやチョウセンハマグリといった搬入貝が出土していることから貝輪の生産・流通システムの一部を担う遺跡であったことが想定できる。これまで言われているように、土偶や耳飾りといった儀礼的な行為に関わる「第二の道具」の出土量の多さも拠点的な集落であることの傍証になると思われる。また、イノシシを主体とした獣骨の出土量の多さは、単に集落内の自給のみに限定されたものではない可能性が高い³⁰。内陸部と沿岸部の接合にあたるという地理的環境が、水産資源と内陸部の資源の双方が集積された遺跡とならしたのだろう。製塩については、具体的な姿こそ見えなかったが、江原美奈子氏の言うように、製塩工程の「煎熬」作業でなく、「焼き塩」が持ち運ばれた塩を加工に用いた製塩活動が行われていた可能性³⁰も視野に入れておかなければならない。いずれにしても、製塩土器が多量に出土している事実は、塩の消費・流通システムのなかに組み込まれていた内陸部の集落として認識される。

以上のことなどから、上境旭台貝塚は、沿岸部と内陸部を結ぶ交易の要としての位置付けが可能な貴重な事例になると考えられる。

註

- 1) 柴山正広・須賀川正一・小野政美・小川貴行・越川欣和「上境旭台貝塚 中根・金田台特定地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第325集 2009年3月
- 2) 荒井克一郎「中根中谷津遺跡2 中根・金田台特定地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第367集 2013年3月
- 3) 江原美奈子「上境旭台貝塚2 中根・金田台特定地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第364集 2012年3月
- 4) 江原美奈子・大岡武「本田遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第313集 2009年3月
- 5) 小川岳人『未完成考古学叢書3 縄文時代の生業と集落—古奥東京湾沿岸の社会—』株式会社ミューゼ 2011年5月

- 6) a 註3)と同じ。
 b 山本輝久「縄文時代終末期の集落」『神奈川考古』第25号 1989年
 同氏は、当論文で、後期以降の堅穴住居跡床面から検出される多量の焼土層については、住居跡を廃絶するにあたっての儀礼としての「火入れ行為」と関係するものととらえている。
- 7) 註3)と同じ。
- 8) 玉川文化財研究所「国内最古の漆喰を発見～4000年前、縄文後期の住居跡から～」『建材フォーラム』№478 2012年4月ほか
 2013年現在報告書が未刊行であるため詳細は不明であるが、調査担当者の戸田哲也氏は、「縄文人が意図的に道具として漆喰を使用していたということ。住居放棄の儀式として知を塞ぐ目的で使用されたり、村長などの高い地位の人物やシャーマンなど特別な地位の人々の住居床として使用されたのではないかと述べている。
- 9) 手塚達也「焼土遺構について～藤岡神社遺跡の例を中心として～」『研究紀要』第6号 財団法人栃木県文化財振興事業団 縄文文化財センター 1998年3月
- 10) 塩谷修編「国指定史跡 上高津貝塚E地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告書-」土浦市教育委員会 2000年3月
 上高津貝塚E地点の2号建物跡は、焼失建物で掘り込みを有さない平地式建物と判断されているなどの点で相違点もあるが、時期（安行1式期）や長方形を呈する形状、壁際に焼土が溢ることや焼土中に被熱した獣骨が出土しているなどの点で、上境旭台貝塚第19B・19C号住居跡との類似点が多い。時期は晩期になるが、2号建物跡に隣接して製塩に関わる大形印が確認されていることも留意しておきたい。さらに、第19A・19B・19C号住居跡は特異な形態であることに加え、廃絶後に埋め戻し、整地した後に貝層が形成されているという特殊性も加味して考えると、特殊な性格をもった建物であった可能性もある。
- 11) 峰孝之「手嶋形土器」『能覧縄文土器』株式会社アム・プロモーション 2008年6月
- 12) 小林謙一「手嶋形土製品について」『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要』Ⅱ 1983年2月
- 13) 福越正行「柄杓形土製品」『史観』33号 2004年
- 14) 吹野富美夫「手嶋形土製品覚書」『新世紀の考古学』纂修堂 2003年5月
- 15) 設楽博己「土製耳環」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』1995年3月
- 16) 註15)と同じ。
- 17) 中村哲也「生産活動と遺跡群」『季刊考古学』第55号 1996年5月
- 18) 阿部芳郎「狩猟具としての石器-縄文時代における石製の集団保有と狩猟活動-」『季刊考古学』第35号 1991年5月
- 19) 西本豊弘「縄文時代の狩猟活動の再検討」『月刊考古学ジャーナル』№625 2012年3月
- 20) 阿部芳郎「内陸地域における貝輪生産とその意味」『考古学集刊』第3号 2007年5月
 同氏は、貝輪製作工程と各工程に用いられた道具の関係を論じ、後期における貝輪製作と流通について考察している。そのなかで、貝輪製作の最終工程における貝輪の内面の研磨に特異な形状をなす砥石が用いられたことを指摘し、「立体有溝砥石」という名称を付している。
- 21) 阿部芳郎「船橋市金堀台貝塚採集の砥石-内陸遺跡における「立体有溝砥石」の在り方とその意義-」『飛ノ台史跡公園博物館研究紀要』第7号 2010年3月
- 22) 佐藤孝雄・大内千年編「国指定史跡 上高津貝塚A地点-史跡整備に伴う発掘調査報告書-」土浦市教育委員会 1994年3月
- 23) 井上義安・金子浩昌・藝沼香未由・根本睦子「大貫台地埋蔵文化財発掘調査報告書」第2冊 2000年3月
- 24) 鶴岡英一ほか「市原市西広貝塚Ⅲ 上総国分寺台遺跡調査報告XⅧ」『市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書』第2集 2007年3月
- 25) 残存率が低かったり、表面が研磨されていたりして放射線の観察が困難だった資料については、サルボウ属とした。
- 26) 忍澤成規「ものが語る歴史22 貝の考古学」同成社 2011年1月
- 27) 福越正行「貝器」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣 1983年
- 28) 註27)と同じ。
- 29) 註26)と同じ。同書では、チョウセンハマグリ製の資料を「舌状貝器」とし、「へら状貝製品」の一分類として扱っている。
- 30) 西本豊弘氏の御教示による。
- 31) 註3)と同じ。

参考文献

- ・瓦吹堅「茨城県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究会基礎資料集 列島における縄文時代の諸様相』縄文時代文化研究会 2001年12月
- ・瓦吹堅「茨城の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 1992年3月
- ・阿部芳郎編「先史文化研究の新視点Ⅲ 土偶と縄文社会」雄山閣 2012年5月

付 章 1

上境旭台貝塚の動物遺体

大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

西本 豊弘

はじめに

上境旭台貝塚の2011年度の発掘調査で出土した動物遺体は、貝殻を除いて約8,000点である。そのうち、哺乳類と鳥類は約6,000点であり、その内容を報告する。この年度の調査では、小さく粉碎された骨が少ないことから、前年度で報告した部分とは異なり、攪乱された貝層の部分は少なく、かなりの部分が縄文時代の堆積をそのまま残していると思われる。

動物骨の内容は、23 B区（第2号貝層）と23 E区（第1号貝層）に分けて記載したが、23 B区の方が多い。いずれの区もイノシシとシカが大部分であり、それよりも小さな中型獣は少ない。その中で、オオヤマネコの左側肩甲骨が1点含まれていた。また、今回の資料では鳥類の骨がよく残っており、カモ類を主体にフクロウやワシ類・アオサギなどが認められた。なお、魚類については、クロダイ・スズキ・ボラなどが出土しているが、分類が不十分であり、別の機会に改めて報告する。

1 哺乳類

今回報告する発掘区でも、従来通りイノシシとシカが主体である。主要な部位の数量は、イノシシ444点、シカ288点である。イノシシとシカでは上下顎骨に注目し、乳歯と第1・2・3後臼歯の萌出と摩耗の状態から年齢を幼獣（約1歳未満）・若獣（1歳から3歳未満）・成獣（約3歳以上）の3段階に区分して最小個体数を推定した。その結果、イノシシは幼獣5個体・若獣9個体・成獣13個体の計27個体となった。シカは、幼獣2個体・若獣2個体・成獣2個体の計6個体となった。なお、未分類の遊離を加えると個体数は若干増加するが、イノシシが多いという傾向は変わらないであろう。

その他の哺乳類ではタヌキが多く、キツネ・アナグマ・ノウサギ・テン・オオヤマネコ・イス・イルカが認められた。オオヤマネコは昨年度の報告で3点出土しているが、今回は成獣の左側肩甲骨であった。オオヤマネコはあまり捕獲される動物ではないので、昨年度の右側四肢骨と同一個体の可能性がある。

2 鳥類

鳥類は、カモ類が主体である。カモ大型としたものはマガモやカルガモ程度の大きさの種である。カモ中小型としたものはミコアイサ程度のカモであり、カモ中型はそれらの間に入るオシドリなどの大きさのカモである。この他に、ガン大型としたヒシクイやハクチョウ？・カイツブリ類・アオサギ・小型のウミガラス・ウ類・カモメ類・キジ類・ツル類・カラス・フクロウ類・ワシ類などが認められた。

まとめ

今回報告する動物遺体の内容は、シカ・イノシシ主体である。攪乱を受けていない部分が多いためか、鳥類の骨も良く残っており、昨年度の報告に比べて多くの種が確認された。なお、これまで報告できなかった魚類を含めて、上境旭台貝塚の動物遺体全体について、別の機会に報告する予定である。

表1 イノシシとシカの出土量

区画	種類	部位	完存		近位部		遠位部		他		種類	部位	完存		近位部		遠位部		他			
			L	R	L	R	L	R	L	R			L	R	L	R	L	R	L	R		
Z3 E区 第2号墳跡	イノシシ	上顎骨							43	43	シカ	上顎骨								5	3	
		下顎骨							72	60		下顎骨									26	29
		肩甲骨			19	14						肩甲骨		9	11							
		上腕骨			1	1	6	4				上腕骨		2	1	7	13					
		尺骨	1	4	2	2	3					尺骨										
		橈骨	2	10	12		2					橈骨		9	4	3	4					
		中手骨										中手骨	1	2	3	13						
		大腿骨					1	2	3			大腿骨			3	2	4	4				
		脛骨			1		8	5				脛骨					3	6				
		中足骨										中足骨	1		9	8						
		寛骨								7		10	寛骨								14	8
		踵骨	10	6	5	3	1	1				踵骨	6	7	1	1	2					
		距骨	12	9		1						距骨	13	18								
環椎								8		環椎									4			
軸椎								4		軸椎									3			
Z3 E区 第1号墳跡	イノシシ	上顎骨							2	2	シカ	上顎骨								2	2	
		下顎骨							12	8		下顎骨										
		肩甲骨			3	3						肩甲骨			1	3						
		上腕骨			1		1	1				上腕骨										
		尺骨										尺骨										
		橈骨			1							橈骨				1						
		中手骨										中手骨			2	1						
		大腿骨						1				大腿骨										
		脛骨							1			脛骨						1	1			
		中足骨										中足骨			2							
		寛骨										寛骨									2	2
		踵骨		2		1						踵骨	1			1						
		距骨	2	3								距骨	2	1								
環椎								1		環椎									1			
軸椎								1		軸椎												
			24	23	45	38	21	20				24	28	41	46	20	28					

*破片数 イノシシ 1050

シカ 762

表2 上旭台貝塚 23 B区 (第2号貝層) 出土のイノシシの上顎骨と下顎骨

上顎骨					
LRを伴うもの					
L: (M23) R: (M23)	若獣	M3 第3咬頭磨減なし			
LRとも (M3)		M3 咬頭わずかに磨減			
L: (M23) R: (M123)					
Lのみ			Rのみ		
(dm34M1)	幼獣	M1 萌出途中	(M12)	幼獣	M2 未萌出
(dm294)	幼獣		(dm1M1)	幼獣	M1 第1咬頭わずかに磨減
(I1xxD)	幼獣	I3 未萌出	(dm4)	幼獣	
(P4M123)	若獣	M3 萌出途中	(M123)	若獣	M3 未萌出
(M12) M3	若獣	M2 磨減なし・M3 未萌出	(M12)	若獣	M2 後部咬頭磨減なし
(xP3x)	若獣	磨減なし	(M23)	若獣	M3 第1咬頭のみ磨減
(xP4x)	若獣	磨減なし	(M3)	若獣	第1咬頭わずかに磨減
(P4M123)	若獣	M3 未萌出	(M12)	若獣	M2 第2咬頭磨減なし
(P234M123)	若獣	M3 第3咬頭磨減なし	(P4M12)	若獣	P3・M2ほとんど磨減なし
(P4M1)	若獣	P4 磨減なし	(M23)	若獣	M3 第3・4咬頭磨減なし
(P4M12)	若獣	P4 萌出途中	(P4M123)		M3 第3咬頭わずかに磨減
(xM12)	若獣	M2 ほとんど磨減なし	(CP12x)		♀
(P34M12)		M2 均一に磨減	(P123)		
(P4M123)			(P34)		
(M3)・M2		上記右顎骨と同一個体	(M3)		第3咬頭わずかに磨減
(P3)			(I1xx)		
(I12xCP123)		磨減進行	(P4M12)		上記と同一個体?
(M12)		M2 わずかに磨減	(M3)		第3咬頭わずかに磨減
(P23)			(xM12x)		M1 大きく破損
(M3)		軽度の磨減	(M23)		M3 第3咬頭まで磨減
(P34)			(M3)		被熱により破損大
(M12)			(xP3)		歯冠部破損
(P234x)			(P4M123)		第3咬頭わずかに磨減
(I1xx)			(P34M1)		磨減進行
(M1)			(P2)		磨減軽微
(xP3)			(I1x)		
(CP12)			(M23)		M3 第3咬頭まで磨減
(CP12)			(CxP23)		♀
(P4M123)		M3 第3咬頭磨減なし 歯列異常もしくは不正咬合?	(P4M12)		
(P4M12)			(P4M1)		P4 わずかに磨減
(P34M12)			(P34M12)		
(P34M12x)		全体に磨減	(CP123x)		♀
(P4M12)			(P34)		
(xI2xC)			(xP4M1x)		
(xP4M123)		M3 第4咬頭まで磨減	(xP2)		
(M3)		磨減進行	(P4)		
(M123)		M3 第4咬頭磨減なし	(M3)	老獣	磨減進行
(P1234)		P3 破損			

* () 内は歯式を示す。また、I: 切歯、C: 犬歯、P: 前臼歯、M: 後臼歯、dm: 乳歯、数字は順序を表す。

表3 上旭台貝塚 23 E区 (第1号貝層) 出土のイノシシの上顎骨と下顎骨

上顎骨			下顎骨		
Lのみ			Rのみ		
(dm4M1)	幼獣		(xm123)	若獣	M3 萌出途中
(P4xM2)	幼獣	P4 未萌出 M2 萌出途中	(M23)	老獣?	歯冠破損
(P4M123)	若獣	M3 未萌出	(M3)		
(xxM23)	若獣	M3 未萌出			
(M3)	若獣	萌出開始			
(P34M1)					
(xM3)		第3咬頭わずかに磨滅			
(M23)					

上顎骨			下顎骨		
Lのみ			Rのみ		
(P34M123)	若獣		(l12x)		
(xdm4M1)	幼獣		(l12x)		

表4 上境旭台貝塚 23 B区 (第2号貝層) 出土のシカの上顎骨と下顎骨

上顎骨			下顎骨		
L			R		
(dm34M1)	若獣		(dm234M1)	若獣	
(P4M1)			(P4M1)	若獣	M3 第2咬頭まで磨滅
(M23)			(P4M12)		
(M23)					
(M123)					

上顎骨			下顎骨		
L			R		
(dm34M12x)	幼獣	M3 未萌出	(dm4M12)	幼獣	M2 萌出開始
(dm234M12)	幼獣	M2 未萌出	(dm234M123)	幼獣	M3 未萌出
(P234M123)	若獣	M3 第3咬頭磨滅なし	(dm4M12)	幼獣	M2 未萌出
(dm4M123)	若獣	M3 未萌出	(xdm34M12)	幼獣	M2 萌出開始
(P23)	成獣	磨滅程度	(xdm34x)	幼獣	
(P234)	成獣		(dm4M12)	若獣	M2 未萌出
(M123)	成獣		(dm234M12)	若獣	M2 未萌出
(P234M12x)	成獣		(M3)	若獣	第2・3咬頭磨滅なし
(P234M123)	成獣		(M123)	若獣	M3 第2咬頭まで磨滅
(M12)	成獣		(M3)	成獣	
(P234M1)	成獣		(P2)	成獣	
(P234M1)	老獣	磨耗著しい	(P234)	成獣	
			(M23)	成獣	M3 まで磨滅
			(P234M123)	成獣	
			(P234)	成獣	
			(xxxM123)	成獣	M3 第3咬頭まで磨滅

表5 上境旭台貝塚 23 E 区 (第 1 号貝層) 出土のシカの下顎骨

下顎骨

L			R		
(xdm34M12)	若獣	M2 萌出途中	(dm4M12) (P22c)	幼獣	M2 萌出途中 M3 未出

表6 上境旭台貝塚出土のその他の哺乳類

種名	部位	LR	残存部位	年齢	個数
アナグマ	上顎骨	L	(P4M1)		1
アナグマ	脛骨	R	遠位部		1
イヌ	上顎歯	L	C		1
イヌ	下顎骨	L	(xx)		1
イヌ	橈骨	L	骨幹部		1
イヌ	橈骨	R	近位部		1
イヌ	中手中足骨		近位部		1
イヌ	中手中足骨				1
ノウサギ	脛骨	L	骨幹部		1
ノウサギ	尺骨	L	骨幹部		1
ノウサギ	踵骨	R			1
オオヤマネコ	肩甲骨	L			1
キツネ	後頭骨				1
キツネ	側頭骨+耳骨	R			1
キツネ	上顎骨	R	(xxP2)		1
キツネ	上顎歯	L	M1		1
キツネ or タヌキ	基節骨				1
タヌキ	上顎歯	L	C		1
タヌキ	上顎骨	R	(P4M12)		1
タヌキ	下顎骨	R			1
タヌキ	大腿骨	R	近位部		1
タヌキ	踵骨	L		若獣	1
タヌキ?	胸椎				1
タヌキ?	腰椎				1
タヌキ?	脛骨	L	遠位部		1
タヌキ or キツネ	大腿骨	R	遠位部		1
タヌキ or キツネ	基節骨				1
タヌキ?	下顎骨	L	関節変形部		1
テン	橈骨	L			1
イルカ	肋骨				1
小型除獣	脛骨	L	骨幹部		1
小型除獣	基節骨				1
小型除獣	中手中足骨				4
小型除獣	頸椎				2
小型除獣	胸椎				1
小型除獣	腰椎				1
小型除獣	破片				3

斜字体の 1 点のみ 23 E 区 (第 1 号貝層) 出土

表7 上境旭台貝塚出土の鳥類

種名	部位	左右	残存部位	年齢	個数
アオサギ	中手骨	L			1
アオサギ	中足骨	L	近位部		1
アオサギ	中足骨	R	近位部		1
アオサギ	中足骨	L	遠位部		1
アオサギ	中足骨	R	遠位部		1
アオサギ	中足骨		骨幹部		1
ウミガラス類	中手骨	R			1
ワ類	脛骨	R	遠位部		1
カモ大	鳥口骨	R			1
カモ大	肩甲骨	R			1
カモ大	上腕骨	L	近位部		1
カモ大	上腕骨	L	遠位部		1
カモ大	上腕骨	R	遠位部		1
カモ大	尺骨	R	遠位部		1
カモ大	中手骨	L	近位部		1
カモ大	中手骨	R			2
カモ大	中足骨	L			1
カモ中	鳥口骨	R	近位部		1
カモ中	上腕骨	L			2
カモ中	上腕骨	L	骨幹部		1
カモ中	上腕骨	R			1
カモ中	上腕骨	R	遠位部		1
カモ中	脛骨	L	骨幹部		1
カモ中	脛骨	R	遠位部		1
カモ中	尺骨	L			2
カモ中	尺骨	L	遠位部		1
カモ中	尺骨	R	遠位部		1
カモ中	大腸骨	L	遠位部		1
カモ中	中手骨	L			1
カモ中	中手骨	R			2
カモ中小	鳥口骨	L			1
カモ中小	上腕骨	L	近位部		1
カモ中小	橈骨	L			1
カモ中小	橈骨	L	遠位部		1
カモ中小	尺骨	L			1
カモ中小	大腸骨	R			1
カモ中小	脛骨	L	遠位部		2
カモ中小	脛骨	R	遠位部		1
カモ中小	中手骨	L			1
カモ中小	中手骨	R	近位部		2
カイツブリ	上腕骨	R	遠位部		1
カイツブリ類	中手骨	R			1
カモメ	尺骨	L	近位部		1
カモメ	尺骨	R	遠位部		1
キジ	下嘴		先端部		1
キジ	上腕骨	R	骨幹部		1
キジ	尺骨	L	遠位部		1
キジ	脛骨	L			1
キジ	中手骨	L			1
キジ	中手骨	R			3
ガン大	尺骨	L	遠位部		1
ガン中	上腕骨	R	遠位部		1
ガン小	鳥口骨	L			1
ガン?	指骨				1
ツル	脛骨	L	遠位部	若鳥	1
ハタチヨウ?	脛骨	L	骨幹部		1
ハシボソガラス	中手骨	L			1
フクロウ類	中手骨	R			1
ワシ類	中足骨	R			1
不明	大腸骨	L			1
不明	基節骨				1
鳥類			破片		19



写真1 鳥類 (1～9)・哺乳類 (10～22)

1. ワシ中足骨 2. キジ尺骨 3. カモ尺骨 4. カモ上腕骨 5. カモメ類尺骨 6. ツル頭骨

7～9. アオサギ中足骨 (7・8 遠位部, 9: 近位部) 10. オオヤマネコ肩甲骨 11. アナグマ上顎骨 12. キツネ上顎骨

13. イヌ下顎骨 14. タヌキ上顎犬歯 15. イヌ上顎犬歯 16. テン機骨 17. ノウサギ尺骨 18. タヌキ大腿骨

19. アナグマ脛骨 (後面) 20. タヌキ踵骨 21. ノウサギ踵骨 22. イヌ脛骨

(左側: 2・3・5・7・10・11・13・17・20 右側: 1・4・8・9・12・18・19・21・22)

付 章 2

上境旭台貝塚採取の白色物質・灰褐色物質の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

上境旭台貝塚は、桜川右岸の台地縁辺部に立地する。これまでの調査により縄文時代の遺構・遺物が検出されており、集落跡と考えられている。遺構のうち、第19C号住居跡では床面の可能性が指摘される層位に白色や灰褐色の集積部を伴う。

そこで、今回の分析調査では、これら白色物質や灰褐色物質がどのような素材であるかを明らかにするため、X線回折分析、微細物洗い出し分析、植物珪酸体分析を実施した。また、先に分析調査したG区の炉跡SX 4で認められた白色物質についても、素材に関する情報を得るためにX線回折分析を実施した。

2 試料

第2号貝層では、下層にある第19A・19B・19C号住居跡とされる層位から覆土にかけて、中央ベルト東側にて柱状試料4本（柱状試料1～4）と層位試料1点（試料番号5）、中央ベルト西壁の南側落ち込み部にて層位試料15点（試料番号1～15）と柱状試料1本（柱状試料16）が採取された。また、中央ベルト東側では柱状試料3に近い白色や灰褐色の集積部より4点（試料番号3-0～3-3）、中央東西ベルトでは土壌試料6点（試料番号1～6）が採取された。

分析に際しては、柱状試料3の白色物質（以下、試料aとする）、直下の灰褐色物質の集積部（以下、試料bとする）をそれぞれ抽出し、各分析項目で共用した。なお、微細物洗い出し分析については分析に必要な量に足りないため、柱状試料4の灰褐色物質の集積部も併せて用いた。また中央ベルト西壁の南側落ち込み部では、白色物質の集積部が厚い試料番号14（以下、試料cとする）を用いる。また、炉跡SX 4では、灰層から採取された試料番号7（以下、試料dとする）を用いる。分析試料の一覧を表1に示す。

表1 分析試料

試料名等	遺構	分析項目			目的
		X線	微細物	灰像	
a 中央ベルト東側3(柱状)より白色物質を抽出	SM 2下層住居跡 (SI 19B・19C)	●	●	●	白色物質の素材鑑定
b 中央ベルト東側3(柱状)より灰褐色物質を抽出 他側は東側4(柱状)の灰褐色部も加える	SM 2下層住居跡 (SI 19B・19C)	●	●	●	灰褐色物質の素材鑑定
c 中央ベルト西壁 No.14を共用	SM 2下層住居跡 (SI 19B) 炉跡	●	●	●	白色物質の素材鑑定
d No. 7を使用	炉跡 SX 4 (平成22年度調査)	●			白色物質の素材鑑定

3 分析方法

(1) X線回折分析

空気乾燥させた試料をメノウ乳鉢で磨砕・混合し、ガラス試料板に充填して、以下の条件で測定を実施する。

装置：理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu (K α)	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite 湾曲	Receiving Slit：0.3mm

Voltage : 40kV	Scanning Speed : 2° /min
Current : 40mA	Scanning Mode : 連続法
Detector : SC	Sampling Range : 0.02°
Calculation Mode : cps	Scanning Range : 3 ~ 45°

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. の X 線回折パターン処理プログラム JADE を用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

(2) 微細物洗い出し分析

試料 (47 ~ 74g) を乾燥 (40℃・48 時間) させた後、肉眼やルーペで観察し、炭化物を確認する。試料を水を満たした容器に投入し、容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す (20 ~ 30 回程度)。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。

篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実遺体や炭化材 (主に径 4mm 以上)、骨貝類などの遺物を抽出する。

(3) 灰像分析

今回の分析試料を肉眼観察したところ、植物に由来する灰が明瞭に認められなかった。そこで、以下の方法で灰の濃集と分離を試みた。

湿重 5g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュワラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) 及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、及びこれらを含む珪化組織片を近藤 (2010) の分類を参考に同定する。

4 結果

(1) X 線回折分析

X 線回折図を図 1 ~ 4 に示す。図中上段が試料の回折パターンであり、下段は検出された鉱物の回折パターンである。なお文中の () 内に示したものは、X 線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やポリタイプを有する鉱物については X 線回折では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名として包括する大分類の鉱物名を使用している。以下に、各試料の結果を述べる。

・試料 a SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 白色物質

クリストバライト (cristobalite) や方解石 (calcite) が特徴的に認められるほか、石英 (quartz) や斜長石 (曹長石: anorthite)、トリディマイト (tridymite) を示唆する回折も確認される。

・試料 b SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 灰褐色物質

石英、斜長石、クリストバライト、トリディマイト、雲母鉱物 (白雲母: muscovite) が見られるほか、方解石の存在が明瞭に認められる。さらに、赤鉄鉱 (hematite) を示唆する回折も確認される。

・試料 c SM 2 下層住居跡 (SI 19B) 灰跡 白色物質

方解石に特徴的な回折線が認められるほか、ハイドロキシルアパタイト (hydroxylapatite) の存在も確認される。

・試料 d 炉跡 SX 4 (平成 22 年度調査) 白色物質

石英や斜長石が見られるほか、ハイドロキシルアパタイトの存在が明瞭に認められる。

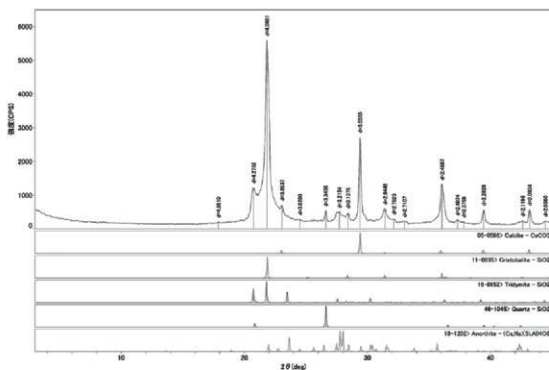


図1 試料 a SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 白色物質 X線回折図

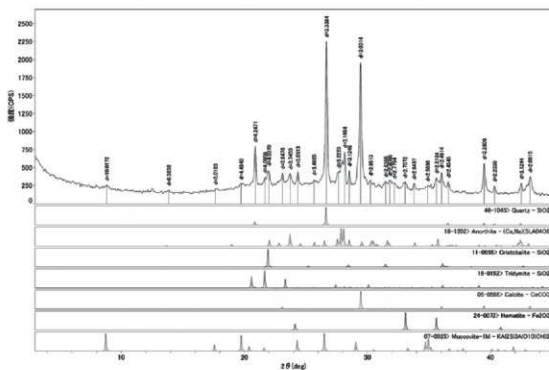


図2 試料 b SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 灰褐色物質 X線回折図

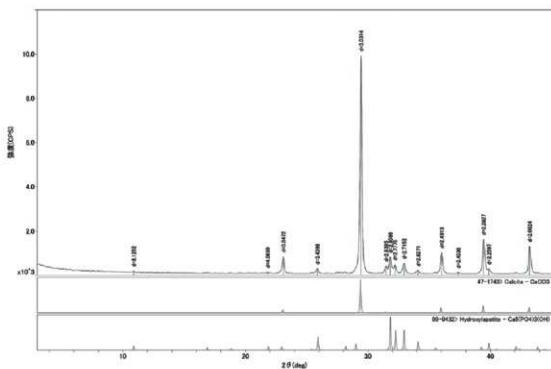


図3 試料c SM 2下層住居跡(SI 19B) 炉跡 白色物質 X線回折図

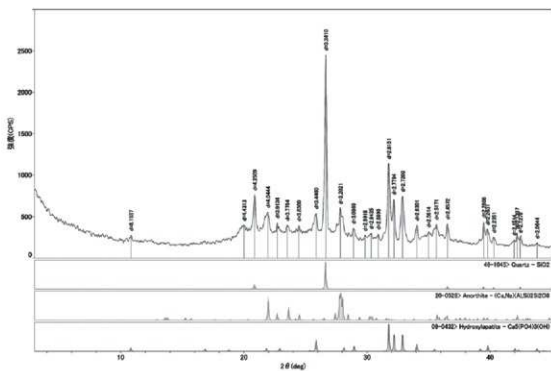


図4 試料d 炉跡 SX 4 (平成22年度調査) 白色物質 X線回折図

(2) 微細物洗い出し分析

結果を表2に示す。植物遺体は、試料 a (SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 白色物質) より炭化材 (径2mm) 1点が発出されるのみである。骨貝類では、ウニ類?, カノコガイ, カワアイ, チャツボ, 二枚貝類 (マルスタレガイ科?), 二枚貝類, 魚類, 鳥類, 種類不明骨片などが確認される。検出される骨貝類の種類数は、灰褐色物質の試料 b よりも、白色物質である試料 a 及び試料 c が多い。

表2 微細物洗い出し・分類結果

種 類	分析量 (g)	SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C)			備 考
		白色物質 試料 a	灰褐色物質 試料 b	伊勢 白色物質 試料 c	
植物遺体		46.6	52.7	73.5	
炭化材	破片 焼熟	1			径2mm
骨貝類					
ウニ類?	種 破片 焼熟	2			
腹足綱					
カノコガイ	殻 完形 焼熟			1	
カワアイ	殻 破片 焼熟	1			
チャツボ	殻 完形 焼熟			1	
二枚貝綱					
二枚貝類 (マルスタレガイ科?)	殻 破片 焼熟	1			
二枚貝類	殻 破片 焼熟		1	2	
貝類	殻 破片 焼熟	1			真珠層発達
貝類?	殻 破片 焼熟	3	17	17	
魚類	前上顎骨/歯骨/咽頭骨 破片			1	
魚類?	不明 破片	1		4	
鳥類	不明 破片 焼熟		3		
骨片	破片 焼熟		3		

(3) 灰像分析

結果を表3に示す。分析した3試料には、産状に違いが見られる。以下に各試料の産状を述べる。

・試料 a SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 白色物質

珪化組織片や単体の植物珪酸体が見られる。珪化組織片ではススキ属短細胞列が非常に多く、ネザサ節の短細胞列やネザサ節機動細胞列なども多い。

単体の植物珪酸体には珪化組織片でも見られた分類群であるネザサ節の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、ススキ属の短細胞珪酸体が認められる。

・試料 b SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 灰褐色物質

珪化組織片や単体の植物珪酸体が見られるものの、上位の白色物質と比較して珪化組織片の産出が悪い。分類群数が少なく、ネザサ節の短細胞列が発出されるだけである。

単体の植物珪酸体にはネザサ節の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、ススキ属の短細胞珪酸体のほか、ヨシ属の機動細胞珪酸体も認められる。

1,470～1,700°Cで安定して存在するとされている(図6)。ただし、これらの鉱物がどのような理由で検出されたか現段階では明らかにできず、周辺の地山に含まれていたものが混入したとすれば粘土を混ぜたことを示唆する証拠にもなり、今後周辺地山との比較など検討を重ねる必要があるだろう。

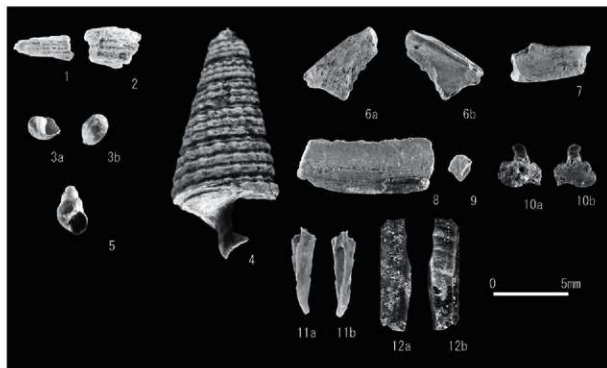
また、灰像分析で検出されたネザサ節・ススキ属などは、焚き付け等の燃料材として利用されていたと考えられるが、継続的な燃焼を維持できない。したがって、基本的には燃料材として木材が利用されていたと想定されるが、炭化材がほとんど検出されない。これは、炭化材をより分け、骨や貝殻のみ選択して集めたことを意味している可能性がある。

(2) 灰褐色物質について

第2号貝層下層住居跡(SI 19B・19C)で確認された灰褐色物質(試料b)は、基本的には試料aと類似した状況である。ただし、石英や斜長石とともに土壤に多く含まれる雲母鉱物が検出され、被熱により形成される場合がある赤鉄鉱の存在が示唆される点で違いがみられる。また、試料b中にも、焼けた貝類や骨類がみられる。これらのことから、灰褐色物質は、白色物質を焼成する際に形成された焼土と白色物質を混ぜた可能性がある。

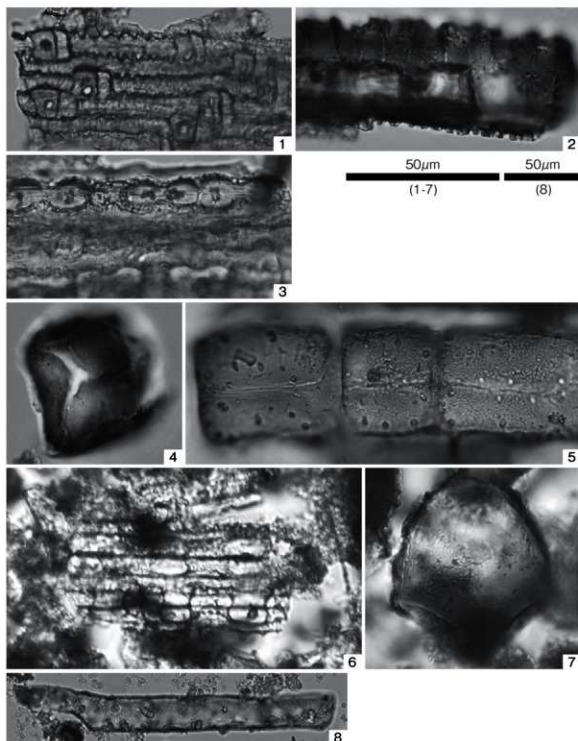
引用文献

- ・近藤謙三「プラント・オパール図譜」北海道大学出版会 387p.(2010)
- ・森本信男 砂川一郎 都城秋穂「鉱物学」岩波書店 640p.(1975)



- | | | |
|--------------------------|----------------|--------------------|
| 1. ウニ類(白色物質) | 2. ウニ類(白色物質) | 3. カノコガイ(落ち込み部) |
| 4. カワアイ(白色物質) | 5. チャツボ(落ち込み部) | 6. マルスダレガイ科?(白色物質) |
| 7. 二枚貝(灰褐色物質) | 8. 二枚貝(落ち込み部) | 9. 貝類(白色物質) |
| 10. 魚類前上顎骨/歯骨/咽頭骨(落ち込み部) | 11. 魚類?(白色物質) | 12. 鳥類(灰褐色物質) |

写真1 骨貝類



1. ネザサ節短細胞列 (試料 a : SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 白色物質)
2. ネザサ節機動細胞列 (試料 a : SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 白色物質)
3. ススキ属短細胞列 (試料 a : SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 白色物質)
4. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料 a : SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 白色物質)
5. ウシクサ族機動細胞列 (試料 a : SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 白色物質)
6. ネザサ節短細胞列 (試料 b : SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 灰褐色物質)
7. ヨシ属機動細胞珪酸体 (試料 b : SM 2 下層住居跡 (SI 19B・19C) 灰褐色物質)
8. 不明珪酸体 (試料 c : SM 2 下層住居跡 (SI 19B) 如跡白色物質)

写真2 灰像(珪化組織片)・植物珪酸体

付 章 3

上境旭台貝塚出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

1 試料

試料は、茨城県上境旭台貝塚第19C号住居跡から出土した炭化物1点、綱状炭化物1点である。

2 観察方法

炭化材の数mm立方の試料をエポキシ樹脂に包埋し研磨して、木口(横断面)、柃目(放射断面)、板目(接線断面)面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果(広葉樹1種、タケ類1点)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

(1) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (表1、写真1)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管(～500 μ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柃目では道管は単穿孔と多数の有縁穿孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

(2) イネ科タケ亜科 (Subfam. Bambusoideae) (表1、写真2)

横断面では維管束がみられる。放射断面、接線断面は採取出来なかった。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

参考文献

- ・林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所 (1991)
- ・伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載I～V」京都大学木質科学研究所 (1999)
- ・島地 謙 伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版 (1988)
- ・北村四郎 村田 源「原色日本植物図鑑本編I・II」保育社 (1979)
- ・奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
- ・奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

使用顕微鏡

Nikon DS-F11

表1 上境旭台貝塚出土木製品同定表

No.	品名	樹種
1	炭化材	ブナ科タケリ属タケリ
	副産(竹)	イネ科タケ亜科



木口

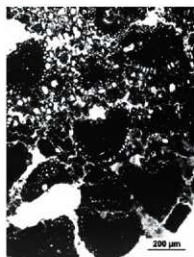


柃目



板目

写真1 ブナ科タケリ属タケリ



横断面

写真2 イネ科タケ亜科

写 真 图 版



上境旭台貝塚出土遺物



第16号住居跡P2
遺物出土状況



第16号住居跡P16
遺物出土状況



第16号住居跡
完掘状況

PL2



第17B号住居跡
土偶出土状況



第17B号住居跡
完掘状況



第17A号住居跡
遺物出土状況

第17A号住居跡
完掘狀況



第18号住居跡
遺物出土狀況



第18号住居跡
完掘狀況



PL4



第19A・19B・19C号住居跡
第2号貝層
土層断面



第19C号住居跡
網代状炭化物
検出状況



第19C号住居跡
完掘状況

第19B号住居跡
炉土層断面



第19B号住居跡
炉完掘状況



第19B号住居跡
完掘状況



PL6



第19A号住居跡
炉完掘状況



第19A号住居跡
完掘状況



第3号ピット群
完掘状況



第221号土坑 遗物出土状况



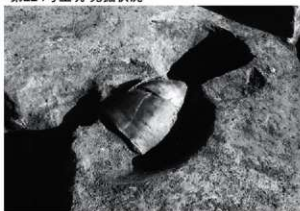
第223·239号土坑 完掘状况



第224号土坑 完掘状况



第252号土坑 遗物出土状况



第264号土坑 遗物出土状况



第276号土坑 遗物出土状况



第280号土坑 土层断面



第280号土坑 遗物出土状况

PL8



第 1 号 貝 層
断 面 (東 から)



第 1 号 貝 層
断 面 (南 から)



第 1 号 貝 層
鹿 角 出 土 状 況

第1号貝層
獣骨出土状況



第2号貝層西トレンチ
断面(南から)



第2号貝層
KB1⑦
遺物出土状況



PL10



第 2 号 貝 層
KB 2 ⑧ 1 x
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 貝 層
KB 2 ⑩ 2 x
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 貝 層
KC 1 ⑪ ⑮ 3 x
遺 物 出 土 状 況

第 2 号 貝 層
 KC 1 ⑩ 6 x
 耳 飾 切 出 土 状 況



第 2 号 貝 層
 K C 1 ⑪
 土 偶 出 土 状 況



第 2 号 貝 層
 KC 1 ⑫ 9 x
 土 偶 出 土 状 況



PL12



第 2 号 貝 層
KD 1 ② ③ 7 x
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 貝 層
KD 1 ⑪ ⑫ 11 x
遺 物 出 土 状 況



第 2 号 貝 層
KD 1 ⑬ 12 x
遺 物 出 土 状 況



第2号貝層
KD2②5x
遺物出土状況



第2号貝層
断面(南東から)

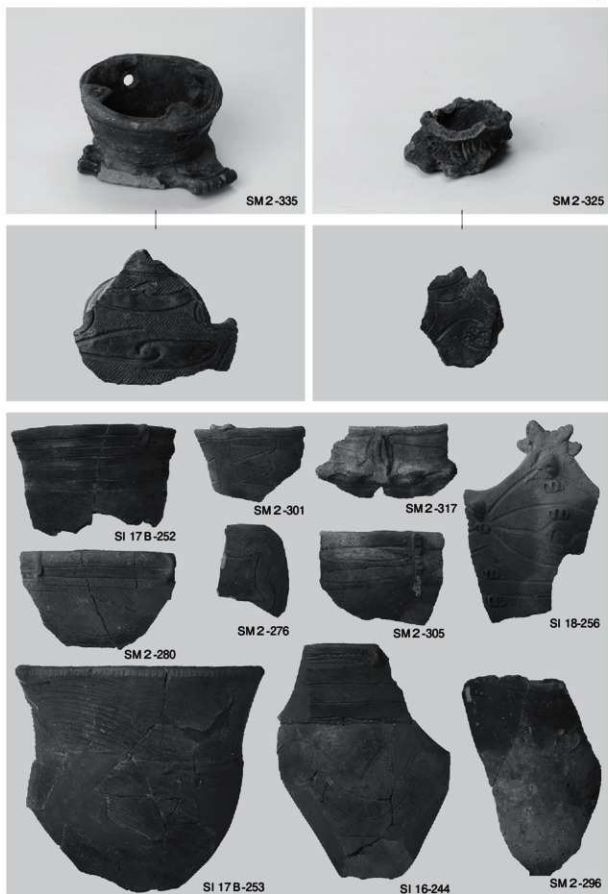


第2号貝層
断面(西から)







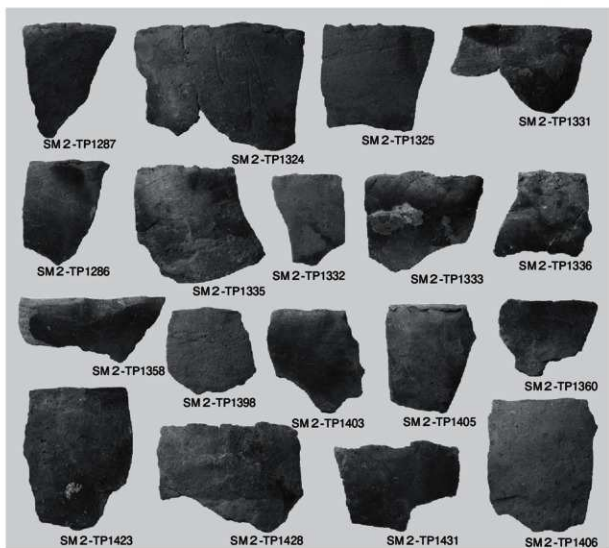


出土土器 (4)





出土土器 (6)



出土土器 (7) (下段: 第2号具層出土「製塩土器」)

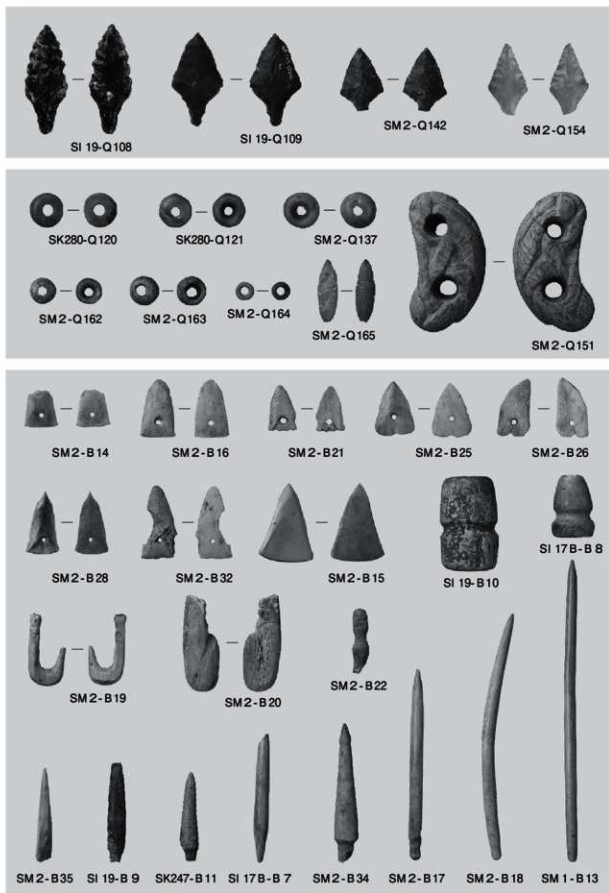




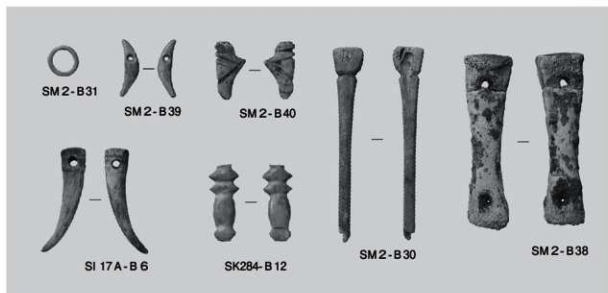
出土土偶



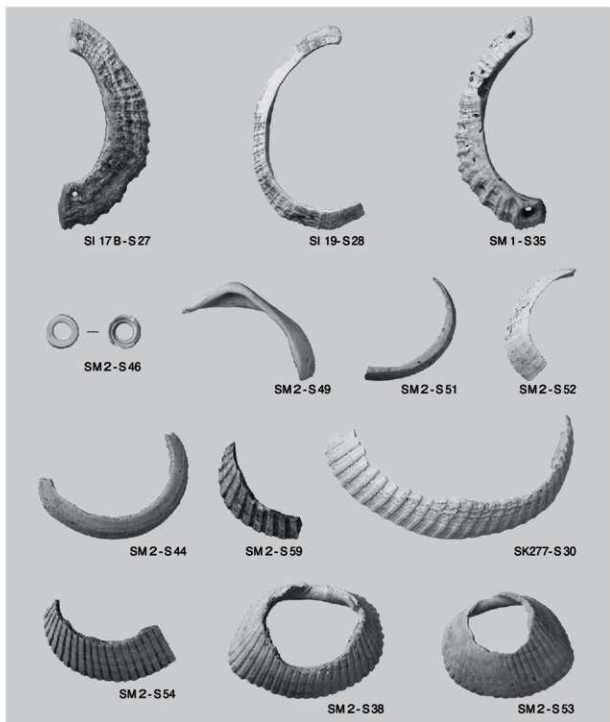
出土石器・石製品



出土石器・石製品，骨角歯牙製品



出土骨角齒牙製品，貝製品



抄 録

ふりがな	かみざかいあさひだいかいづかさん							
書名	上境旭台貝塚3							
副書名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第368集							
著者名	荒崎克一郎							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2013(平成25)年3月15日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査積	調査原因
上境旭台 貝塚	茨城県つくば市栄 字毘沙門439番地 の1ほか	08220 - 093	36度 06分 26秒	140度 07分 35秒	24 ~ 27 m	20111001 ~ 20111231	1,038 m ²	中根・金田台 特定土地区画 整理事業に伴 う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上境旭台 貝塚	貝塚	縄文	斜面貝層 2か所		縄文土器(深鉢・鉢・浅鉢・ 台付鉢・台付土器・注口土器・ ミニチュア土器・手捏土器・ 手燭形土器・製塩土器)、土 製品(耳飾り・耳栓・土偶・ 有孔装身具・土器片鏢・土 器片円盤)、石器(鏝・磨製 石斧・打製石斧・石皿・磨 石・敲石・凹石・石錘・紙 石・軽石製品)、石製品(小 玉・勾玉・石棒・石剣)、石 核、剥片、骨角歯牙製品(牙 鏃・垂飾り・髪飾り・刺突 具・釣り針・弓形骨角製品・ 有孔装身具)、貝製品(貝輪・ 貝刃・ヘラ状貝製品・有孔 装身具)、網代状炭化物、動 物遺体(貝殻・獣骨・鳥骨・ 魚骨)		第2号貝層 上層から、頭 頂部の一部を 欠いただけの ほぼ完形のミ ミズク土偶が 出土している。 第2号貝層 や堅穴住居跡 から、オオツ タノハ製の貝 輪が3点出土 している。	
	集落跡	縄文	堅穴住居跡 7軒 土坑 70基 ピット群 2か所 遺物包含層 1か所					
	その他	中世	火葬施設 1基					
要約	今回の第6次調査では、台地縁辺部と南部の斜面部から縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての集落跡と2か所の斜面貝層を確認した。斜面貝層は、ヤマトシジミ主体の鹹淡水貝塚で、台地縁辺部に分布している集落からの継続的な生活残滓の投棄によって形成されたものである。第2号貝層下の第19C号住居跡では、灰と焼土で構築した床面上に敷物と考えられる網代状の炭化物を確認し、後期後葉の住居構造を考える一助となる。また、オオツタノハ製貝輪など搬入具による貝製品や多量の製塩土器の存在、土偶・耳飾りなどの「第二の道具」や狩猟の対象であったイノシシを主体とした獣骨が多く出土していることなどから、当遺跡が内陸部と沿岸部を結ぶ交易の要地であったことがうかがえる。							

仕 様

編 集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium Service Pack 1
	レイアウト	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS4
	写真調整	Adobe Photoshop CS4
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
組 版	OpenType13級リユウミンPro・L 基本	Adobe InDesign CS5
印 刷	オフセット印刷	
写真製版	スクリーン線数	モノクロ175線 口絵カラー210線
	・印刷所へは、	Adobe InDesign CS5でレイアウトしたものを入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第368集

上境旭台貝塚 3

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ

平成25（2013）年 3月12日 印刷

平成25（2013）年 3月15日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 富士オフセット印刷株式会社

〒310-0067 水戸市根本3丁目1534-2

TEL 029-231-4241

